

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第518集

どうのうえ

## 道上遺跡第2次発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

2008

岩手県県南広域振興局農林部農村整備室

(財) 岩手県文化振興事業団

# 道上遺跡第2次発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査



遺跡遠景（南西から）



調査区全景（北から）



## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県生づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業白山地区に関連して平成18年度に発掘調査された奥州市道上遺跡第2次調査の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、平安時代に属する堅穴住居や土坑、中世後半から近世初頭に属するとみられる掘立柱建物などが検出され、平安時代の土師器や須恵器のはか、12世紀代の常滑片や青白磁片、青銅製六器など、特殊な遺物が出土しています。

今回の調査成果は古代から中近世における前沢地区の歴史を知るための貴重な資料となると思われます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局農林部農村整備室、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、厚く感謝の意を表します。

平成20年12月

財團法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 武田牧雄

## 例　　言

- 1 本報告書は、岩手県奥州市前沢区白山字合野 46-1 ほかに所在する道上遺跡第2次調査の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本発掘調査は、経営体育成基盤整備事業白山地区に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県南広域振興局農林部農村整備室との協議を経て、謝岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、委託事業として実施した。なお、費用分担は岩手県教育委員会が、岩手県南広域振興局農林部農村整備室に農家負担分を補助している。
- 3 岩手県遺跡データベース登録の遺跡コードは、NE47-0045、調査時の遺跡略号は DU-06 である。
- 4 調査開始当初の調査対象面積（当初）は 2,000 m<sup>2</sup>、調査実施面積（実績）は 2,561 m<sup>2</sup>（本調査 2,002 m<sup>2</sup> + 確認調査 559 m<sup>2</sup>）である。
- 5 発掘調査・整理期間および担当者は次のとおりである。

|      |   |
|------|---|
| 野外調査 | 平成 18 年 8 月 1 日～平成 18 年 9 月 19 日／丸山直美・高橋聰子  |
| 室内整理 | 平成 19 年 1 月 16 日～平成 19 年 3 月 31 日／丸山直美・高橋聰子 |
- 6 出土遺物の鑑定、保存処理は次の方々および機関に依頼した。

|                             |
|-----------------------------|
| プランクトン分析…株式会社古環境研究所         |
| テフラ分析・鑑定…柴 正敏（弘前大学）         |
| 石器の石材石質鑑定…矢内圭三・柳沢忠昭（花崗岩研究会） |
| 木材分析鑑定…木炭協会                 |
- 7 基準点測量および航空写真撮影は次の機関に委託した。

|                 |
|-----------------|
| 基準点測量…興国設計株式会社  |
| 航空写真撮影…東邦航空株式会社 |
- 8 野外調査・室内整理・報告書作成あたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいただいた。（敬称略・五十音順）  
石崎高臣・及川真紀（奥州市総合政策部企画調整課世界遺産登録推進室）、伊藤みどり・佐藤良和（奥州市教育委員会）、八重樫忠郎（平泉町教育委員会）、久保智康（京都国立博物館）、奥州市教育委員会、弘前大学
- 9 本書の執筆・編集・校正は丸山・高橋が行い、文末にそれぞれ名前を記した。
- 10 本書では国土地理院発行の次の地形図を使用した。

|                |       |
|----------------|-------|
| 1 / 25,000 地形図 | 水沢、前沢 |
| 1 / 50,000 地形図 | 水沢    |
- 11 調査で得られた出土遺物および調査に係る諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 調査成果の一部については、現地公開資料および「平成 18 年度発掘調査報告書」（岩文振調報第 505 集）等において公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書の記載内容が優先する。

## 目 次

|                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| I 調査に至る経過 .....                  | 1   |
| II 遺跡の環境 .....                   | 3   |
| 1 遺跡の位置と環境 .....                 | 3   |
| 2 地形的環境 .....                    | 3   |
| 3 地質的環境と基本層序 .....               | 4   |
| 4 周辺の遺跡 .....                    | 4   |
| III 調査と整理の方法 .....               | 9   |
| 1 野外調査の経過 .....                  | 9   |
| 2 野外調査の方法 .....                  | 9   |
| 3 室内整理の経過と方法 .....               | 12  |
| IV 検出遺構と出土遺物 .....               | 14  |
| 1 垂穴住居 (S I) .....               | 15  |
| 2 掘立柱建物 (S B) .....              | 15  |
| 3 上坑 (S K) .....                 | 23  |
| 4 カマド状遺構 (S X) .....             | 33  |
| 5 大溝・溝 (S D) .....               | 33  |
| 6 井戸 (S E) .....                 | 48  |
| 7 水田状遺構・畑 (S X) .....            | 49  |
| 8 柱穴列・小柱穴群 (S A) .....           | 51  |
| V 出土遺物 .....                     | 63  |
| 1 繩文土器 .....                     | 63  |
| 2 土師器・須恵器 .....                  | 63  |
| 3 陶磁器 .....                      | 64  |
| 4 土製品 .....                      | 64  |
| 5 石器・石製品 .....                   | 64  |
| 6 金属製品 .....                     | 64  |
| 7 古銭 .....                       | 65  |
| 8 自然遺物 .....                     | 65  |
| VI 分析鑑定 .....                    | 69  |
| 1 道上遺跡第2次調査におけるテフラEPMA分析 .....   | 69  |
| 2 道上遺跡第2次調査におけるプランツ・オパール分析 ..... | 70  |
| 3 道上遺跡第2次調査出土六器の自然科学的調査結果 .....  | 74  |
| VII 総括 .....                     | 79  |
| 報告書抄録 .....                      | 119 |

## 図版目次

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 第1図 岩手県全図 .....                      | 1  |
| 第2図 胆沢爾帯地における道上遺跡の位置 … 2             | 2  |
| 第3図 調査区上層断面 (A・B・C・D地点) … 5          | 5  |
| 第4図 古城・白山地区の遺跡分布図／<br>明治時代の地図圖 ..... | 7  |
| 第5図 道上遺跡第2次調査区・<br>グリッド配置 .....      | 10 |
| 第6図 道上遺跡第2次遺構配微図 .....               | 13 |
| 第7図 SI01垂穴住居 .....                   | 14 |
| 第8図 SB01掘立柱建物 (1) .....              | 17 |

|        |                   |    |
|--------|-------------------|----|
| 第 9 図  | SB01 挖立柱建物 (2)    | 19 |
| 第 10 図 | SB01 挖立柱建物 (3)    | 20 |
| 第 11 図 | SE02 挖立柱建物        | 21 |
| 第 12 図 | SB03・04 挖立柱建物     | 22 |
| 第 13 図 | SK01 土坑           | 23 |
| 第 14 図 | SK02・03 土坑        | 24 |
| 第 15 図 | SK04・05 土坑        | 26 |
| 第 16 図 | SK06・07 土坑        | 28 |
| 第 17 図 | SK08・11 土坑        | 30 |
| 第 18 図 | SK12・16 土坑        | 31 |
| 第 19 図 | SK17・21 土坑        | 32 |
| 第 20 図 | SX01・04 カマド状遺構    | 34 |
| 第 21 図 | SD01 大溝           | 35 |
| 第 22 図 | SD02・03 溝         | 36 |
| 第 23 図 | SD04・06 溝         | 38 |
| 第 24 図 | SD07 溝            | 39 |
| 第 25 図 | SD08・09・12 溝      | 40 |
| 第 26 図 | SD10・11 溝         | 42 |
| 第 27 図 | SD13・14 溝         | 44 |
| 第 28 図 | SD15 溝            | 45 |
| 第 29 図 | SE01～03 井戸        | 46 |
| 第 30 図 | SE04・05 井戸        | 47 |
| 第 31 図 | SX05 木田状遺構        | 50 |
| 第 32 図 | SX06 焼            | 51 |
| 第 33 図 | 遺構配置図 (東・西側飛び地)   | 53 |
| 第 34 図 | 遺構配置図 (中央・南側飛び地)  | 54 |
| 第 35 図 | 遺構配置図 (東・北・中央調査区) | 55 |
| 第 36 図 | 遺構配置図 (南側調査区)     | 56 |
| 第 37 図 | 遺構配置図 (西側調査区)     | 57 |
| 第 38 図 | 遺構内出土遺物 1         | 58 |
| 第 39 図 | 遺構内出土遺物 2         | 59 |
| 第 40 図 | 遺構内出土遺物 3         | 60 |
| 第 41 図 | 遺構外出土遺物 1         | 61 |
| 第 42 図 | 遺構外出土遺物 2         | 62 |
| 第 43 図 | 掘立柱建物変遷図          | 79 |
| 第 44 図 | 岩手県内出土の六器集成       | 82 |
| 第 45 図 | 「白山字合野」地籍図        | 84 |
| 第 46 図 | 方形区画を伴う屋敷跡 (想定図)  | 85 |

## 表 目 次

|        |                 |    |
|--------|-----------------|----|
| 第 1 表  | 古城・白山地区の遺跡一覧    | 6  |
| 第 2 表  | SB01 挖立柱建物柱穴計測表 | 22 |
| 第 3 表  | SB02 挖立柱建物柱穴計測表 | 22 |
| 第 4 表  | SB03 挖立柱建物柱穴計測表 | 22 |
| 第 5 表  | SB04 挖立柱建物柱穴計測表 | 22 |
| 第 6 表  | SA01 柱穴列計測表     | 22 |
| 第 7 表  | 柱穴状ピット計測表       | 52 |
| 第 8 表  | 土師器・須恵器観察表      | 66 |
| 第 9 表  | 绳文土器観察表         | 67 |
| 第 10 表 | 陶器観察表           | 68 |
| 第 11 表 | 土製品観察表          | 68 |
| 第 12 表 | 石器観察表           | 68 |
| 第 13 表 | 鉄・金属製品観察表       | 68 |
| 第 14 表 | その他(自然遺物) 観察表   | 68 |
| 第 15 表 | 古錢類別表           | 68 |

## 写真図版目次

|         |                               |     |
|---------|-------------------------------|-----|
| 写真図版 1  | 調査区全景・基本土層                    | 93  |
| 写真図版 2  | 東側飛び地/東側・<br>北側調査区全景          | 94  |
| 写真図版 3  | 中央・南・西側調査区/<br>南側飛び地全景        | 95  |
| 写真図版 4  | SI01・02 敷穴住居                  | 96  |
| 写真図版 5  | SB01 挖立柱建物                    | 97  |
| 写真図版 6  | SB02 挖立柱建物                    | 98  |
| 写真図版 7  | SB03・04 挖立柱建物                 | 99  |
| 写真図版 8  | SK01～04 土坑                    | 100 |
| 写真図版 9  | SK04～08・11 土坑                 | 101 |
| 写真図版 10 | SK09・10・12・14・<br>15 土坑       | 102 |
| 写真図版 11 | SK12・13・16～20 土坑              | 103 |
| 写真図版 12 | SK21 土坑・SX01～<br>04 カマド状遺構    | 104 |
| 写真図版 13 | SD01 大溝・SD02 溝                | 105 |
| 写真図版 14 | SD03・04 溝                     | 106 |
| 写真図版 15 | SD05～07 溝                     | 107 |
| 写真図版 16 | SD08・09 溝                     | 108 |
| 写真図版 17 | SD10～13 溝                     | 109 |
| 写真図版 18 | SD14・16～19 溝                  | 110 |
| 写真図版 19 | SE01～04 井戸                    | 111 |
| 写真図版 20 | SE05 井戸・SX05 木田状遺構、<br>SX06 焼 | 112 |
| 写真図版 21 | 小柱穴群・作業風景                     | 113 |
| 写真図版 22 | 遺構内出土遺物 1                     | 114 |
| 写真図版 23 | 遺構内出土遺物 2                     | 115 |
| 写真図版 24 | 遺構内出土遺物 3                     | 116 |
| 写真図版 25 | 遺構外出土遺物 1                     | 117 |
| 写真図版 26 | 遺構外出土遺物 2                     | 118 |

## I 調査に至る経過

経営体育成基盤整備事業白山地区は、奥州市前沢区白山地内の約270haを整備するもので、は場の多くは昭和29年～31年の非補助土地改良事業により10ha区画に整備されているが、農地幅員が2～3mと狭小で農作業の効率が悪く、水路は用排兼用土木路のため、用水不足や排水不良をきたし、維持管理に多大な労力を投じている現状である。よって本事業により省農規模拡大を目指した大区画は場とし、作業体系の受委託及び農地の流動化を促進し、経営規模拡大による担い手農家の育成を図ると共に、生産コスト低減のための整備を行い近代農業化による農業経営の安定を期するものである。

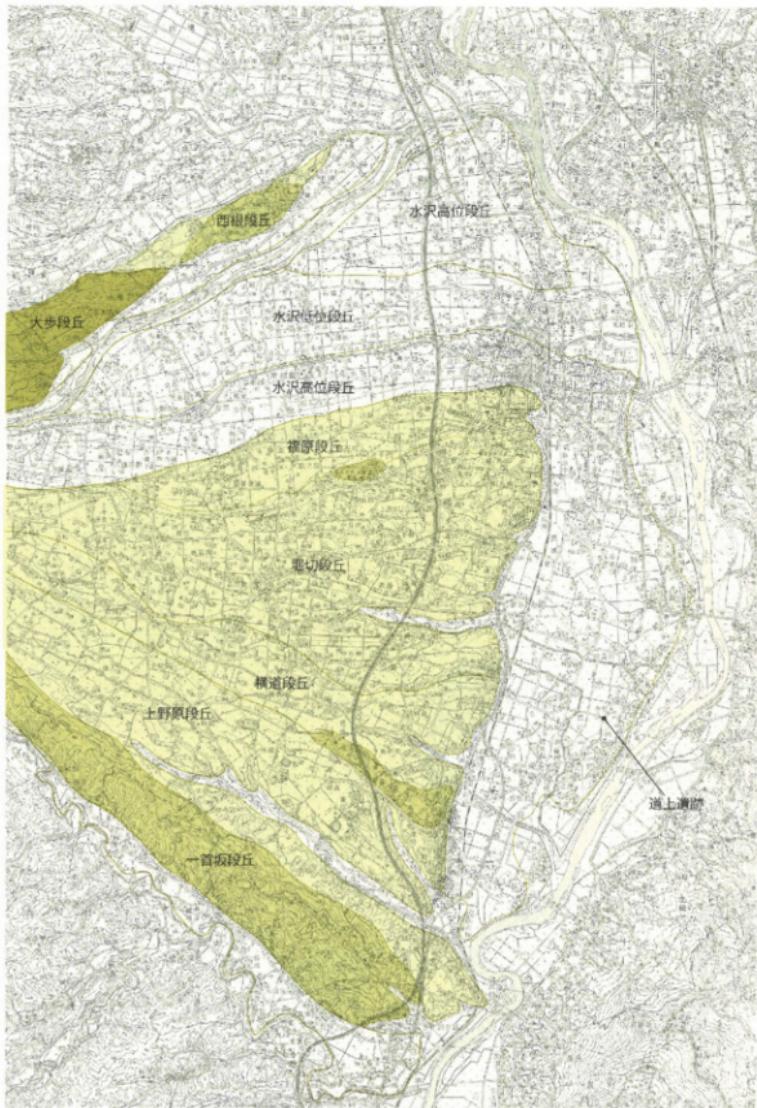
本事業の施工に係わる埋蔵文化財（道上遺跡）の取扱いについては、事業主体である水沢地方振興局農政部農村整備室（現県南広域振興局農林部農村整備室）が平成16年9月30日付け水沢農政第396-3号にて県教育委員会に試掘調査を依頼した。

県教育委員会は平成17年1月4日付け教生第1392号の試掘調査回答にて、工事に当たっては発掘調査が必要との回答を示したため、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託した。

（岩手県県南広域振興局農林部農村整備室）



第1図 岩手県全図



第2図 胆沢層状地における道上遺跡の位置

## II 遺跡の環境

### 1 遺跡の位置と環境

道上遺跡第2次調査区は、JR東北本線前沢駅から北東約4.1km、北上川右岸の海拔31～32mの河岸段丘上にある。その位置は国土地理院発行の地形図1/25,000「前沢」NJ-54-14-2図幅に含まれており、北緯39度04分30秒、東経141度09分61秒付近〔世界測地系〕である。遺跡は胆沢扇状地の水沢高位段丘面東端部の中央付近に位置し、南東側を北上川、東西双方を小河川によって両された河岸段丘の微高地上に広がっている。北上川との比高は5～6mである。現況では微高地の大部分が宅地・畠地であり、周辺の低地部分は開墾されて水田となっている。また、今回の調査区から町道を挟んで北側には平成17年度に当埋蔵文化財センターにより調査が行われた道上遺跡第1次調査区が接する。また、同じく南東方400mには、当センターにより平成8・9年に調査が行われた川岸場Ⅱ遺跡、東方500mには平成16年に調査が行われた内屋敷遺跡が位置している。

### 2 地形的環境

道上遺跡は岩手県奥州市前沢区白山字合野に所在する。奥州市は平成18年2月20日の市町村合併により、水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村の5市町村を集め新設された名称である。遺跡の所在する前沢区（旧前沢町）は岩手県南の内陸部に位置し、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれた南北に長い北上盆地にある。この盆地は南流する北上川によって盛岡以北を上流域、盛岡～前沢間を中流域、前沢以南を下流域と3区域に区分されている。前沢区はこの中流域南端に位置し、北は水沢区、東は一関市東山町、南は平泉町、西は胆沢区、衣川区と境を接している。北上川は岩手県内に南北に伸びる北上低地帯を南流し、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ全長249km、流域面積10,150m<sup>2</sup>の東北地方有数の河川である。流路は低地帯の東側に偏り、また北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どが奥羽山脈に源をもつことから、扇状地や段丘の発達は奥羽山脈側に接する西側で良好である。これらの扇状地は北上川の支流で開析され、発達した河岸段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となっている。

本遺跡の所在する前沢区においてもこの傾向はそのまま現れるが、南流する北上川によって分断される西部と東部では対照的な様相を示している。西部地域は胆沢区の若柳、市野々を扇頂部とする広大な胆沢扇状地の東部に位置する。この扇状地は南端の高位段丘面である一ヶ坂段丘（西根段丘）から、中位段丘の胆沢段丘（村崎野段丘）、低位の水沢段丘（金ヶ崎段丘）と続き、中位段丘はその比高で順次高位の上野原、横道、堀切、福原の4段丘に細分される。これら高位と中位の段丘を取り巻くように北と南、扇端部に接して低位段丘である水沢高位段丘面（北側の一部に水沢低位段丘面）が広がる。低位段丘はそれぞれ水沢高位段丘と水沢低位段丘に2細分される。この水沢段丘は南北約1.5kmの沖積低地が東西に走り谷底平野を形成する。水沢区婦体地区から前沢区白鳥川にいたる地区は、国道4号西方の段丘から流出する小河川による開析が進み、無数の沖積地を形成するとともに削り残された多くの微高地が存在する。一方、東部地域は北上山地が近くに迫る丘陵地帯を呈し、標高90m以上の侵食面と標高50～90mの段丘面が認められ、多くの小支谷によって分断されている。遺跡は、これら大小河川によって開析された沖積面、および削り残された微高地上に立地している。

### 3 地質的環境と基本層序

遺跡の層序は地点によって異なる。近世から現代までの度重なる整地造成により削平（切土）あるいは盛土されているため、南側調査区では、開田の際に周囲の残土を集めたものと見られる盛土が認められ、最も厚いところで 100 cm を測る。南側調査区、中央調査区中央部から中央飛び地にかけては縄文・古代の遺物を疊らに含む包含層（IV 層）の堆積が認められ、古代以降の遺構検出面となる。これ以下は褐色の粘質シルト（V 層）が堆積する。一方東側、北側・中央調査区の北半部付近はⅢ層までが存在せず、表土直下に V 層が露出する。本調査区においては IV 層および V 層が遺構検出面となり、プライマリーな状態の遺物包含層（稀）は IV 層のみ、V 層以下は無遺物層である。調査区内の模式的な層序は次のとおりである。

|       |  |
|-------|--|
| I 層   | 10YR 3/1 黒褐色シルト 表土・耕作土 層厚 20 cm                    |
| II 層  | 10YR 5/4 ~ 3/4 鈍い黄褐色～暗褐色シルト 盛土 層厚 0 ~ 80 cm        |
| III 層 | 10YR 4/3 ~ 2/3 鈍い黄褐色～黒褐色シルト 旧耕作土 層厚 0 ~ 20 cm      |
| IV 層  | 10YR 2/1 黒色粘質シルト 炭化物粒・焼土粒含む 層厚 20 cm 古代遺物包含層・遺構検出面 |
| V 層   | 10YR 4/4 褐色粘質シルト 地山 層厚不明 遺構検出面                     |

### 4 周辺の遺跡

奥州市前沢区では平成 20 年時点で、縄文時代から近世までの総数 145 個所の遺跡が登録されている（岩手県教委「岩手県遺跡情報検索システム」（平成 19 年 12 月 31 日現在）のデータによる）。前沢区古城・白山地区を示した第 4 図には、このうちの 55 遺跡が存在する。前沢区内においては本調査された遺跡は少数で、分布調査等によって所在が確認されているものが多数にのぼる。これまで調査の実施された主な遺跡としては本遺跡のほか、川岸場 II 遺跡、水ノ口遺跡、明後沢遺跡、寺ノ上遺跡、内屋敷遺跡、川前遺跡などがある。時代別に見ると縄文時代では水ノ口遺跡、寺ノ上遺跡、明後沢遺跡などから陥り穴状遺構がそれぞれ数基検出され、古城・白山地区の縄文遺跡の種別としては狩場跡が最も普遍的に見られる。このほか川岸場 II 遺跡からは縄文時代の竪穴住居 4 棟、土坑 10 基、埋設上器 10 基、遺物包含層が検出され、これらに伴う縄文上器（中期、後期、晚期）、土製品、石器、石製品が多量に出土している。また、遺構外からではあるが、弥生土器（小田野編年第 I、II 期相当）が比較的多く出土しており該期の貴重な資料といえる。平安時代では昭和 38 年に県史跡に指定された明後沢遺跡がある。水沢区の胆沢城跡や江刺市瀬谷子窯跡で出土しているものと同様に瓦が出土しており、古代東北開発史上重要な遺跡として位置づけられている。平成 15 年の第 16 次調査では竪穴住居 6 棟、溝 9 条、土坑 13 基が確認されたほか、これら遺構に伴う土師器や須恵器、瓦片が出土している。また、中世の遺物として源美産陶器片、常滑産陶器片、中国産磁器片、手づくりねかわらけ片が出土しており注目される。平安時代末から中世にかけては阿部氏関連の城柵と藤原氏関連の籠、柏山氏関連の城館が多数ある。また、遺物としては道上遺跡第 2 次調査（報告遺跡）から、12 世紀代のものと見られる青銅製の六器 1 点と常滑広口壺片、青白磁の小壺蓋片が出土している。中世末から近世にかけては川岸場遺跡で環濠屋敷（蒼江真澄とも交流があったとされる大肝入の屋敷跡）、近世伊達藩の御蔵場跡に伴う掘立柱建物、竪穴状遺構などが検出され、肥前陶器が多量に出土している。



第3図 調査区土層断面 (A・B・C・D地点)

第1表 古城・白山地区の遺跡一覧

| No. | 遺跡名        | 種別        | 時代            | 備考        |
|-----|------------|-----------|---------------|-----------|
| 1   | 古城外ヶ浜      | 散布地       | 绳文前期・古代       |           |
| 2   | 明後沢        | 散布地・城館跡?  | 平安            | 411集、442集 |
| 3   | 八郎篠        | 城館跡・散布地   | 绳文・平安・中世      |           |
| 4   | 宗角窓        | 城館跡       | 平安・中世         |           |
| 5   | 雁野         | 散布地       | 平安            |           |
| 6   | 轟          | 散布地・瓦窯跡?  | 绳文・平安         |           |
| 7   | 鳥子沢        | 散布地・城館跡   | 平安・中世         |           |
| 8   | 前堀         | 散布地       | 绳文・古代         |           |
| 9   | 九郎館        | 城館跡       | 中世            |           |
| 10  | 寺ノ上        | 散布地       | 古代            | 445集      |
| 11  | 寺ノ上経塚      | 経塚        | 中世            |           |
| 12  | 長者館        | 城館跡       | 中世            |           |
| 13  | 高日向        | 散布地       | 弥生・古代?        |           |
| 14  | 古城上野       | 散布地       | 绳文中期・古代       |           |
| 15  | 雷神II       | 散布地       | 绳文中期          |           |
| 16  | 古城合ノ沢I     | 集落跡?      | 绳文            |           |
| 17  | 古城合ノ沢II    | 散布地       | 绳文            |           |
| 18  | 北筋         | 環濠居敷跡     | 中世            |           |
| 19  | 北筋東I       | 散布地       | 古代            |           |
| 20  | 北筋東II      | 散布地       | 绳文・古代         |           |
| 21  | 舎合下        | 散布地       | 平安            |           |
| 22  | 鈴子田        | 散布地       | 古代            |           |
| 23  | 林I         | 散布地       | 古代            |           |
| 24  | 林II        | 散布地       | 古代            |           |
| 25  | 中畠城(柏山城)   | 城館跡       | 平安            |           |
| 26  | 中ノ町        | 環濠屋敷跡     | 中世            |           |
| 27  | 寺領沖        | 散布地       | 古代            |           |
| 28  | 水尻         | 散布地       | 绳文・古代         |           |
| 29  | 古城方八町      | 散布地       | 绳文・古代         |           |
| 30  | 要河         | 散布地・環濠居敷跡 | 古代・中世         |           |
| 31  | 龜田         | 環濠屋敷跡     | 中世            |           |
| 32  | 上ノ台        | 環濠屋敷跡     | 中世            |           |
| 33  | 木ノ口        | 集落跡       | 绳文・平安         | 330集      |
| 34  | 六日入        | 城館跡       | 古代・中世         |           |
| 35  | 稗葉田        | 散布地       | 平安            |           |
| 36  | 松葉         | 散布地       | 平安            |           |
| 37  | 学堂         | 散布地       | 平安            |           |
| 38  | 中屋敷        | 散布地       | 平安            |           |
| 39  | 合野         | 散布地       | 古代            |           |
| 40  | 川岸場I       | 散布地       | 绳文晚期・弥生・平安    |           |
| 41  | 川岸場II      | 散布地・環濠屋敷跡 | 绳文晚期・弥生・平安・近世 | 317集      |
| 42  | 大室經塚       | 一字・石経     | 中世            |           |
| 43  | 白山上野       | 散石地       | 绳文後期          |           |
| 44  | 小林蟹長       | 散布地       | 绳文中期・晚期・弥生・平安 |           |
| 45  | 麻生生城(大麻生城) | 城館跡       | 古代・中世         |           |
| 46  | 田高I        | 散布地       | 绳文            |           |
| 47  | 田高II       | 散布地・環濠跡   | 绳文前期・中期・古代・中世 |           |
| 48  | 八幡         | 散布地       | 绳文晚期          |           |
| 49  | 坂岸田        | 散布地       | 绳文・平安         |           |
| 50  | 遠畠         | 散布地       | 奈良・平安         |           |
| 51  | 学堂II       | 散布地       | 古代            |           |
| 52  | 道上         | 散布地       | 绳文・平安・中近世     | 469集      |
| 53  | 川前         | 散布地       | 古代            |           |
| 54  | 五輪經塚       | 経塚        | 平安末           |           |
| 55  | 阿部館        | 城館跡       | 中世            |           |

## 参考文献

- 前沢町教育委員会 1998「町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ古城・白山地区」岩手県前沢町文化財調査報告書第6集
- 前沢町教育委員会 2000「町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ生母地区」岩手県前沢町文化財調査報告書第10集
- 岩手県教育委員会 2004「岩手県遺跡情報検索システム CD-ROM」



第4図 古城・白山地区的遺跡分布図／明治時代の地図

### III 調査と整理の方法

#### 1 野外調査の経過

平成 18 年 8 月 1 日（火）、調査機材搬入、調査開始。調査区の杭確認作業を行った結果、調査範囲が不確実と判明。雑物撤去（草刈り）、安全防護柵設置等を行いながら調査範囲の確定を待つ。

8 月 3 日（木）、田面区画から比較的確定が容易な中央飛び地の表土除去（人力）に先行して着手。

8 月 4 日（金）、県南広域振興局より調査区の一部設計変更の要請がなされる。

8 月 7 日（月）、重機による表土除去開始。調査区の形状が細長く重機の進入路・土捨て場が限られることから、最も効率的と思われる東側および中央部飛び地→東側調査区→北側調査区→西側飛び地→中央調査区→南側調査区→南側飛び地の順に着手することとする。

8 月 10 日（木）、重機による表土除去と並行しながら、東側および中央部飛び地の造構精査を行う。これとあわせ中央～南側調査区の人力試掘も実施する。結果、薄い包含層の堆積を確認。造構の分布もこの区域に比較的集中しており、南側調査区では包含層上面で方形の掘り方に円形の当りを持つ掘立柱建物プランを複数確認。包含層の深さについては中央飛び地で調査区に沿う細いトレンチを入れたところ、最大で 20 cm 前後を測ることが判明。

8 月 18 日（金）、東側飛び地では降雨後の再検出により柱穴数が増加。いっぽう東側調査区・北側調査区・中央調査区北半部においては再検出を行った結果、殆ど造構・遺物が検出されず、精査・写真撮影の後、当区域を調査終了とする。

8 月 30 日（水）、生涯学習文化課担当者 2 名が調査区の設計変更にかかる現地確認のため来跡。

9 月 4 日（月）、調査区確定する。これを受けて南側調査区の造構精査を本格的に開始。この頃、調査の主体は西側飛び地・水路部の精査へと移行しつつあったが、調査区の確定を受けて調査員が南側調査区と水路部に分散する体制となる。西側水路部にかかる造構は当初予想より広範囲に点在しており、更に降雨による冠水、作業員不足などの条件が重なって調査は難航した（作業員 3 名増員→登録 22 名体制）。

9 月 8 日（金）午後 13 時～15 時、現地公開を開催。古城小学校 5・6 年生 26 名、白山小学校 5・6 年生 23 名を含む、周辺地区住民の方々 79 名の参加をいただく。同日、19 日撤収に向けた今後の調査日程を考慮し、作業員を増員するなどして南側調査区の掘立柱建物の精査を急ぐ（作業員 5 名増員→登録 27 名体制）。

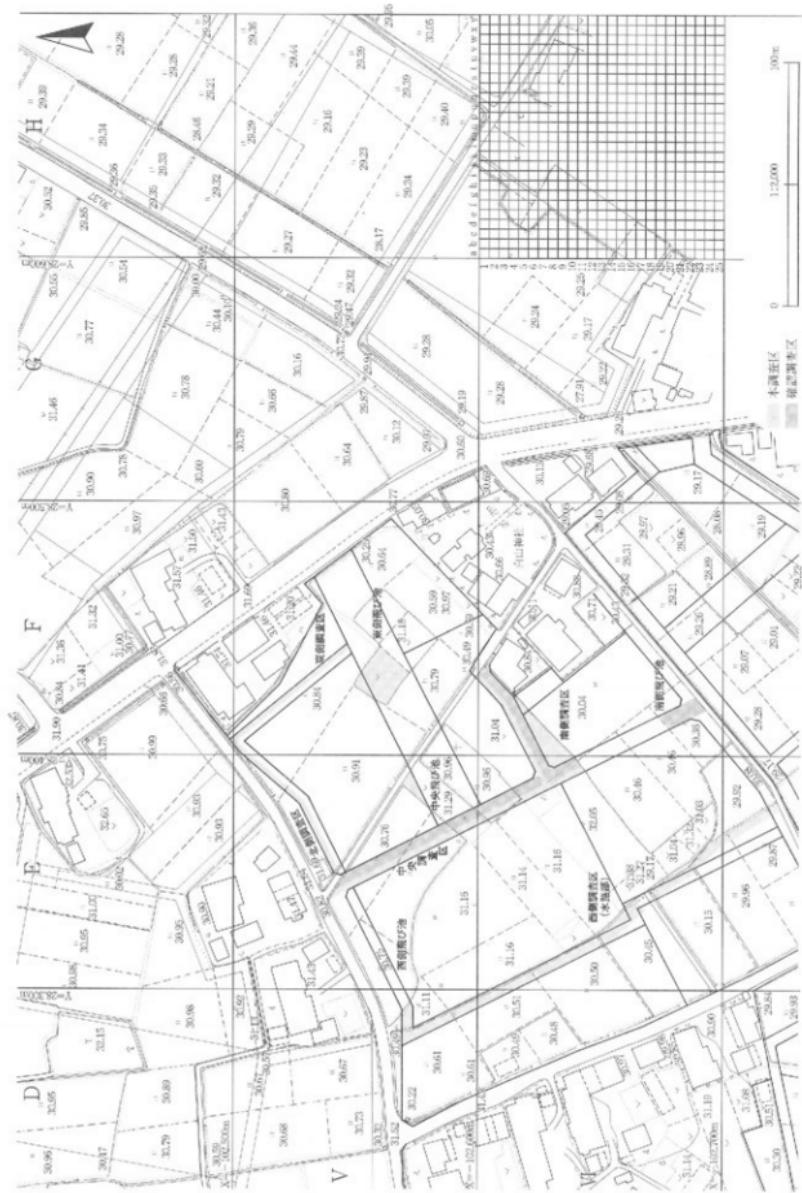
9 月 13 日（水）、南側調査区の黒色土掘削と造構精査を並行して進める。同時に東側飛び地の井戸埋め戻し作業（危険防止）、ダメ押し造構検出、畔畔除去などを実行する。

9 月 14 日（木）、南側調査区造構精査（掘立柱建物、溝、カマド状造構断ち割り）を急ぐ。同日午後 1：30 より、生涯学習文化課と県南広域振興局の立会の下、調査終了確認が実施される。

9 月 19 日（火）、野外調査終了、撤収。

#### 2 野外調査の方法

＜調査体制＞ 調査員 2 名、作業員 19 名の体制で開始。作業員については途中で増員を行い、最終的には 27 名体制とした。



第5図 道上遺跡第2次調査区・グリッド配置

＜グリッドの設定＞ 調査区は道上遺跡第1次調査区と隣接することから、このグリッドを延長して用いた。平面直角座標にあわせて調査区内を南北に通る任意の基準点1・基準点2を設定し、大グリッドはこれらの点を通るような形で、西から東に100m間隔でD・E・Fのアルファベット大文字を、北から南にIV・V・VIの昇順するローマ数字をあてて区画した。小グリッドは大グリッドを4×4mの間隔で細分し、西から東にa～yの小文字アルファベットを、北から南に向かって1～25の算用数字をあてて区画した。グリッドの基点は北西隅におき、調査区の名称は大グリッドと小グリッドの組み合わせでVE 8 k, VI F 1 cというように呼称している。

調査時に設定した基準点、補点の座標値は以下のとおりである（数値は世界測地系による）。

|                 |          |           |                 |          |           |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|
| 基準点1 X=-102,500 | Y=28,400 | H=32.168m | 基準点2 X=-102,630 | Y=28,400 | H=31.399m |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|

|                 |          |           |                 |          |           |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|
| 補助点1 X=-102,580 | Y=28,400 | H=32.681m | 補助点2 X=-102,610 | Y=28,400 | H=31.637m |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|

|                 |          |           |                 |          |           |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|
| 補助点3 X=-102,580 | Y=28,370 | H=31.400m | 補助点4 X=-102,530 | Y=28,370 | H=31.308m |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|

|                 |          |           |                 |          |           |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|
| 補助点5 X=-102,555 | Y=28,430 | H=31.667m | 補助点6 X=-102,570 | Y=28,430 | H=31.643m |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|

|                 |          |           |                 |          |           |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|
| 補助点7 X=-102,670 | Y=28,410 | H=31.132m | 補助点8 X=-102,680 | Y=28,410 | H=30.791m |
|-----------------|----------|-----------|-----------------|----------|-----------|

|                 |          |           |                  |          |           |
|-----------------|----------|-----------|------------------|----------|-----------|
| 補助点9 X=-102,570 | Y=28,300 | H=31.358m | 補助点10 X=-102,570 | Y=28,290 | H=31.446m |
|-----------------|----------|-----------|------------------|----------|-----------|

＜粗掘りと遺構検出＞ 調査区は基本的に表土が薄く、特に東側飛び地、南側飛び地、東側調査区・北側調査区・中央調査区北側は後世の地形変動の影響で表土直下が遺構検出面であった。そこで、当該地区については重機で表土除去を行っている。一方、試掘時に縄文・古代の遺物を疎らに含む遺物包含層が確認されていた中央飛び地については、人力による表土除去を行った。遺構検出面は地点によって異なる為、試掘結果に基づき人力によって遺構の有無を確認しながらV層まで掘り下げた。

＜検出遺構名＞ 野外調査では検出した遺構に対して、種別ごとに「1号堅穴住居、7号土坑、2号溝」という形で呼称し、その後、整理段階で遺構名を奥州市の凡例に沿って付け直し、それぞれその種別に応じた略号と検出順の数字を組み合わせた遺構名を使用して「S I 0 1 堅穴住居、S K 2 0 土坑、S D 0 4 溝」というかたちに改めている。

＜遺構精査＞ 遺構は種別・規模に応じた方法で精査を行った。堅穴住居は4分法により、土坑・柱穴は2分法によった。柱穴についてはプラン確認後、全体を5cm程度掘り下げて柱痕跡を確認した後、半裁した。また、大溝・溝は任意の土層ベルトを適宜残して掘り下げた。基本上層の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

＜実測＞ 各遺構とも平面実測はグリッド軸に合わせた1mのメッシュを基準として、断面実測では水平水糸を張り、これを基準として行った。また、調査区内に飛び地が多かったことから、平面測量には通常の簡易造り方測量の他に、光波トランシットによる測量を併用した。原則として1/20の縮尺を用い、必要に応じて1/40、1/100等で作成した。実測は主に2～4名の作業員が専従し、隨時調査員が点検した。

＜記録＞ 遺構堆土の記録にあたっては、「新版標準土色図」に準じて土色を判別し、粘性・締まりなどの性状、焼土・炭化物などの混入物について観察を行った。粘性・しまりについては、相対的に「強・やや強・中・やや弱・弱」の5段階に区分し、混入物は混入の様相や全体に対するおまかなか割合等を記録した。

＜写真撮影＞ 個々の遺構の写真撮影は調査員が担当し、主に35mm判カメラ2台（モノクロ、カラーリバーサル）を用い、補助的にデジタルカメラ1台（400万画素）を使用した。また必要に応じて、適宜、中判カメラ1台（6×9モノクロ）を加えて使用した。また調査終盤には、セスナを用いて、調査区および遺跡全体の航空写真撮影を行った。

### 3 室内整理の経過と方法

図面の点検・合成・遺物の洗浄・写真の整理は原則として野外調査と並行して行った。

＜遺物の処理＞ 遺物は水洗後に全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択した後、遺構内外にわけて登録し、接合・復元の順に進めた。その後、実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。

＜遺構図面＞ 遺構図面は平面図・断面図の照合、土層註記、レベル等の確認後に第二原図を作成し、その後トレース、遺構図版組の順に作業を進めた。

＜遺構図の用例＞ 遺構実測図は原則として次の縮尺で掲載している。

竪穴住居・掘立柱建物：平面・断面 1/40、竪穴住居カマド・カマド状遺構：平面・断面 1/40

土坑：平面・断面 1/40、柱穴状小ビット群：平面 1/100、断面 1/40、堀・大溝：1/40

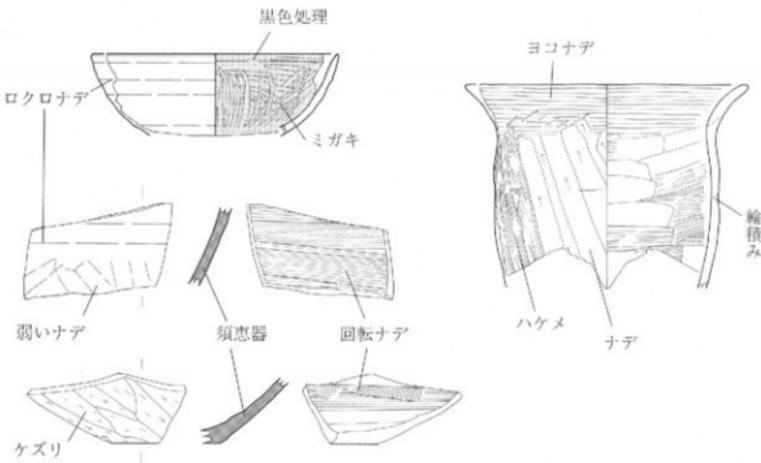
但し、遺構規模の関係上これに合わない図面もある為、その都度スケール及び縮尺を付した。

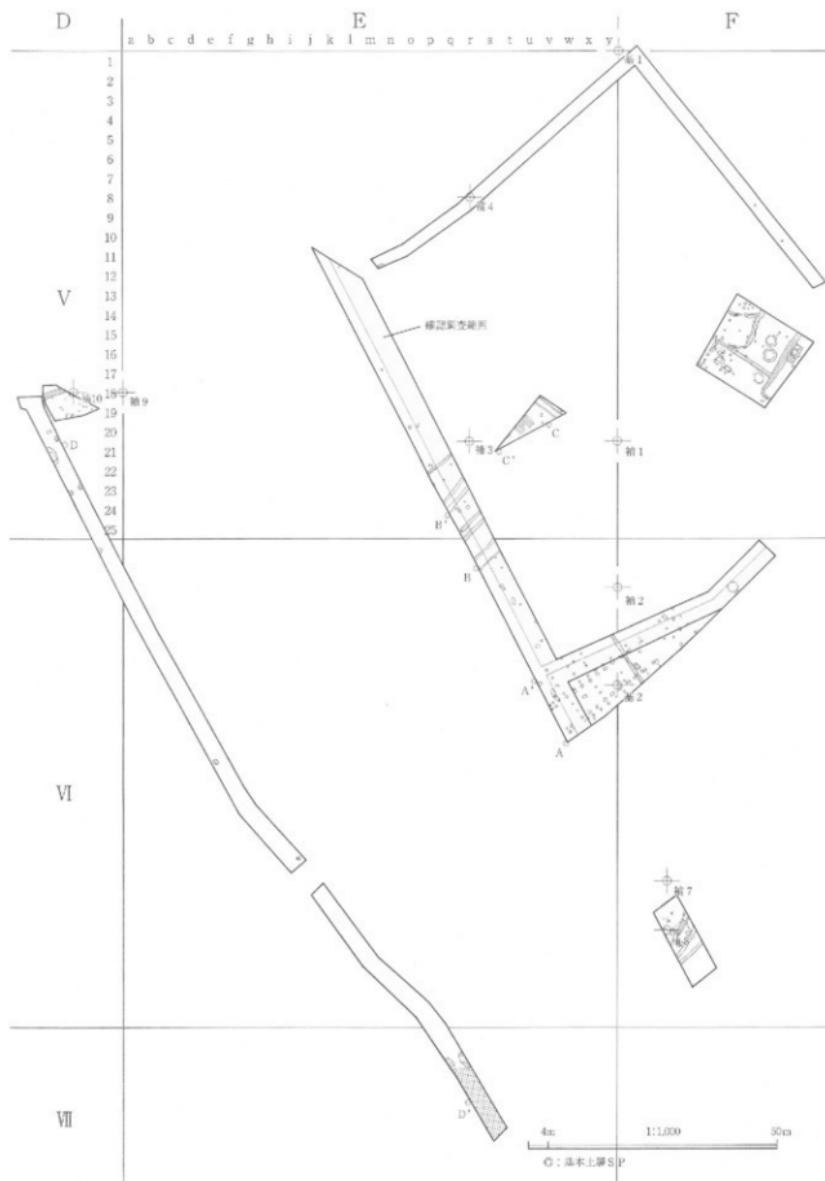
＜地形図＞ 国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

＜引用・参考文献＞ 各章末に記した。

### 凡 例

- ・ 推定線は原則として破線で表現した。これに沿わない場合は挿図中に示した。
- ・ 土器の色調観察にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務所監修「新版標準土色帖」を使用した。
- ・ 図面中の土部は「P」、雜は「S」の略号で表記した。
- ・ 挿図中で使用したスクリーントーンの用例は下図のとおりである。それ以外のものについてはその都度挿図中に記した。
- ・ 紙製品は 1/2、古銭は原寸、その他の土器・陶磁器類、石器、石製品については 1/3 縮尺で掲載した。なお、同一図版上に異なる縮尺の遺物が混在する場合は、その都度スケールおよび縮尺を付した。
- ・ 土器の実測にあたり、口縁部・底部が 1/5 以上残存する場合は努めて図上復元を試みた。
- ・ 本文および遺物觀察表の数値に冠した（ ）は推定値を、△は残存値を示している。





第6図 道上遺跡第2次造構配置図

## IV 検出遺構と出土遺物

本遺跡は北上川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は31m前後で現況は畑地である。北側には昨年度調査区が道路を挟んで隣接する。今回の対象面積2,561m<sup>2</sup>のうち、559m<sup>2</sup>は確認調査で、当該区域に関しては遺構プランを検出した段階での記録に留めている。また、細長の調査区を折半する形で一方が確認調査範囲にかかる、あるいは本調査区中央に確認調査区が存在するなど区分が一様ではなく、双方が入り組んだ形であるため、一部分が確認調査区にかかるものはすべて本調査分に含めて報告する（第6図参照）。なお、遺構の記載は種別毎に本調査区域、確認調査区域を分ける形で報告している。

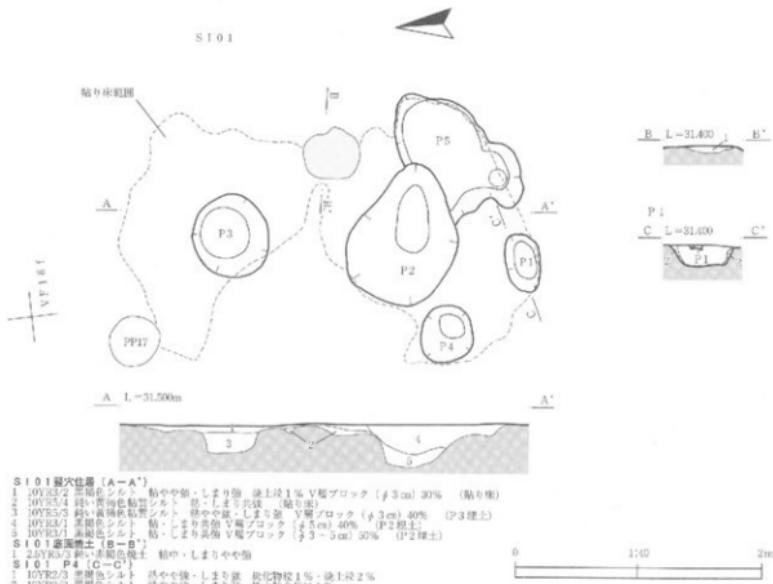
調査では縄文時代（遺物のみ）、古代（9世紀後半）、中世後半～近世初頭、時期不明の遺構・遺物が確認された。出土遺物がきわめて少数であり、遺構所属時期については形態、主軸方向などから推定している。また、遺物が共伴しない、或いは検出面・堆積土の状況等から時期を判断できない遺構も少なからず存在する。このため遺構の事実記載は時代別とせず、時代が推定できるものについては個々の内容の中で可能性を指摘した。遺構の種別と数量は以下の通りである。

竪穴住居2棟（内、確認調査分1棟。以降、カッコ内は同義）、掘立柱建物4棟、土坑21（5）

基、カマド状遺構4（3）基、大溝1条、溝18（4）条、井戸5（1）基、水田状遺構1箇所、

烟1箇所、柱穴列1列、小柱穴群103（22）個

以下、種別毎に検出した遺構と遺物について述べる。



第7図 S I 01 竪穴住居

## 1 穴 住 居

### S I O 1 穴住居（第7図、写真図版4）

〔位置・重複関係〕 東側飛び地、V F 16 f グリッドに位置する。検出面はV層で、焼土を囲む不整な暗褐色プランとして確認した。

〔規模〕 削平により、東半部の貼り床相当部しか残存していない。貼り床範囲は、最も残存する南北辺で343cm、深さは最深部で9cmを測る。

〔埋土〕 4層で構成され、地山ブロックを少量含む黒褐色シルトを主体として構成される。1・2層は貼り床埋土、3層はP 3埋土、4・5層はP 2埋土に相当する。

〔壁〕 削平のため残存しない。

〔床面〕 検出したレベルにおいて、床面は残存していない。黒褐色シルトとV層ブロックの混合土によって貼り床が施される。

〔カマド〕 東隅に構築されている。カマド本体は削平により失われており、46×39cm・厚さ4cmの不整な暗褐色焼土の範囲が確認されたのみである。

〔柱穴・ピット〕 P 1～P 5のピットが検出されている。

遺物（第38図、写真図版22）

P 1埋土から土師器片2点（环片1点・壺片1点）、西側貼り床構築土より土師器壺片2点・須恵器片2点（环片1点・壺片1点）が出土している。1の土師器環の製作に際してはロクロが使用され、底部切り離し技法は回転糸切りによる。

〔時期〕 出土した土師器・須恵器から9世紀後半と推測される。

### S I O 2 穴住居（第34図、写真図版4）

〔位置・重複関係〕 南側飛び地、VI F 21 d グリッドに位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はV層面で、畑耕作土除玄後に黒褐色のプランとして確認した。北東一南西方向に延びる新期の溝S D 1 6～S D 1 8とプラン全域で重複しており、これらにより切られる。

〔規模・平面形〕 検出したレベルで北東辺380cm、南東辺490cm、南西辺380cm、北西辺380cmの隅丸方形を呈する。

〔カマド〕 北東壁南寄りに構築されている。燃焼部相当部には85×60cmの不整な暗赤褐色を呈する焼土が形成されている。

遺物（第38図、写真図版22）

Q 1検出面より土師器环片2点と須恵器大壺片1点、Q 4検出面より土師器壺片1点が出土している。土師器环の製作に際してはいずれもロクロが使用され、内面黑色処理される。底部切り離し技法は耗耗のため不明である。

〔時期〕 出土した土師器・須恵器から9世紀後半と推測される。

## 2 掘立柱建物

### S B 0 1 掘立柱建物（第8～10図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕 南側調査区中央部、VI E 8 x～y、VI E 9 w～y、VI E 10 w～x、VI F 6 a～b、VI F 8 a～b グリッドにかけて位置する。検出面はIV層（漸移層）で、黒褐～暗褐色の円形プランと

して検出した。P P 3、15、27、36、44、45は確認調査範囲にかかるため、埋土掘削を行っていない。S B 0 2 堀立柱建物と重複しており、これを切る。

〔平面形式〕 桁行きは 2280 cm (75.25 尺)、梁間は 700 cm (23.10 尺) である。面積は 159.6 m<sup>2</sup> (約 48.36 坪) である。使用した柱穴は 47 個である。前後に下屋が付く形態を呈する。

〔建物方位〕 桁行の方向は N - 53° - E である。

〔柱間寸法〕 梁桁の柱間は 500 cm (16.5 尺) である。桁桁の柱間は 200 cm (6.6 尺)、300 cm (9.9 尺) を多用する。

遺物（第 38 図、写真図版 22）

柱穴埋土上位から、瀬戸美濃系の陶器鉢が 1 点（11）出土している。

〔時期〕 出土遺物から中世後半～近世初頭と推測される。

S B 0 2 堀立柱建物（第 11 図、写真図版 6）

〔位置・検出状況〕 南側調査区、VI E 7 ~ 9 y、VI F 6 a ~ b、VI F 7 a ~ b、VI F 8 a グリッドにかけて位置する。検出面は IV 層（漸移層）で、暗褐色～黒褐色の円形プランとして検出した。S B 0 1 堀立柱建物と重複しており、これにより切られる。

〔平面形式〕 桁行は 1240 m (40.92 尺)、梁行き 600m (19.8 尺) である。面積は 744 m<sup>2</sup> (約 22.54 坪) である。使用した柱穴は 13 個である。

〔建物方位〕 桁行の方向は N - 52° - E である。

〔柱間寸法〕 梁桁の柱間は 600 cm (19.8 尺) である。桁桁の柱間は 190 cm (6.27 尺) を多用する。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 中世後半～近世初頭と推測される。

S B 0 3 堀立柱建物（第 12 図、写真図版 7）

〔位置・検出状況〕 南側調査区、VI F 4 c、VI F 5 c ~ d、VI F 6 d グリッドにかけて位置する。検出面は IV 層（漸移層）で、暗褐色～黒褐色の円形プランとして検出した。P P 3、6、7 は確認調査範囲にかかるため、埋土掘削を行っていない。

〔平面形式〕 桁行きは 660 cm (21.78 尺)、梁間は 380 cm (12.54 尺) である。面積は 250.8 m<sup>2</sup> (約 7.6 坪) である。使用した柱穴は 8 個である。

〔建物方位〕 桁行の方向は N - 43° - W である。

〔柱間寸法〕 梁桁の柱間は 380 cm (12.54 尺)、桁桁の柱間は 220 cm (7.26 尺) である。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 中世後半～近世初頭と推測される。

S B 0 4 堀立柱建物（第 12 図、写真図版 7）

〔位置・検出状況〕 南側調査区、VI E 7 v ~ w、VI E 8 w グリッドにかけて位置する。検出面は IV 層（漸移層）で、暗褐色～黒褐色の円形プランとして検出した。P P 1 ~ 3、5、6 は確認調査区にかかるため、掘削できたのは P P 4 のみである。

〔平面形式〕 桁行き、梁間ともに 400 cm (13.20 尺) である。面積は 16 m<sup>2</sup> (約 4.85 坪) である。使用した柱穴は 6 個である。

〔建物方位〕 桁行の方向は N - 36° - W である。

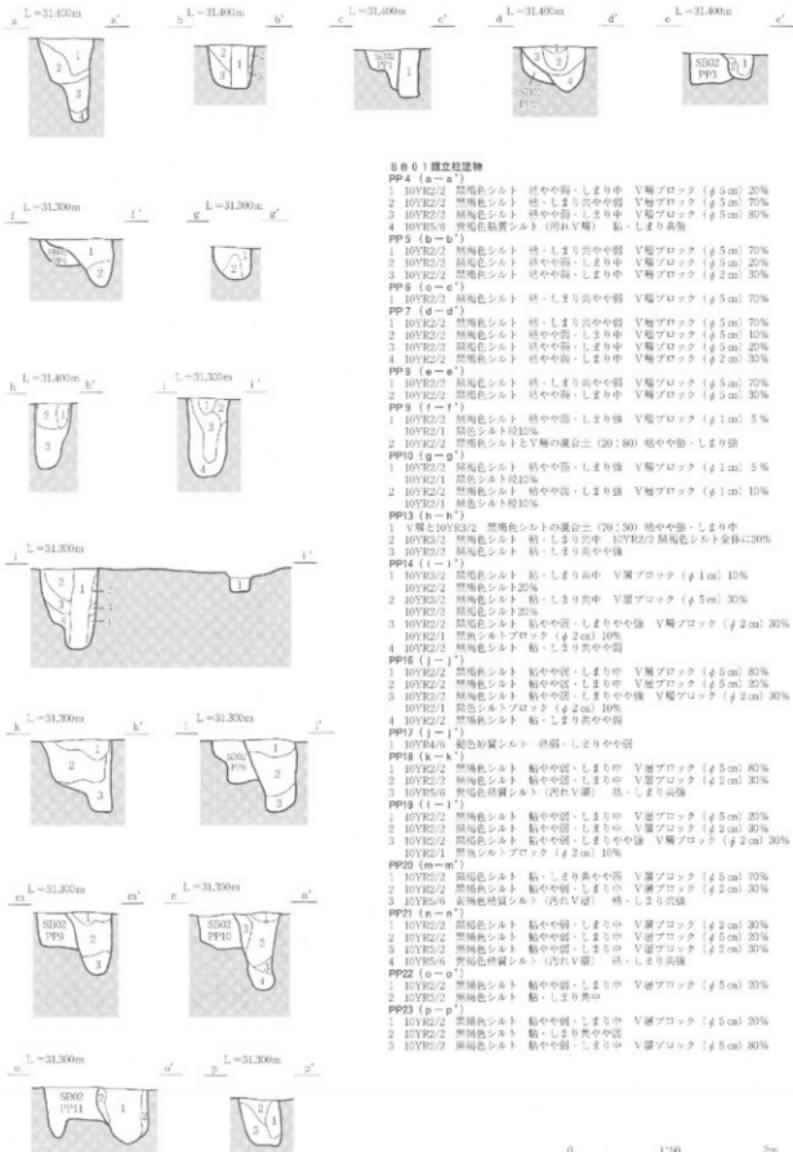
〔柱間寸法〕 梁桁の柱間は 400 cm (13.20 尺)、桁桁の柱間は 200 cm (6.6 尺) である。

〔出土遺物〕 なし。

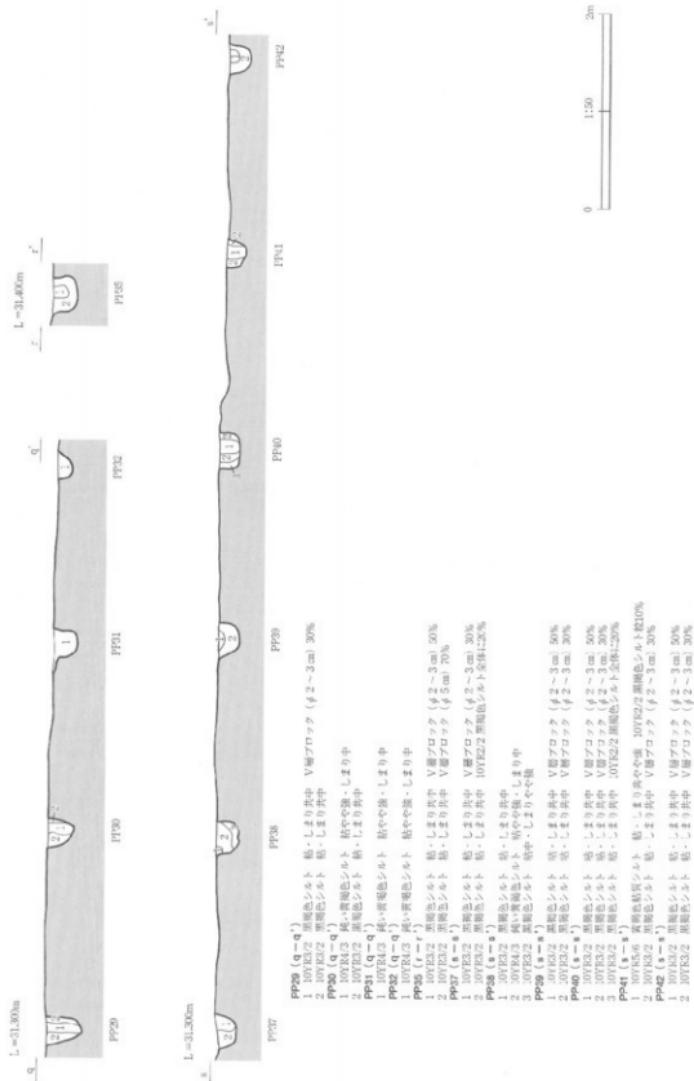
〔時期〕 中世後半～近世初頭と推測される。



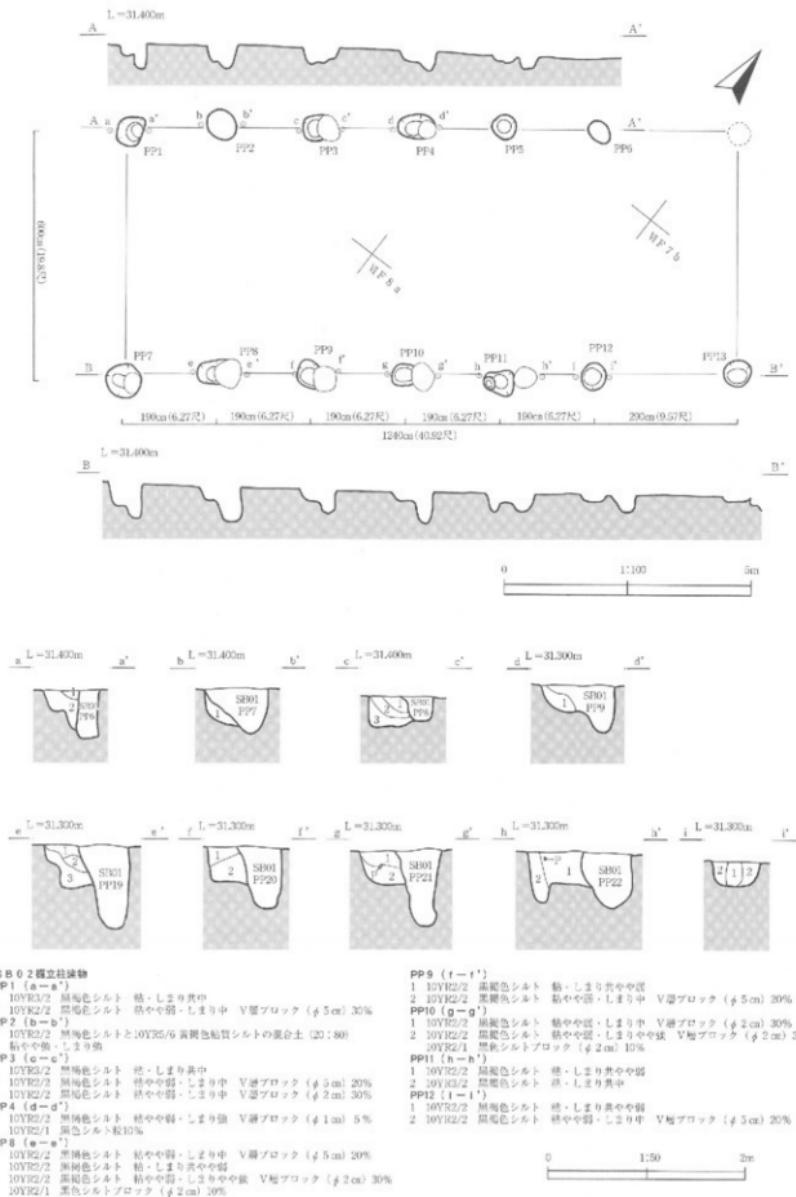
第8図 SB01 挖立柱建物(1)



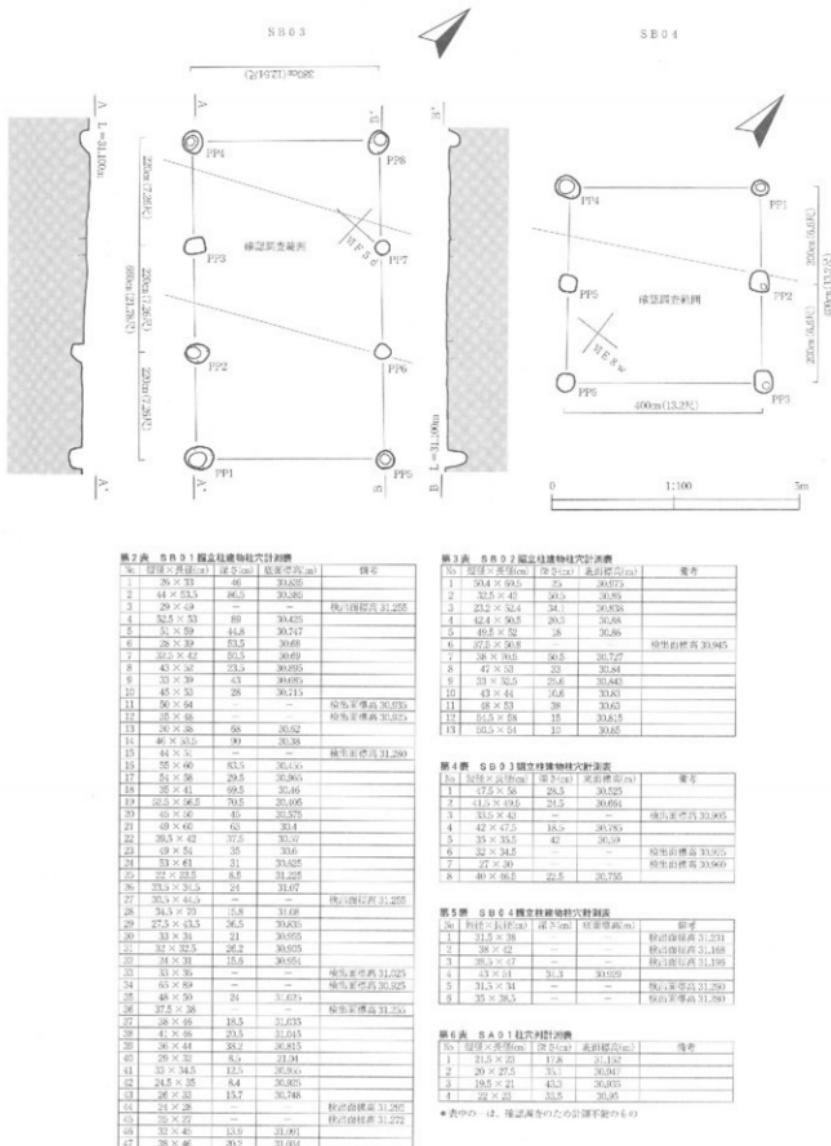
第9図 S B 0 1 挖立柱建物(2)



第10図 SB01 挖立柱建物(3)



第11図 SB 0 2 据立柱建物



第12図 SB 0 3・0 4 据立柱建物

### 3 土 坑

#### SK 01 土坑 (第 13 図、写真図版 8)

〔位置・検出状況〕 西側調査区南側、VI E 17 j グリッドに位置する。検出面は V 層地山で、水路法面の表面観察時に暗褐色の土坑プランを確認したものである。

〔規模・形状〕 開口部径 95 × 79 cm、底部径 69 × 47 cm の橢円形を呈する。断面形は U 字状で、壁は底面から内湾しながら立ち上がる。深さは最深部で 59 cm を測る。

〔埋土〕 3 層からなり、黒褐色～暗褐色シルトを主体として構成される。第 3 層は焼土ブロックを少量含む暗褐色シルト層で、層中に土師器・須恵器片を多量に含む。これら土器片は底面よりやや浮き、一括して廃棄されたような状況を示す。人為堆積の様相を呈する。

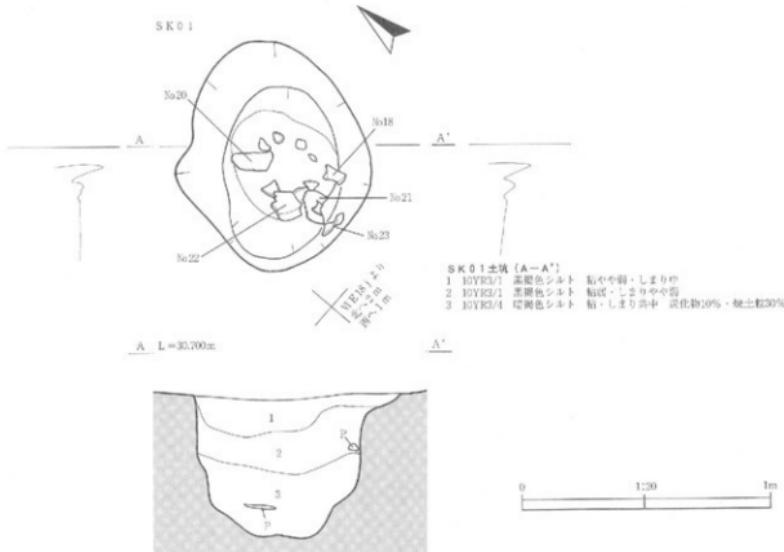
遺物 (第 38・39 図、写真図版 22~26)

第 3 層より土師器片 (壺 1 点、鉢 1 点、甕 5 点)、須恵器片 (壺 5 点、長頸瓶 1 点) が出土している。土師器は、壺の製作に際してロクロが使用され、内面黑色処理される。甕は口縁部が外傾するもので、内外面ハケメ調整が行われる。須恵器壺は、底部の切り離し技法が回転鎔切りによるものが存在する (17)。

〔時期〕 出土した土師器・須恵器から 9 世紀後半代と推測される。

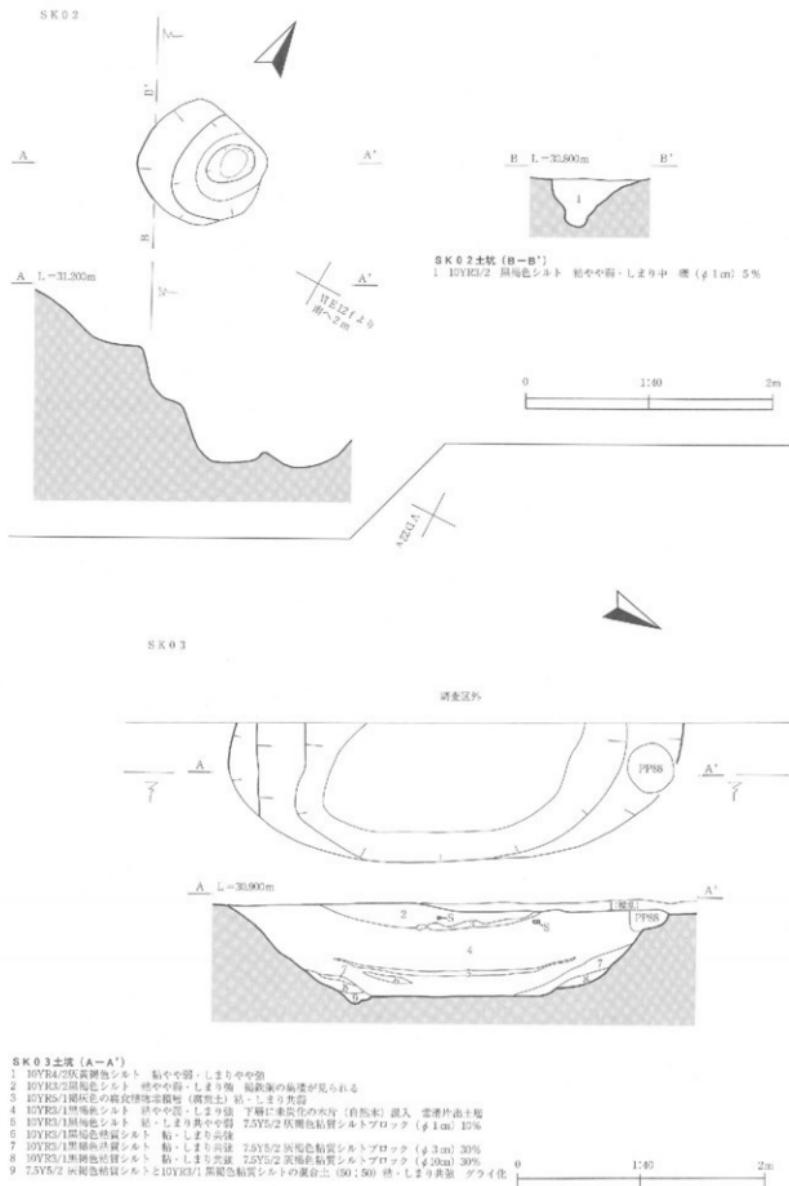
#### SK 02 土坑 (第 14 図、写真図版 8)

〔位置・検出状況〕 調査区中央部西寄り、VI E 12 e グリッドに位置する。検出面は V 層地山で、水路法面の表面観察時に暗褐色の土坑プランを確認したものである。



第 13 図 SK 01 土坑

### 3 土坑



第14図 SK 0 2・0 3 土坑

〔規模・形状〕開口部径 98 × △ 95 cm、底部径 60 × 47 cm の円形基調を呈する。断面形はV字状で、壁は底面から外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 107 cm を測る。土坑の北東側は水路造成時に切られて消失している。

〔埋土〕黒褐色シルトの単層である。

遺物（第 39 図、写真図版 22 ~ 26）

埋土中よりロクロ調整の土師器碗片 1 点と須恵器大壺片 1 点が出土している。

〔時期〕出土遺物から古くみて平安時代と推測されるが、詳細不明である。

### SK 03 土坑（第 14 図、写真図版 8）

〔位置・検出状況〕西側飛び地（水路部）、V D 21 v グリッドに位置する。検出面は V 層である。南西半部は調査区域外にかかるため未調査である。また、北東半部は水路に切られており、遺構プランの一部が消失している。

〔規模・形状〕残存する南東 - 北西方向で開口部径 366 cm、底部径 164 cm の楕円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 77 cm を測る。

〔埋土〕9 層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。埋土中に灰褐色粘土質シルトブロックを含む。第 3 層に褐色灰色の腐食植物堆積層を介する。

遺物（第 39 図、写真図版 22 ~ 26）

第 2 層より土師器鉢片 1 点と須恵器大壺片 2 点、第 4 層黒色土より青白磁小壺蓋片 1 点、未炭化的自然木小片少量が出土している。

〔時期〕出土遺物から古くみて 12 世紀代に位置づけられる可能性がある。しかし、いずれも上層から出土していること、西半部が調査区域外にかかり未調査であることから詳細は不明である。

### SK 04 土坑（第 15 図、写真図版 8・9）

〔位置・検出状況〕南側調査区中央部、VI F 7 a ~ b グリッドに位置する。検出面は IV 層下位 ~ V 層である。

〔規模・形状〕開口部径 137 × 88 cm、底部径 82 × 47 cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立して立ち上がる。深さは最深部で 31 cm を測る。

〔埋土〕2 层からなり、黒色シルト主体で構成される。下層に黄褐色地山ブロックが少量混入する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

### SK 05 土坑（第 15 図、写真図版 9）

〔位置・検出状況〕東側調査区北半部、V F 2 c グリッドに位置する。検出面は V 層地山面である。北東半部は調査区域外にかかり、未調査である。

〔規模・形状〕開口部径 139 cm、底部径 94 cm の円形基調を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から緩やかに内湾しながら立ち上がる。深さは最深部で 21 cm を測る。

〔埋土〕2 层からなり、鈍い黄褐色シルト主体で構成される。

遺物（第 39 図、写真図版 22 ~ 26）

埋土 1 層中より、古銭 1 点（寛永通寶）が出土している。

〔時期〕出土遺物から近世と推測される。

### SK 06 土坑（第 16 図、写真図版 9）

〔位置・検出状況〕東側飛び地、V F 16 i ~ j グリッドに位置する。検出面は V 層地山面である。北西側において SD 08 と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕開口部径 384 × 180 cm、底部径 323 × 100 cm の梢円形を呈する。断面形は碗状で、壁は底面から内湾しながら立ち上がる。深さは最深部で 65 cm を測る。

〔埋土〕4 層からなり、黄褐色地山ブロックを少量含む暗褐色～黒褐色シルト主体で構成される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S K 0 7 土坑 (第 16 図、写真図版 9)

〔位置・検出状況〕中央飛び地、V E 20 v グリッドに位置する。検出面は V 層地山面である。

〔規模・形状〕開口部径 115 cm、底部径 85 cm の円形基淵を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 13 cm を測る。

〔埋土〕暗褐色シルトの単層である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S K 0 8 土坑 (第 17 図、写真図版 9)

〔位置・検出状況〕東側調査区、V F 17 g グリッドに位置する。検出面は V 層地山面である。

〔規模・形状〕開口部径 165 × 98 cm、底部径 120 × 51 cm の不整円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から内湾しながら立ち上がる。深さは最深部で 21 cm を測る。

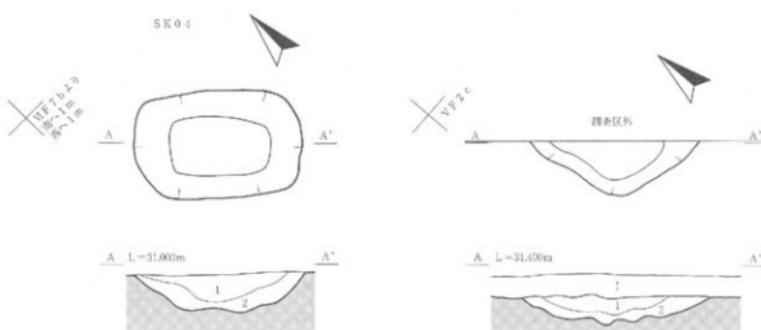
〔埋土〕黄褐色地山ブロック、炭化物ブロックを少量含む黒褐色シルトの単層である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S K 0 9 土坑 (第 17 図、写真図版 10)

〔位置・検出状況〕西側調査区、V D 20 v グリッドに位置する。検出面は V 層地山面である。



第 15 図 SK 04・05 土坑

〔規模・形状〕開口部径  $120 \times 57$  cm、底部径  $70 \times 36$  cm の楕円形を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から緩やかに内湾して立ち上がる。深さは最深部で 21 cm を測る。

〔埋土〕5 層からなり、上位は黒褐色シルト、下位は黄褐色地山粘土と黒色シルトの混合土主体で構成される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S K 1 0 土坑（第 17 図、写真図版 10）

〔位置・検出状況〕西側調査区、VI D 1 x グリッドに位置する。検出面は V 層地山面である。北東半部は水路造成時の切土により、プランが消失している。

〔規模・形状〕開口部径  $156 \times \Delta 78$  cm、底部径  $\Delta 78 \times 25$  cm の楕円形基調である。断面形は U 字状で、壁は底面から内湾して一旦直立気味に立ち上がったのち、緩やかに外傾する。深さは最深部で 34 cm を測る。

〔埋土〕5 層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。第 1・4 層に炭化物粒を少量含む。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S K 1 1 土坑（第 17 図、写真図版 9）

〔位置・検出状況〕調査区中央部南寄り、V D 20 v グリッドに位置する。検出面は V 層地山面である。

〔規模・形状〕開口部径  $20.6 \times 11.6$  cm、底部径  $14.8 \times 9.0$  cm の楕円形基調を呈する。断面形は皿状で、壁は底面から丸みをもって緩やかに立ち上がる。深さは最深部で 21 cm を測る。

〔埋土〕水路の流水が著しく、埋土の断削りを行っていない（エレベーションのみ）。断面形は碗形で、底面から緩やかに外傾する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S K 1 2 土坑（第 18 図、写真図版 10）

〔位置・検出状況〕中央調査区、V E 24 q ~ r グリッドに位置する。北東半部は確認調査区域にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面は II 層である。

〔規模・形状〕開口部径  $70 \times 65$  cm、底部径 50 cm 前後の円形を呈する。断面形は U 字状で、壁は底面から内湾しながら立ち上がる。深さは最深部で 26 cm を測る。

〔埋土〕鈍い黄褐色粘質シルトの単層である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S K 1 3 土坑（第 18 図、写真図版 11）

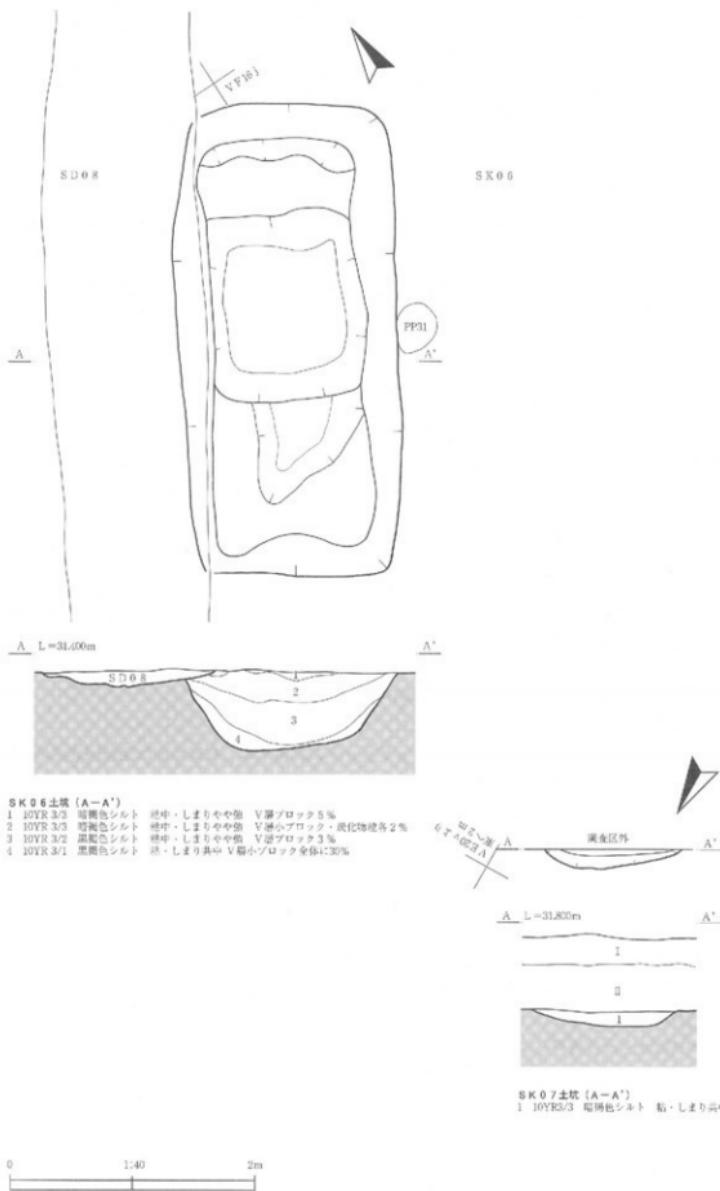
〔位置・検出状況〕南側調査区、VI E 9 x グリッドに位置する。検出面は IV 層（漸移層）である。

〔規模・形状〕開口部径  $86 \times 62$  cm、底部径  $71 \times 53$  cm の隅丸長方形を呈する。断面形はビーカー状で、壁は底面からほぼ直立して立ち上がる。深さは最深部で 20 cm を測る。

〔埋土〕2 層からなり、黒褐～暗褐色シルト主体で構成される。上層は黄褐色地山ブロックとの混合土である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。



第 16 図 SK 06・07 土坑

**S K 1 4 土坑（第 18 図、写真図版 10）**

〔位置・検出状況〕南側調査区西寄り、VI E 8 ~ 9 v グリッドに位置する。検出面はIV層下位である。南端部で S K 1 5 土坑と重複し、これを切る。

〔規模・形状〕開口部径 186 × 52 cm、底部径 164 × 39 cm の隅丸長方形を呈する。断面形は皿状で、底面から内湾して立ち上がる。深さは最深部で 14 cm を測る。

〔埋土〕焼土粒・炭化物粒・地山ブロックを少量含む黒褐色シルトの単層である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**S K 1 5 土坑（第 18 図、写真図版 10）**

〔位置・検出状況〕南側調査区南西寄り、VI E 9 v ~ w グリッドに位置する。検出面はIV層下位である。北端部で S K 1 4 土坑と重複し、これにより切られる。

〔規模・形状〕開口部径 151 × 58 cm、底部径 129 × 35 cm の隅丸長方形を呈する。断面形は皿状で、壁は外傾しながら立ち上がる。深さは最深部で 45 cm を測る。

〔埋土〕2 層からなり、上位は地山ブロックを含む黒褐色シルト、下位は鈍い黄褐色シルト主体で構成される。上位に炭化物小ブロックを少量含む。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**S K 1 6 土坑（第 18 図、写真図版 11）**

〔位置・検出状況〕南側調査区西寄り、VI E 8 v グリッドに位置する。検出面はIV層下位である。

〔規模・形状〕開口部径 79 × 69 cm、底部径 67 × 58 cm の円形を呈する。断面形は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。深さは最深部で 10 cm を測る。

〔埋土〕黄褐色地山ブロックを少量含む黒褐色シルトの単層である。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**S K 1 7 土坑（第 19 図、写真図版 11）**

〔位置・検出状況〕中央調査区南半部、VI E 5 u グリッドに位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はIV層で、表土除去後に炭化物粒を少量含む黒褐色プランとして確認したものである。

〔規模・形状〕検出した範囲では開口部径 56 cm 前後の円形基調プランを呈する。

遺物（第 39 図、写真図版 22~26）

検出時に須恵器大甕片 1 点と、常滑広口瓶片 1 点がそれぞれ出土している。

〔時期〕出土遺物から、古く見て 12 世紀代に所属する可能性がある。埋土掘削を行っていない為、詳細は不明である。

**S K 1 8 土坑（第 19 図、写真図版 11）**

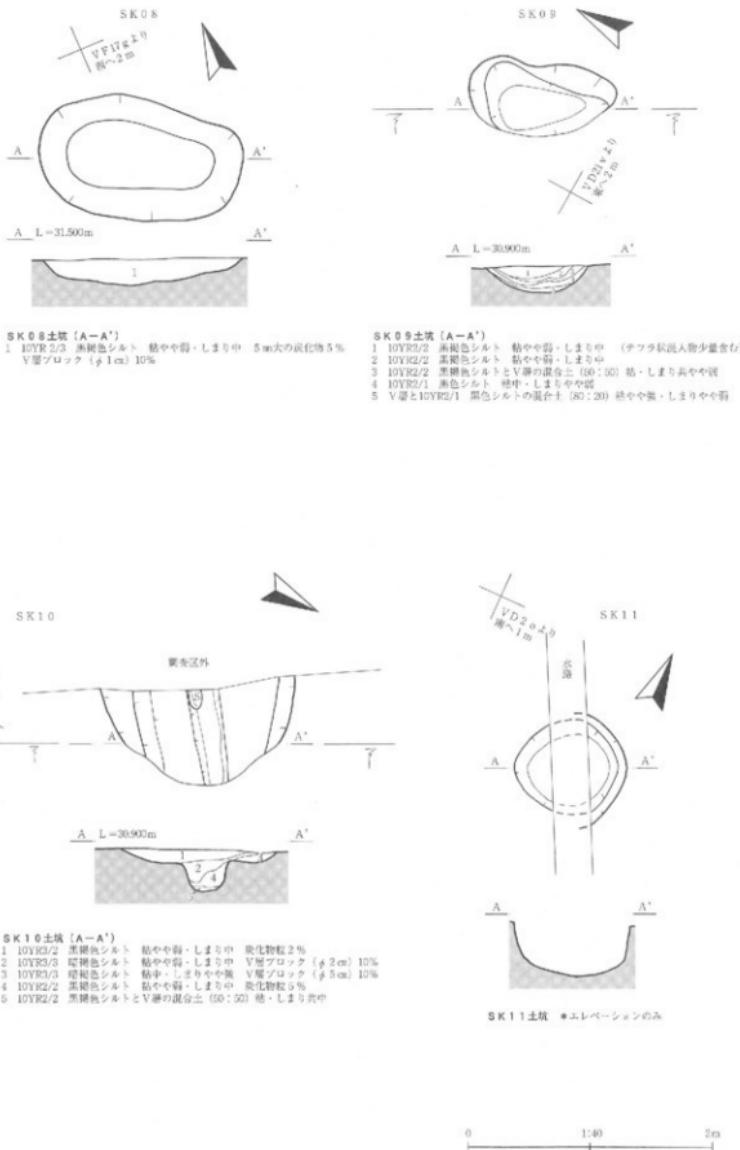
〔位置・検出状況〕中央調査区中央部、V E 24 r グリッドに位置する。確認調査区にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はIII層で、鈍い黄褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕径 80 × 60 cm の楕円形を呈する。

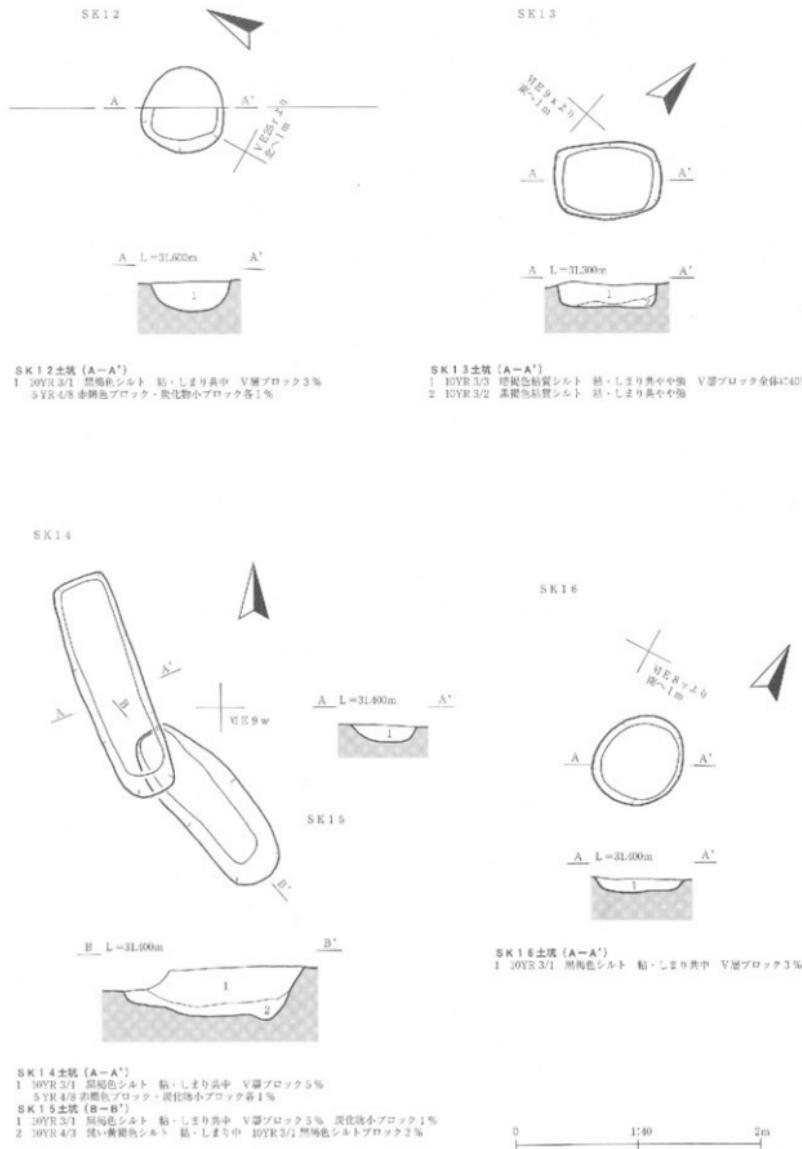
〔出土遺物〕なし。

〔時期〕埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、詳細は不明である。

### 3 土坑



第17図 SK08~11土坑



第18図 SK 1.2~1.6 土坑

**SK 19 土坑** (第19図、写真図版11)

〔位置・検出状況〕中央調査区、VI E 3 t グリッドに位置する。確認調査区にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はIV層で、黒褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕径 77 × 48 cm の橢円形を呈する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、詳細は不明である。

**SK 20 土坑** (第19図、写真図版11)

〔位置・検出状況〕中央調査区南寄り、VI E 4 t グリッドに位置する。確認調査区にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はIV層下位～V層で、黒褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕径 132 × 59 cm の橢円形を呈する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、詳細は不明である。

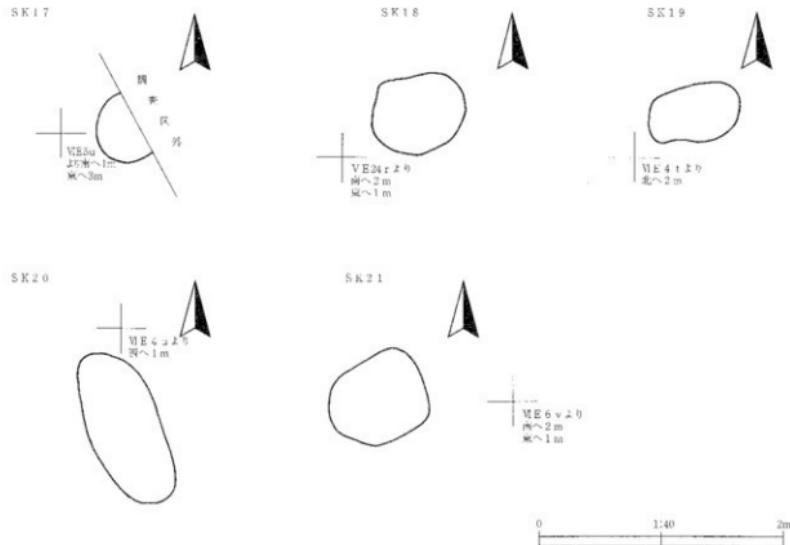
**SK 21 土坑** (第19図、写真図版12)

〔位置・検出状況〕中央調査区南側、VI E 6 u～v グリッドに位置する。確認調査区にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はIV層下位で、黒褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕径 83 × 67 cm の橢円形を呈する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、詳細は不明である。



第19図 SK 17～21土坑

#### 4 カマド状遺構

##### S X 0 1 カマド状遺構（第 20 図、写真図版 12）

〔位置・検出状況〕 南側調査区、VI F 5 c グリッドに位置する。検出面は V 層で、焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕 全長 137 × 57 cm を測り断面形は皿状である。燃焼部は 75 × 65 cm の隅丸方形を呈し、側面には厚さ 2 ~ 3 cm ほどの現地性焼土が形成されている。

〔埋土〕 黄褐色地山ブロックを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。5 mm ~ 3 cm 大の炭化材片を少量含む。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

##### S X 0 2 カマド状遺構（第 20 図、写真図版 12）

〔位置・検出状況〕 南側調査区、VI F 5 c グリッドに位置する。確認調査区にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面は V 層地山面で、焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕 全長 69 × 50 cm の梢円形を呈する。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、詳細は不明である。

##### S X 0 3 カマド状遺構（第 20 図、写真図版 12）

〔位置・検出状況〕 南側調査区、VI F 5 d グリッドに位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面は V 層地山面で、焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕 全長 84 × 57 cm を測る。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、詳細は不明である。

##### S X 0 4 カマド状遺構（第 20 図、写真図版 12）

〔位置・検出状況〕 南側調査区、VI F 8 g グリッドに位置する。確認調査範囲にかかるため、遺構埋土掘削はおこなっていない。検出面は V 層地山面で、焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕 全長 77 × 49 cm を測る。

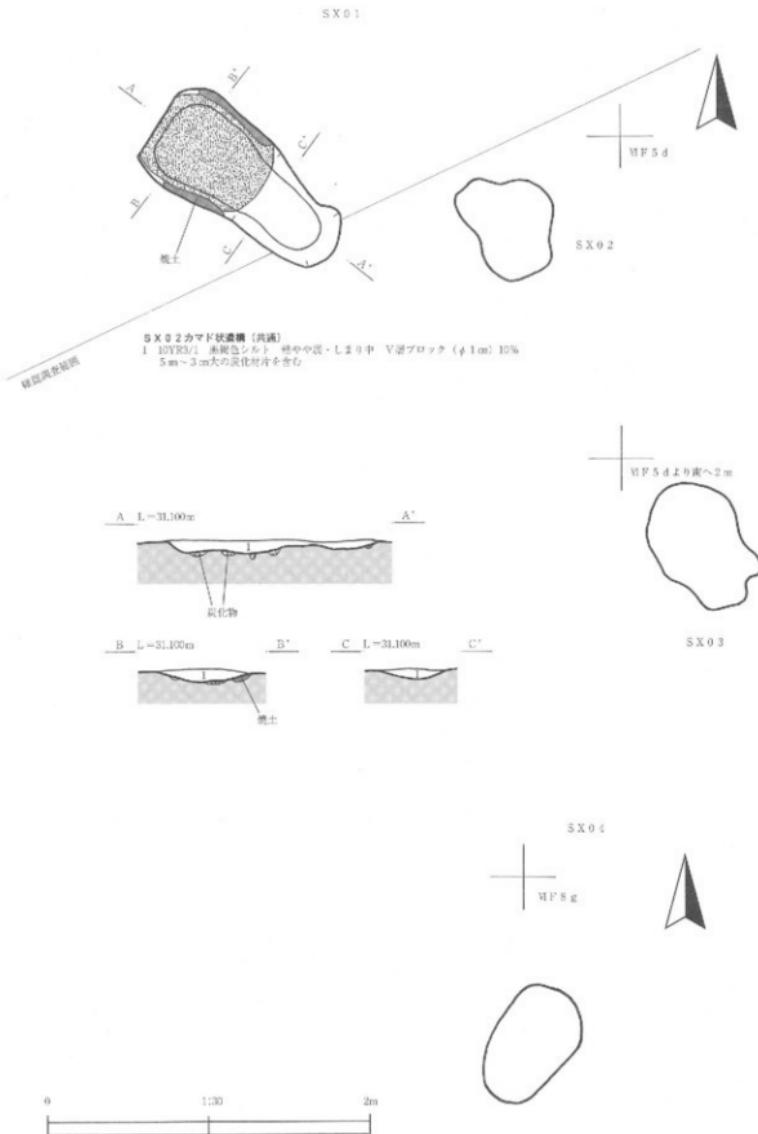
〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、詳細は不明である。

#### 5 大 溝 ・ 溝

##### S D 0 1 大溝（第 21 図、写真図版 13）

〔位置・検出状況〕 中央調査区中央部、VE 23 r、VE 23 q、VE 24 q グリッドに位置する。検出面は V ~ III 層で、黒褐色シルトの帯状プランとして検出した。北東端部、南西端部は調査区域外に延びる。



第20図 S X 01~04 カマド状遺構

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約6.65m、溝幅2.20～2.40m、深さは最深部で1.10m前後を測る。平面形は北東～南西方向に長い直線状で、断面形は逆台形状を呈する。底面は西側へ向かって低く、ごく緩やかに傾斜しており、底面両端の高低差は約8cmを測る。

〔埋土〕6層からなり、上半部は灰黄褐色～鈍い黄褐色粘質シルト、下半部は黒褐色粘質シルト主体で構成される。埋土下位から遺物が若干出土している。

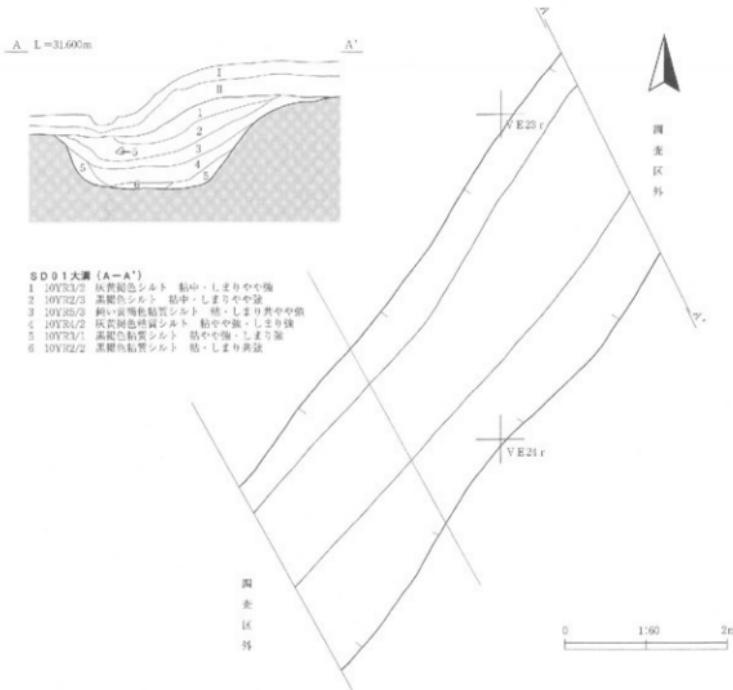
#### 遺物（第39図、写真図版22～26）

埋土下位より須恵器坏片1点、埴土上～中位より土師器残片1点、須恵器片4点（坏片1点、壺類片1点、大甕片2点）が出土地してある。須恵器坏の底部切り離し技法はいずれも回転系切りである。38は須恵器の壺類片で、頸部に篆書波状文を持つ。また、中位～上位にかけて美濃産の志野焼皿片1点が出土している（41）。

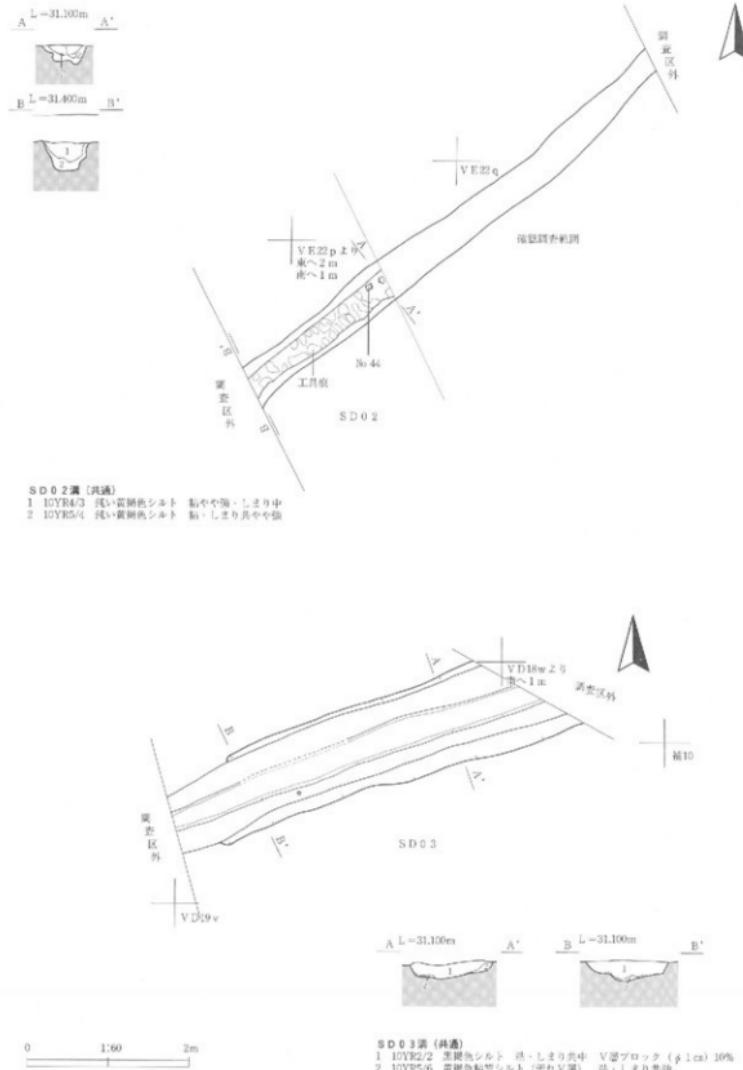
〔時期〕出土した遺物から古く見て平安時代と推察されるが、並行して走る周辺の溝と主軸方向が同一で、現在の耕地区画とは合致することなどから判断すれば近世まで新しくなる可能性も否めず、詳細は不明である。

#### S D 0 2溝（第22図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕中央調査区中央部、VE 21 q、VE 22 q、VE 22 pグリッドに位置する。検出面はV層地山面で、鈍い黄褐色シルトの帶状プランとして検出した。北東端部、南西端部は調査区域



第21図 S D 0 1 大溝



第22図 SD 02・03溝

外に延びる。北東半部は確認調査区域にかかり、検出のみに留めている。

〔規模・形状〕 調査区域内における長さ約 6.30 m、溝幅 0.40 ~ 0.52m、深さは最深部で 0.35m を測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形は U 字状を呈する。底面全域から 8 × 15 cm、深さ 10 cm 前後を測り、2 個 1 対の黒褐色を呈する梢円形プランが検出された。これらは比較的規則的に並んでおり、その形状から溝掘削時の耕具痕跡であると考えられる。溝の両端における高低差は殆どなく、平坦である。

〔埋土〕 2 層からなり、鈍い黄褐色粘質シルトを主体として構成される。

遺物（第 40 図、写真図版 22 ~ 26）

埋土より土師器壺片 1 点と須恵器壺類片 1 点、大甕片 3 点が出土している。

〔時期〕 出土した遺物から最も古く見て平安時代と推察されるが、並行して走る周辺の溝と主軸方向が同一で、現在の耕地区画とほぼ合致することなどから判断すれば近世まで新しくなる可能性も否めず、詳細は不明である。

#### S D 0 3 溝（第 22 図、写真図版 14）

〔位置・検出状況〕 西側飛び地、V D 18 v グリッドに位置する。検出面はⅣ層で、黒褐色シルトの帶状プランとして検出した。北東端部、南西端部は調査区域外に延びる。

〔規模・形状〕 調査区域内における長さ約 5.00 m、溝幅 1.21m、深さは最深部で 0.26m を測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形は U 字状を呈する。

〔埋土〕 地山小ブロックを少量含む黒褐色シルトの単層である。

遺物（第 40 図、写真図版 22 ~ 26）

埋土中より須恵器人壺片 1 点が出土している。

〔時期〕 出土遺物から最も古く見て平安時代と推察されるが、この他に時期判定の根拠を欠くため詳細は不明である。

#### S D 0 4 溝（第 23 図、写真図版 14）

〔位置・検出状況〕 中央調査区中央部、VE 25 r、VE 25 s グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、鈍い黄褐色シルトの帶状プランとして検出した。北東端部、南西端部は調査区域外に延びる。北東半部は確認調査区域にかかり、検出のみに留めている。

〔規模・形状〕 調査区域内における長さ約 5.52 m、溝幅 0.80m、深さは最深部で 0.48m を測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形は V 字状を呈する。

〔埋土〕 鈍い黄褐色粘質シルトの単層である。

遺物（第 40 図、写真図版 22 ~ 26）

埋土中より土師器壺片 1 点、須恵器坏片 1 点、甕壺類片 1 点が出土している。

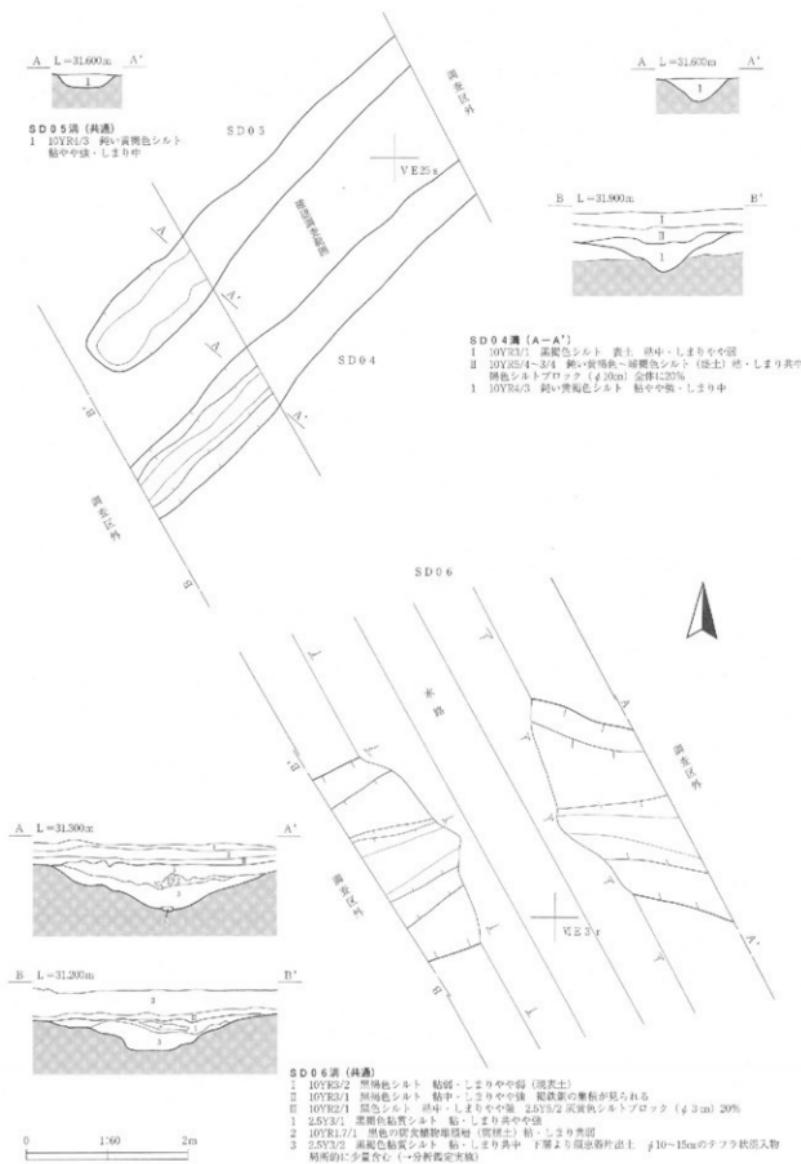
〔時期〕 出土遺物から最も古く見て平安時代と推察されるが、この他に時期判定の根拠を欠くため詳細は不明である。

#### S D 0 5 溝（第 23 図、写真図版 15）

〔位置・検出状況〕 中央調査区中央部、VE 25 r、VE 24 r グリッドに位置する。検出面はⅢ層で、鈍い黄褐色シルトの帶状プランとして検出した。北東端部は調査区域外に延びる。北東半部は確認調査区域にかかり、検出のみに留めている。

〔規模・形状〕 調査区域内における長さ約 5.34 m、溝幅 0.84 m、深さは最深部で 0.18 m を測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形は U 字状を呈する。

〔埋土〕 鈍い黄褐色粘質シルトの単層である。



第23図 SD 04~06溝

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明であるが、SD 04溝と埋土の状況及び軸方向を同じくしており、同時期の可能性がある。

#### SD 06溝（第23図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕西側飛び地南端（水路部）、ⅦE 2q、ⅦE 2rグリッドに位置する。検出面はV層地山面で、黒褐色シルトの帯状プランとして検出した。中央部は水路造成時に削られ、消失している。北東端部、南西端部は調査区域外に延びる。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約4.15m、溝幅2.60m、深さは最深部で0.40mを測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形はU～V字状を呈する。

〔埋土〕3層からなり、黒色～黒褐色粘質シルト主体で構成される。第2層は黒色の植物腐食層、第3層下位よりテフラ状混入物が10～15cm大の塊状で局所的に含まれており、十和田中振火山灰の可能性が指摘されている（テフラEPMA分析を実施：分析鑑定の項参照）。

遺物（第40図、写真図版22～26）

埋土中より土師器壺片1点、須恵器坏片1点、壺蓋類片1点が出土している。

〔時期〕十和田中振火山灰は堆積状況から二次堆積と判断される。出土遺物から古く見て平安時代と推察されるが、この他に時期判定の根拠を欠くため詳細は不明である。

#### SD 07溝（第24図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕中央飛び地、VE 19vグリッドに位置する。検出面はV層で、暗褐色シルトの帯状プランとして検出した。北西端部、南東端部は調査区域外に延びる。

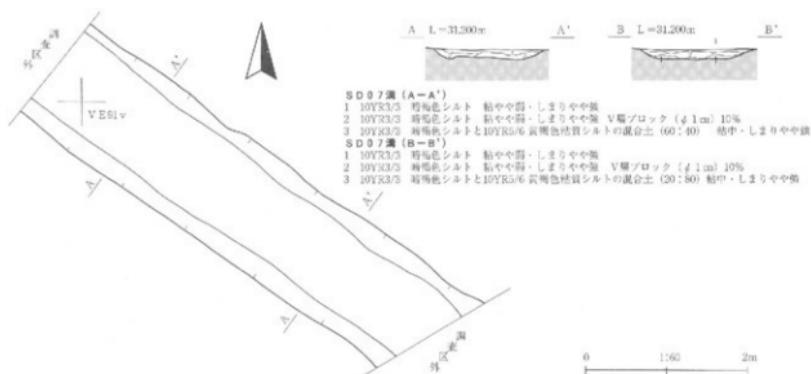
〔規模・形状〕調査区域内における長さ約6.00m、溝幅1.40m、深さは最深部で0.11mを測る。平面形は北西一南東方向に長い直線状で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦で、底面両端の高低差はほとんど無い。

〔埋土〕黄褐色地山ブロックを含む暗褐色シルトを主体として構成される。

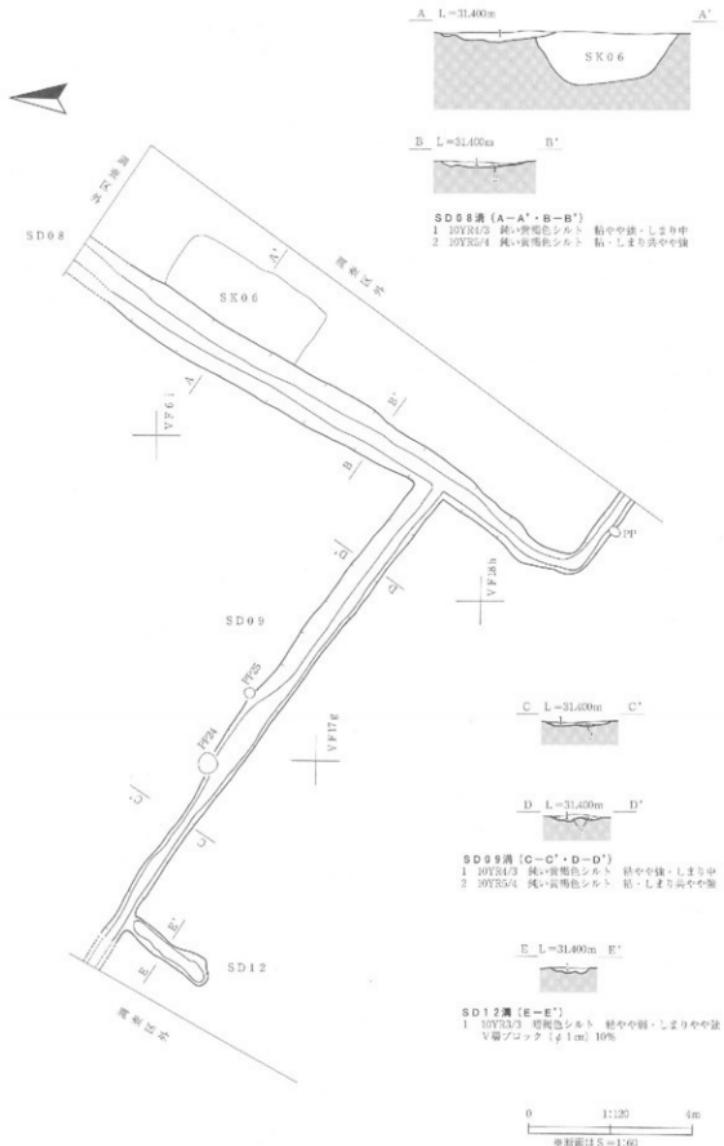
遺物（写真図版22～26）

埋土中より鉄釘1点（58）が出土している。

〔時期〕出土遺物より近世以降と推察される。



第24図 SD 07溝



第25図 SD 08・09・12溝

**SD 08溝（第25図、写真図版16）**

〔位置・検出状況〕東側飛び地、VF 15~16 i、VF 17~18 h グリッドにかけて位置する。検出面はV層地山面で、鈍い黄褐色シルトの帶状プランとして検出した。北東端部、南東端部は調査区域外に延びる。南西側でSD 09と合流しており、埋土の状況などからこれと同時期存在と判断している。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約16.00m、溝幅1.26m、深さは最深部で0.14m前後を測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状であるが、南西側は端部に至りほぼ直角に折れて南東側に延びる。断面形は皿状を呈する。底面はごく緩やかに北東側に傾斜しており、底面両端の高低差は約10cmを測る。

〔埋土〕鈍い黄褐色粘質シルト主体で構成される。

遺物（写真図版22~26）

埋土中より円礫1点（59）が出土している。

〔時期〕埋土の状況などから近世以降と推察される。

**SD 09溝（第25図、写真図版16）**

〔位置・検出状況〕東側飛び地、VF 16 f~g、VF 17 g~h グリッドにかけて位置する。検出面はV層で、鈍い黄褐色シルトの帶状プランとして検出した。北西端部、南東端部は調査区域外に延びる。南東端部はSD 08溝と合流しており、埋土の状況などからこれと同時期存在と判断している。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約14.50m、溝幅0.40~0.80m、深さは最深部で0.08mを測る。平面形は北西一南東方向に長い直線状で、断面形は皿状を呈する。底面はごく緩やかに南東側に傾斜しており、底面両端の高低差は約13cmを測る。

〔埋土〕鈍い黄褐色粘質シルトを主体として構成される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**SD 10溝（第26図、写真図版17）**

〔位置・検出状況〕東側飛び地、VF 14 g~h、VF 15~16 g グリッドにかけて位置する。検出面はV層で、鈍い黄褐色シルトの帶状プランとして検出した。北東端部は調査区域外に延びる。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約9.60m、溝幅0.85m前後、深さは最深部で0.12mを測る。断面形は皿状である。平面形は北東一南西方向に長い直線状であるが、南西側は鉤形に折れて西方へ延びたのち、途切れている。底面はごく緩やかに北東側に傾斜しており、底面両端の高低差は約5cmを測る。

〔埋土〕鈍い黄褐色シルトを主体として構成される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**SD 11溝（第26図、写真図版17）**

〔位置・検出状況〕東側飛び地、VF 14 f~g グリッドに位置する。検出面はV層で、暗褐色シルトの帶状プランとして検出した。西側端部は調査区域外に延びる。東側端部はSD 10と合流しており、埋土の状況から同時期存在と判断している。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約5.80m、溝幅0.80m、深さは最深部で0.09mを測る。平面形は東一西方向に長い直線状で、断面形は皿状を呈する。底面はごく緩やかに東側に傾斜しており、底面両端の高低差は約9cmを測る。

〔埋土〕黄褐色地山ブロックを少量含む暗褐色シルト主体で構成される。

## 遺物（写真図版 22～26）

1 層より陶磁器 1 点 (60) が出土している。

〔時期〕 時期決定し得る遺物を欠くため、詳細は不明である。

## SD 12 溝（第 25 図、写真図版 17）

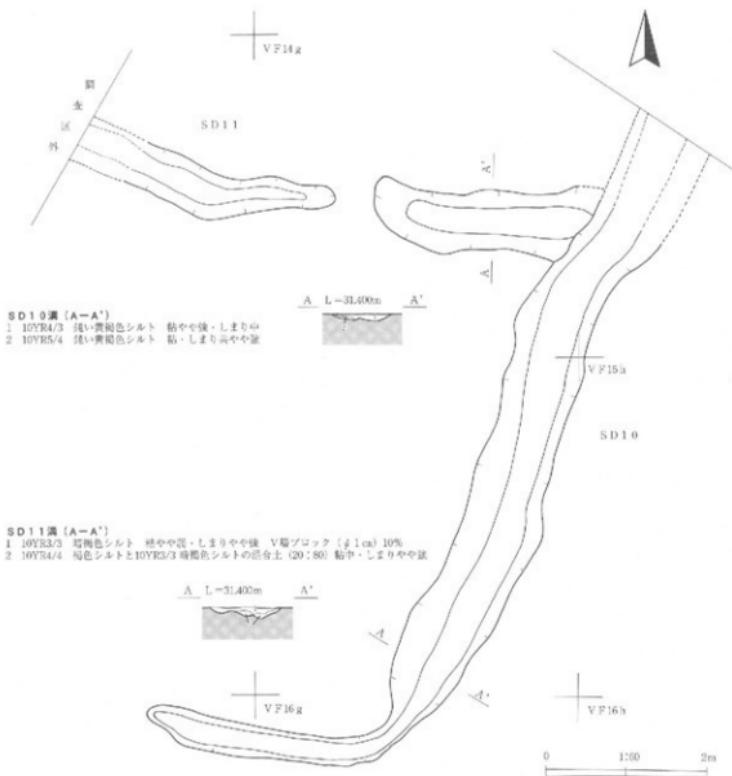
〔位置・検出状況〕 東側飛び地、VF 16 e グリッドに位置する。検出面は V 層で、暗褐色シルトの帶状プランとして検出した。北東端部で SD 09 溝と合流しており、埋土の状況などから同時期存在と判断している。

〔規模・形状〕 調査区域内における長さ約 2.40 m、溝幅 0.42 m、深さは最深部で 0.05 m を測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。造構は上部を削られており、プラン南西側はこれにより残存していない。

〔埋土〕 黄褐色地山ブロックを少量含む暗褐色シルトの単層である。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。



第 26 図 SD 10・11 溝

**SD13溝** (第27図、写真図版17)

〔位置・検出状況〕西側飛び地、V D 23 wグリッドに位置する。検出面はV層で、黒褐色シルトの帯状プランとして検出した。北東端部、南西端部は調査区域外に延びる。本遺構中央部には水路造成のための切土が及んでおり、これにより遺構プランの一部が消失している。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約2.96m、溝幅0.75～0.96m、深さは最深部で0.50mを測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形はV字～逆台形状を呈する。底面は緩やかに南西側に傾斜しており、底面両端の高低差は約22cmを測る。

〔埋土〕黒褐～灰黄褐色シルト主体で構成される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**SD14溝** (第27図、写真図版18)

〔位置・検出状況〕南側調査区中央部、VI F 6～7 a、VI F 8 bグリッドにかけて位置する。検出面はIV層下位で、鈍い黄褐色シルトの帯状プランとして検出した。北西端部、南東端部は調査区域外に延びる。中央部北寄りに幅3mの確認調査範囲を介する。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約12.30m、溝幅0.54～0.74m、深さは最深部で0.31mを測る。平面形は北西一南東方向に長い直線状で、断面形は碗～逆台形状を呈する。底面はごく緩やかに南東側に傾斜しており、底面両端の高低差は約11cmを測る。

〔埋土〕鈍い黄褐色シルト主体で構成される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**SD15溝** (第28図)

〔位置・検出状況〕中央調査区中央部、VI E 1～2 sグリッドにかけて位置する。検出面はIII～IV層で、黒褐色シルトの帯状プランとして検出した。北東端部、南西端部は調査区域外に延びる。

〔規模・形状〕調査区域内における長さ約6.00m、溝幅2.40m、深さは0.15m前後を測る。平面形は北東一南西方向に長い直線状で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。

〔埋土〕黄褐色地山ブロックを少量含む黒褐色シルト主体で構成される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**SD16溝** (第34図、写真図版18)

〔位置・重複関係〕南側飛び地、VI F 20～21 d、VI F 21 cグリッドにかけて位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はV層地山面で、畑耕作土除去後に黒褐色の帯状プランとして確認したものである。南西半部でS I O 2 竪穴住居と重複しており、これを切る。

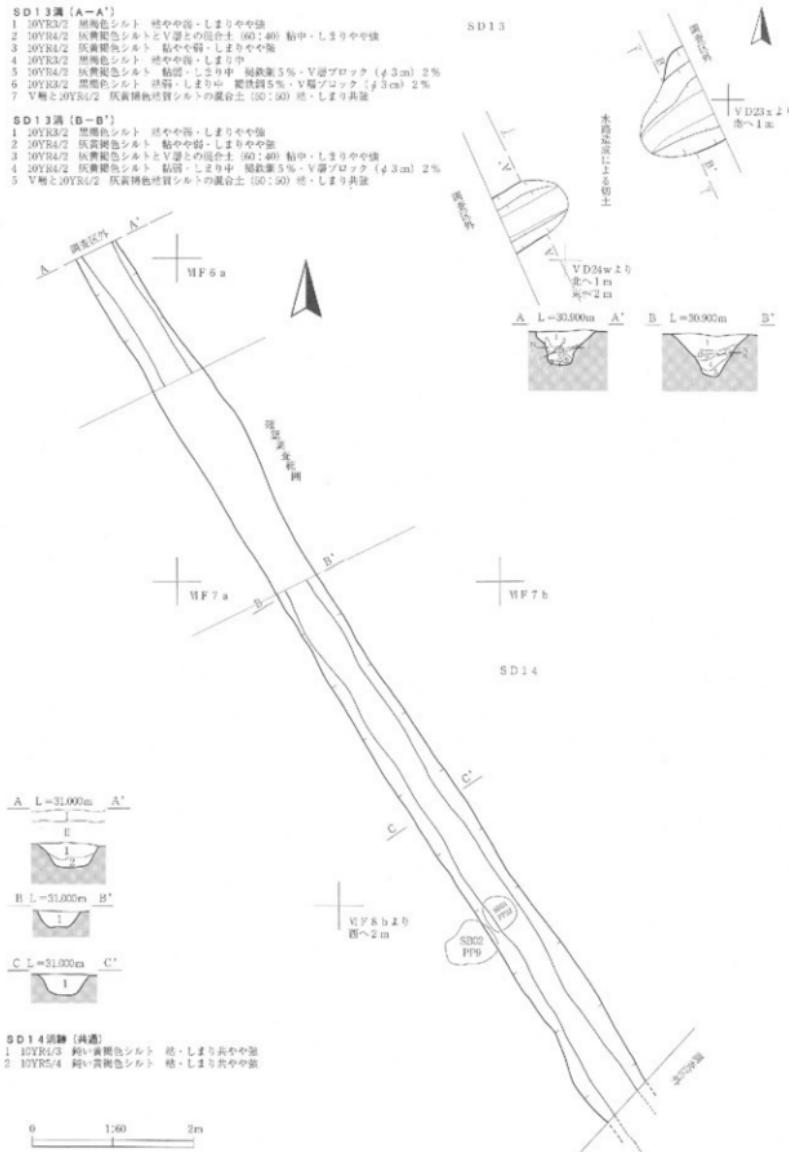
〔規模・平面形〕検出した範囲で長さ6.60m、幅0.25～0.38mの北東一南西方向に延びる帯状プランを呈する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

**SD17溝** (第34図、写真図版18)

〔位置・重複関係〕南側飛び地、VI F 20～21 d、VI F 21 cグリッドにかけて位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はV層地山面で、畑耕作土除去後に黒褐色の帯状プランとして確認したものである。南西半部でS I O 2 竪穴住居と重複しており、これを切る。



第27図 SD 13・14溝

〔規模・平面形〕検出した範囲で幅0.16～0.38m、長さ7.10mの北東～南西方向に延びる帯状プランを呈する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### SD 18溝（第34図、写真図版18）

〔位置・重複関係〕南側飛び地、VI F 20～22 dグリッドにかけて位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はV層地山面で、畑耕作土除去後に黒褐色の帯状プランとして確認したものである。南西半部でS I 0 2堅穴住居と重複しており、これを切る。

〔規模・平面形〕検出した範囲で長さ7.10m、幅0.52～0.83mの北東～南西方向に延びる帯状プランを呈する。

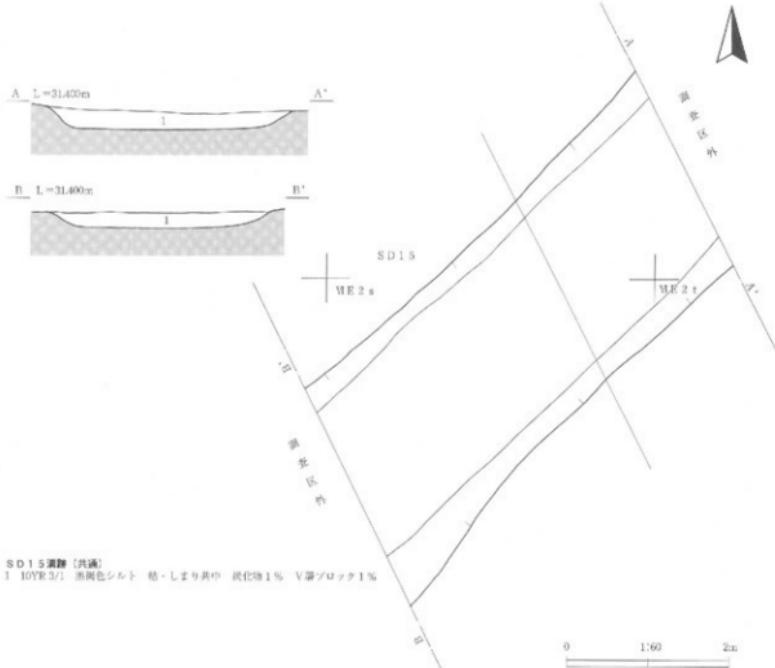
〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

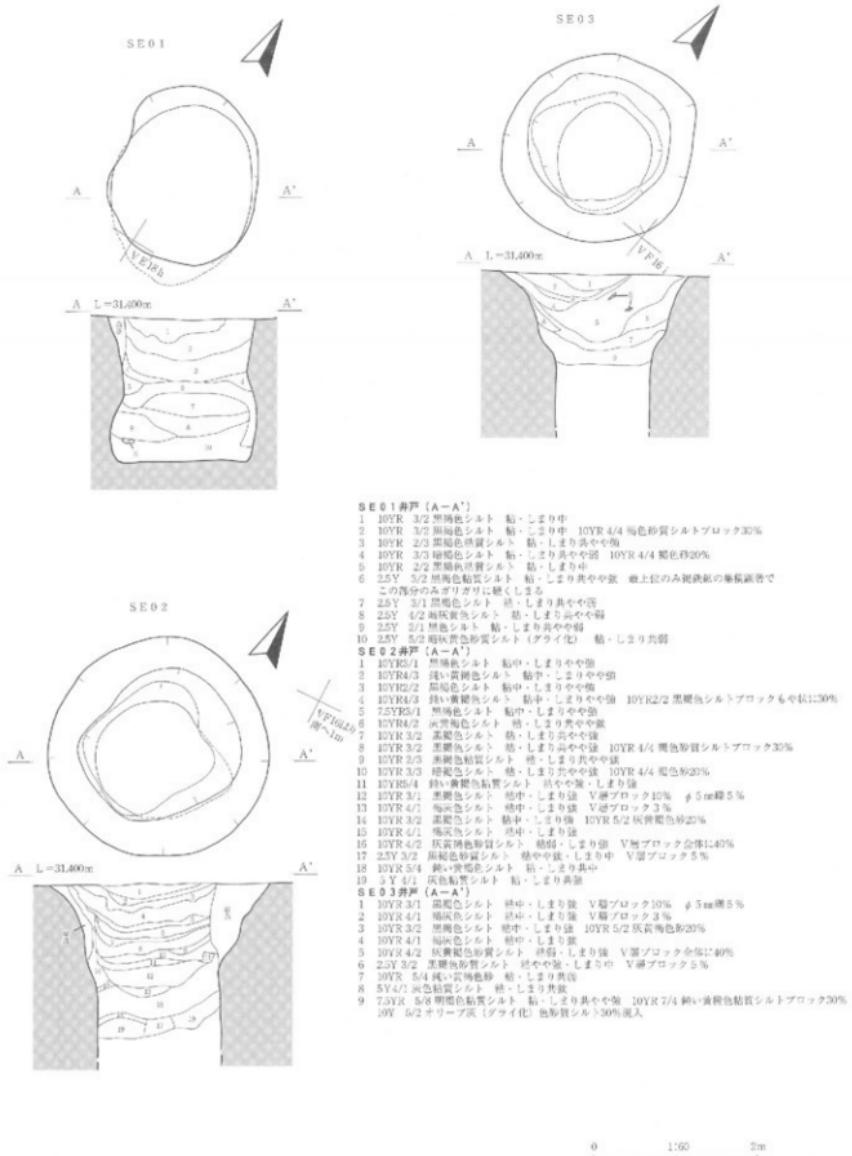
#### SD 19溝（第34図、写真図版18）

〔位置・重複関係〕南側飛び地、VI F 21～22 d、VI F 21 eグリッドにかけて位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面はV層地山面で、畑耕作土除去後に黒褐色の帯状プランとして確認したものである。南西半部でS I 0 2堅穴住居と重複しており、これを切る。

〔規模・平面形〕検出したレベルで長さ6.32m、幅0.50～0.70mの北東～南西方向に延びる帯状ブ



第28図 SD 15溝

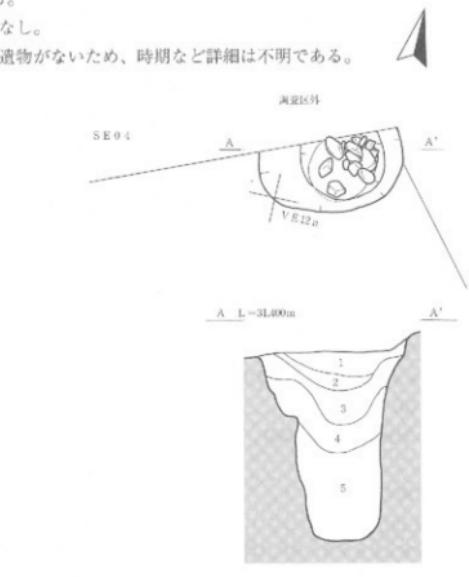


第29図 S E 0 1 ~ 0 3 井戸

ランを呈する。

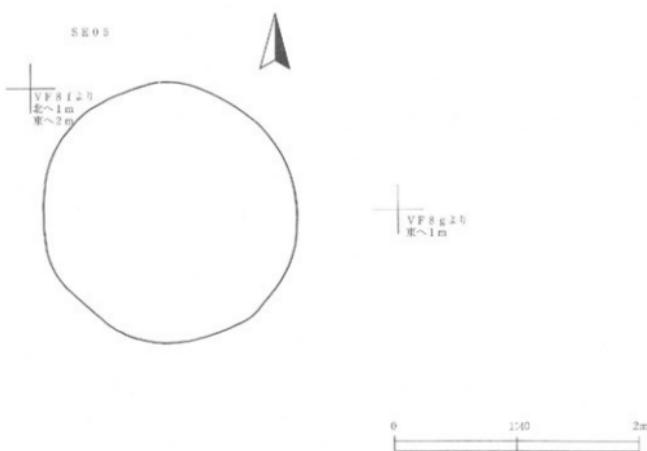
〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。



SE 04 井戸 [A-A']

- 1 IOYE2/2 黄褐色シルト 粘重・しまりやや薄
- 2 IOYE3/2 黄褐色シルト 粘重・しまりやや薄 V輪ブロック ( $\phi 2 \sim 3$  cm) 10%
- 3 IOYE5/4 残し・黄褐色粘質シルト 粘・しまり共やや強 IOYE2/2 黄褐色シルトブロック ( $\phi 3$  cm) 10%
- 4 IOYE2/2 黄褐色粘質シルト 粘・しまり共やや強 V輪粒全体: 20%
- 5 IOYB4/2 淡黄褐色粘質シルト 粘強・しまりやや強



第30図 SE 04・05 井戸

## 6 井 戸

検出された井戸は、水を含むと脆く崩落しやすい地山を掘り込んでおり、掘削が深く及んだ場合の漏水・崩落が予想された。この為、1m掘削した段階で反対側の埋土を一旦完掘し、更に底面まで掘り進めるという二段階の掘削方法をとった。掘削にあたっては、精査の途上で壁面の崩落が刻々と進行する為、個々の造構の状況に合わせ、安全管理上危険と判断した段階で精査を中止している。

## S E 0 1 井戸 (第29図、写真図版19)

〔位置・検出状況〕 東側飛び地、V F 17 g ~ h グリッドに位置する。検出面はV層地山面である。

〔規模・形状〕 開口部径 160 cm、底部径 192 cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁は直立気味に立ち上がる。深さは最深部で 175 cm を測る。底面に井戸枠は確認されなかったが、埋土下位よりケヤキの板材が3点出土しており (65 ~ 67)、本来は井戸枠の構築材であった可能性がある。

〔埋土〕 10層からなり、黒褐色～暗褐色粘質シルト主体で構成される。第6層は凸状に盛り上がる堆積状況を示し、最上位のみ褐鉄鉱の集積が顕著で非常に硬くしまる。第1～5層まではレンズ状の堆積状況を示し自然堆積の可能性があるが、第6～10層までは明確な人為堆積の状況を示している。

遺物 (第40図、写真図版22～26)

埋土中から陶磁器1点 (61) と石鉢片? 1点 (62)、ケヤキの板材3点 (63～65)、獸骨片2点 (66・67) が出土している。

〔時期〕 出土遺物から近世以降と推測される。

## S E 0 2 井戸 (第29図、写真図版19)

〔位置・検出状況〕 東側飛び地、V F 16 h グリッドに位置する。検出面はV層地山面である。

〔規模・形状〕 開口部径約 185 cm、底部径約 150 cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立しながら立ち上がり、上部にいたって外反する。崩落の危険があったため、深さ 220 cm の段階で掘削を中止している。

〔埋土〕 掘削した範囲で19層からなり、黒褐色～褐灰色、鈍い黄褐色シルト主体で構成される。第1～15層まではレンズ状の堆積状況を示し自然堆積の可能性があるが、第16層以下は明確な人為堆積の様相を呈する。

遺物 (写真図版22～26)

埋土中からヤマウルシの加工材? 2点 (68・69) と獸骨片1点 (70) が出土している。

〔時期〕 出土した遺物などから近世以降の所属と推測される。

## S E 0 3 井戸 (第29図、写真図版19)

〔位置・検出状況〕 東側飛び地、V F 15～16 h グリッドに位置する。検出面はV層地山面である。

〔規模・形状〕 開口部径約 213 cm、底部径約 145 cm の円形を呈する。断面形は円筒状で、壁はほぼ直立して立ち上がり、上部にいたって外反する。崩落の危険があったため、深さ 203 cm の段階で掘削を中止している。

〔埋土〕 掘削した範囲で9層からなり、黒褐色～褐灰色シルト主体で構成される。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

## S E 0 4 井戸 (第30図、写真図版19)

〔位置・検出状況〕 北側調査区西側端部、V E 12 m ~ n グリッドに位置する。検出面はV層地山面である。最上位に礫の集積が認められたことから井戸の存在を確認したものである。南側の一部は調査

区域外にかかるため未調査である。

〔規模・形状〕開口部径 116 cm、底部径 56 cm の橢円形を呈する。断面形は上端が開く円筒状で、壁は外傾しながら直線的に立ち上がる。深さは最深部で 170 cm を測る。

〔埋土〕5 層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。最下層に灰黄褐色粘質シルトが堆積する。最上位に礫の集積層が認められたことから、井戸廃絶時に人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

#### S E 5 井戸（第 30 図、写真図版 20）

〔位置・検出状況〕南側調査区東端部、VI F 7 ~ 8 f グリッドにかけて位置する。確認調査範囲にかかるため、埋土掘削は行っていない。検出面は V 層地山面で、表土除去後に黒褐色のプランとして確認したものである。

〔規模・形状〕径 210 × 210 cm の円形プランを呈する。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕埋土掘削を行っておらず、出土遺物もないため、時期など詳細は不明である。

## 7 水田状遺構・畑

#### S X 0 5 水田状遺構（第 31 図、写真図版 20）

〔位置・検出状況〕西側飛び地南端部、VII E 3 q ~ r、VII E 4 r ~ s、VII E 5 s ~ t グリッドにかけて位置する。検出面は V 層地山面で、水路表面の表面観察時に黄褐色の畦畔状プランと、その上位に堆積する黒～暗褐色の有機質の堆積層を確認したものである。本遺構の中央部は水路造成の際の切土により消失している。

〔面積・埋土〕検出面積は約 47 m<sup>2</sup> を測る（水路によって切られた中央部を含めて算出）。第 11 層は V 層黄褐色粘土質シルトを掘削して人為的に形成された畦畔の可能性が想定された。その上層には灰黄褐色の第 10 層が堆積しており、新規の畦畔若しくは自然堆積による擬似畦畔の可能性が想定された。第 9 層は水田床土、もしくは作上層と見られ、第 8 層以上は水田が放棄されて以降の自然堆積層の可能性があると考えられた。

〔プランツ・オパール分析等〕断面観察から水田跡である可能性を想定し、堆積土のプランツ・オパール分析を実施した。サンプル採取地点は 3・8・9 層である。水田床上もしくは作上層の可能性のあった第 9 層をサンプリングし、その比較試料として堆積層下位の第 8 層、および第 3 層のサンプリングを行った（第 1・2 層は水路造成時の盛土であったため、また、9 层以下は流水が著しく、サンプリング不能であった）。その結果、第 9 層からイネのプランツ・オパールが 3,000 個/g の密度で検出されている。この値は稻作跡の可能性を判断する際の基準値 3,000 個/g を満たしており、第 9 層が水田耕作土であった可能性が高いと判断される結果が得られた（詳細は第 VI 章参照）。

また、隣接する S D 0 6 溝が本遺構に付随する水路である可能性が考えられたことから、S D 0 6 溝底面から採取された灰白色テフラの E PMA 分析を同時に実施している。その結果、S D 0 6 溝底面から検出されたテフラについては十和田中源火山灰の可能性が高いという結果が得られており、堆積状況から二次堆積したものと判断される。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕出土遺物はなく、時期など詳細は不明である。

## SX 0 6 畠（第32図、写真図版20）

【位置・検出状況】中央飛び地、VE 19～20う、VE 20t グリッドにかけて位置する。検出面はⅢ層下位で、北西～南東方向に連続する筋状プランとして確認した。北側と南側は調査区域外にかかり未調査である。

【面積・堆土】検出面積は約 880 m<sup>2</sup>を測る。3層黒褐色シルトを畑耕作土とする畠間に堆積した2層



第31図 SX 0 5水田状遺構

(盛土) が筋状に列をなすもので、ほぼ一定の間隔で並行している。軸の長軸方向は N - 46° - W で、歓幅 52.5 cm、歓の高さ 6 ~ 8 cm を測る。

[出土遺物・時期] 検出層位から近世以降の畑と考えられる。

## 8 柱穴列・小柱穴群

### SA 01 柱穴列 (第 33 図)

[位置・検出状況] 東側飛び地、V F 15 g ~ h グリッドにかけて位置する。検出面は V 層である。

[規模・形状] 径 21 ~ 24 cm、深さ 33.5 ~ 43.3 cm の柱穴が 4 基、等間隔の列状に並ぶものである。全長 5.7 m (18.8 尺)、柱間寸法 190 cm (6.27 尺) を基準としている。

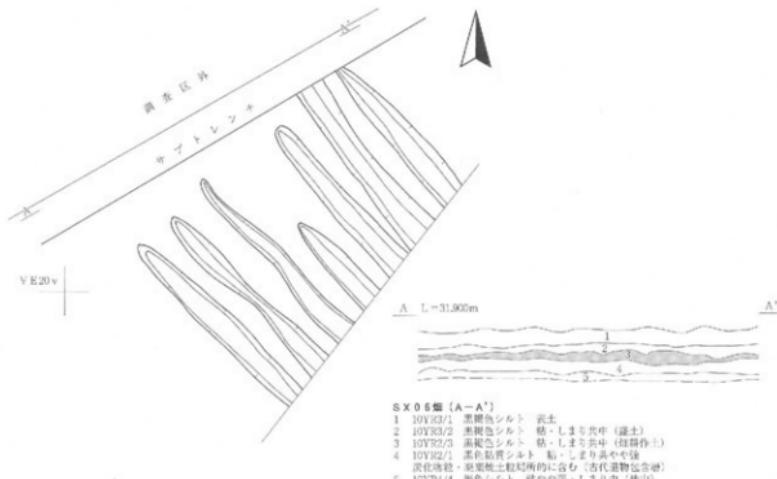
[埋土] 黒色～黒褐色シルト主体の單層である。

[出土遺物・時期] 出土遺物がないため、時期など詳細は不明である。

### 柱穴状小ピット群 (第 33 ~ 37 図、写真図版 21)

柱穴状ピット群は調査区全域から合計 103 (22) 個が検出されている。個々のピットの計測値・位置関係については、第 7 表と第 33 ~ 37 図を参照されたい。平面形は円形を基調とし、規模は径 11 ~ 78 cm、深さ 3 ~ 100 cm の幅におさまる。埋土は鈍い黄褐色～灰黄褐色、褐灰色シルト主体で構成され、層中に黄褐色地山ブロックが混入するものが多い。明確に建物跡を構成するような配置が確認できなかったため柱穴状ピット群に含めてはいるが、南側調査区においては柱当たりの確認できる柱穴も一部存在することから、本来は獨立建物を構成する可能性のあるものが若干数含まれると見られる。

[出土遺物] 個々の柱穴の帰属時期など詳細は不明であるが、PP 1.5 から近世磁器皿片が 1 点 (71)、PP 3.8 から磨石が 1 点が出土している (72)。所属時期については近世以降が中心と推測される。



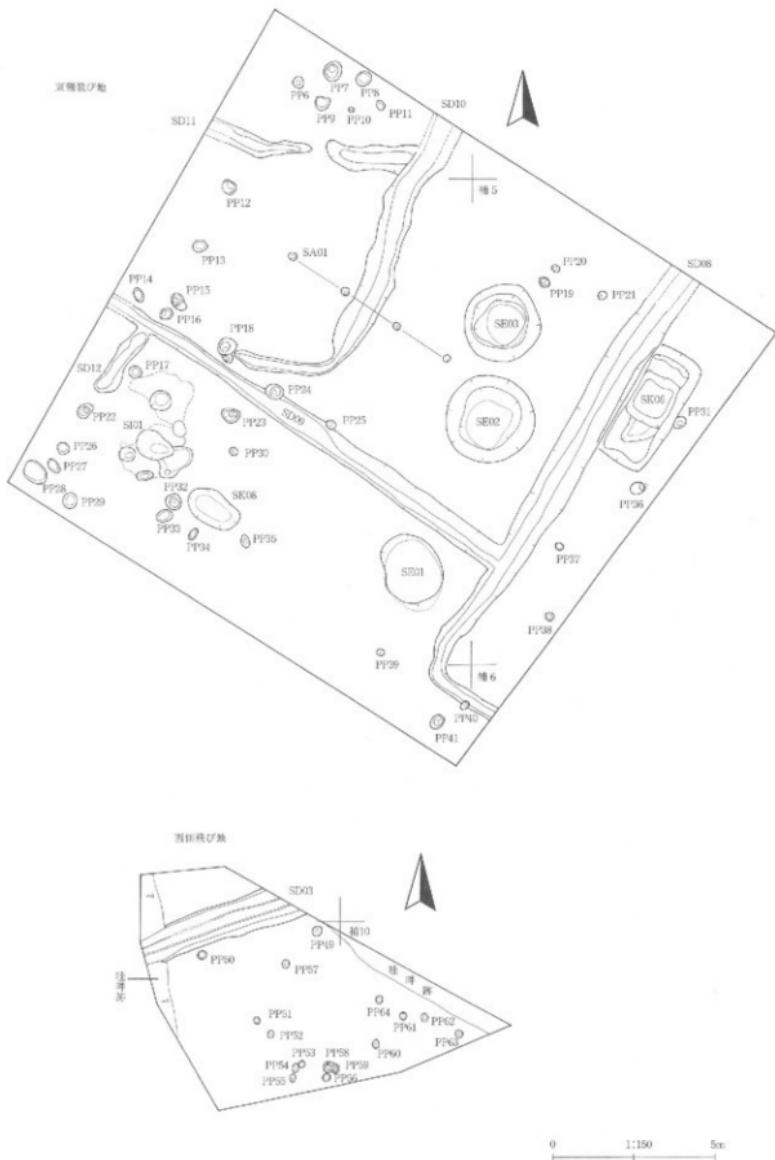
第 32 図 S X 06 畑

0 100 200

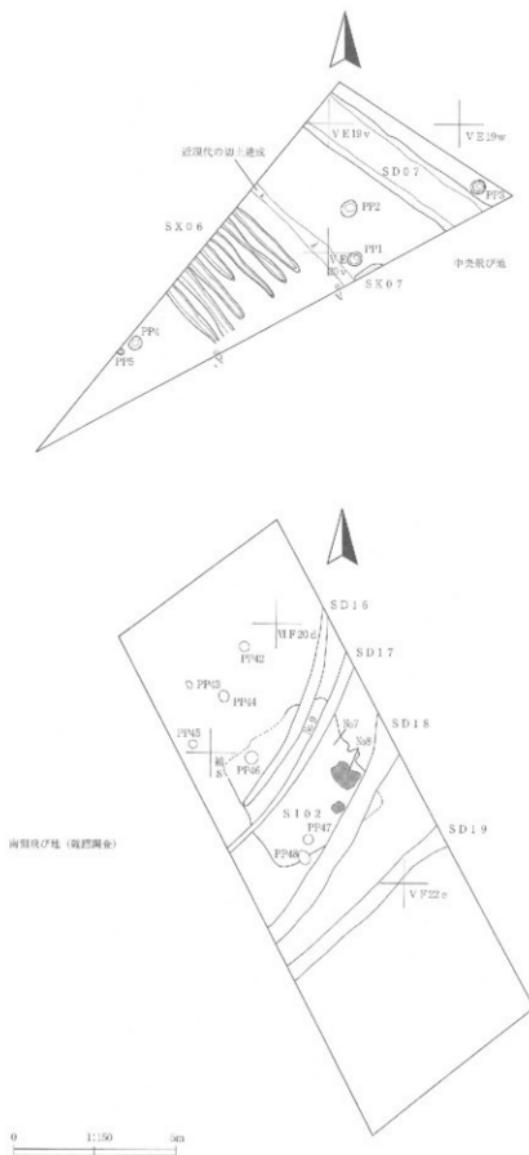
第7表 柱穴状ピット計測表

| No. | グリッド        | 短径×長径(cm) | 深さ(cm) | 底面標高(m) | No. | グリッド        | 短径×長径(cm) | 深さ(cm) | 底面標高(m) |
|-----|-------------|-----------|--------|---------|-----|-------------|-----------|--------|---------|
| 1   | VE 20 v     | 40×44     | 32.5   | 30.370  | 54  | VD 19 w     | 18×27.5   | 22.4   | 30.794  |
| 2   | VE 19 v     | 46×56     | 35.5   | 30.328  | 55  | VD 19 w     | 18.5×22.5 | 39.2   | 30.653  |
| 3   | VE 19 w     | 41.5×45   | 26.5   | 30.371  | 56  | VD 19 w     | 24.5×25.5 | 23.4   | 30.784  |
| 4   | VE 20 t     | 35×38     | 11.4   | 30.811  | 57  | VD 18 w     | 21.5×24.5 | 19.9   | 30.814  |
| 5   | VE 20 t     | 18×20     | 10.3   | 30.859  | 58  | VD 19 w     | 23×31.5   | 32.6   | 30.722  |
| 6   | VF 13-14 g  | 31.5×37.5 | 21.8   | 31.128  | 59  | VD 19 w     | 23.5×28   | 33.8   | 30.710  |
| 7   | VF 13 g     | 54×59.5   | 32.4   | 31.018  | 60  | VD 19 w     | 20×22.5   | 30.7   | 30.732  |
| 8   | VF 14 g     | 43.5×47.5 | 31.9   | 31.001  | 61  | VD 19 w · x | 20.5×23.5 | 27.3   | 30.801  |
| 9   | VF 14 g     | 38.5×41.5 | 42.7   | 30.315  | 62  | VD 19 x     | 21.5×23.5 | 17.8   | 30.883  |
| 10  | VF 14 g     | 14×14     | 3.5    | 31.293  | 63  | VD 19 w     | 23.5×25.5 | 17.3   | 30.899  |
| 11  | VF 14 f     | 23.5×31.5 | 30.4   | 31.055  | 64  | VD 19 w     | 22×21.5   | 9.9    | 30.080  |
| 12  | VF 14 f     | 37.8×44.5 | 72.1   | 30.675  | 65  | VF 10 i     | 32×35     | 9.6    | 31.065  |
| 13  | VF 15 f     | 34.5×43.5 | 62.3   | 30.736  | 66  | VF 8 g · h  | 18×29     | 49.2   | 31.643  |
| 14  | VF 15 c     | 18.5×15   | 11.7   | 31.233  | 67  | VF 3 c      | 30×32     | 11.4   | 31.128  |
| 15  | VF 15 f     | 39×61.5   | 85.5   | 30.505  | 68  | VE 11 o     | 28×33     | 17.4   | 30.917  |
| 16  | VF 15 f     | 33×37     | 67.2   | 30.673  | 69  | VE 11 o     | 25×32     | —      | —       |
| 17  | VF 16 e     | 39.5×40.5 | 62.5   | 30.723  | 70  | VE 15 n     | 20×25     | —      | —       |
| 18  | VF 16 f     | 49×61     | 78.1   | 30.564  | 71  | VE 17 n     | 23×28     | 11.9   | 30.908  |
| 19  | VF 15 h · i | 24.5×38   | 28.5   | 30.982  | 72  | VE 20 o     | 26×28     | —      | —       |
| 20  | VF 15 i     | 22.3×24.5 | 24.0   | 31.036  | 73  | VE 20 o     | 23×46     | —      | —       |
| 21  | VF 15 i     | 21.5×27.5 | 23.1   | 31.048  | 74  | VE 20 o     | 52×58     | 21.5   | 30.708  |
| 22  | VF 16 e     | 40.5×49.8 | 55.2   | 30.818  | 75  | VE 22 p     | 39.5×43.5 | 16.2   | 30.718  |
| 23  | VF 16 f     | 39.5×58.6 | 48.0   | 30.864  | 76  | VE 22 p     | 26.5×33.5 | 26.5   | 30.627  |
| 24  | VF 16 f · g | 45.5×54   | 88.5   | 30.441  | 77  | VE 23 o     | 18×30     | 18.6   | 30.812  |
| 25  | VF 16 g     | 26.3×26.5 | 36.5   | 30.944  | 78  | VE 23 o     | 11×20     | 16.4   | 30.836  |
| 26  | VF 16 e     | 37.5×39.5 | 44.4   | 30.922  | 79  | VE 22 q     | 41.5×43.5 | —      | —       |
| 27  | VF 16 e     | 29.0×52.5 | 14.2   | 31.238  | 80  | VE 22 q · r | 29×32     | —      | —       |
| 28  | VF 16 e     | 61.5×78   | 98.5   | 30.407  | 81  | VE 24 r     | 35×36     | —      | —       |
| 29  | VF 17 e     | 43×49.2   | 43.3   | 30.972  | 82  | VE 24 q     | 32×51     | 75.0   | 30.75   |
| 30  | VF 16 f     | 22.8×27.8 | 27.0   | 31.100  | 83  | VE 1 s      | 22×23     | —      | —       |
| 31  | VF 16 j     | 36×41.5   | 45.8   | 30.784  | 84  | VE 2 t      | 21×21     | —      | —       |
| 32  | VF 17 f     | 46×49.5   | 83.4   | 30.534  | 85  | VE 3 t      | 22×31     | —      | —       |
| 33  | VF 17 f     | 33.5×49.5 | 10.0   | 31.298  | 86  | VE 4 u      | 23×29     | —      | —       |
| 34  | VF 17 f     | 19.5×40   | 7.1    | 31.346  | 87  | VE 6 v      | 32×36     | —      | —       |
| 35  | VF 17 f     | 27.5×39.5 | 14.7   | 31.264  | 88  | VD 21 v     | 18×20.5   | 22.7   | 30.584  |
| 36  | VF 17 j     | 38.5×46   | 70.4   | 30.537  | 89  | VE 6 x      | 37.5×43   | 64.8   | 30.732  |
| 37  | VF 17 i     | 22.5×26.5 | 19.1   | 31.067  | 90  | VE 7 w      | 38×38.5   | 22.4   | 30.935  |
| 38  | VF 18 i     | 26×30     | 34.9   | 30.919  | 91  | VE 7 x      | 25.5×27   | —      | —       |
| 39  | VF 18 g     | 21×24     | 17.8   | 31.152  | 92  | VE 7 x      | 24.5×28   | —      | —       |
| 40  | VF 18 h     | 20×29.2   | 35.1   | 30.947  | 93  | VE 9 y      | 21×23     | 25.3   | 30.968  |
| 41  | VF 18 h     | 37.5×48.1 | 22.3   | 31.099  | 94  | VE 10 x     | 41×45     | 30.8   | 30.942  |
| 42  | VI F 20 c   | 25×30     | —      | —       | 95  | VE 10 x     | 33×38     | 3.2    | 30.911  |
| 43  | VI F 20 c   | 13×25     | —      | —       | 96  | VI F 7 a    | 22.5×27   | 7.2    | 30.953  |
| 44  | VI F 20 c   | 25×35     | —      | —       | 97  | VI F 6 b    | 26×31     | 17.5   | 30.739  |
| 45  | VI F 20 c   | 22×25     | —      | —       | 98  | VI F 6 c    | 19.5×30   | —      | —       |
| 46  | VI F 21 c   | 38×40     | —      | —       | 99  | VI E 8 v    | 25.5×33.5 | —      | —       |
| 47  | VI F 21 d   | 27×30     | —      | —       | 100 | VI F 8 a    | 23×25     | 13.5   | 30.886  |
| 48  | VI F 21 d   | 32×45     | —      | —       | 101 | VI F 8 a    | 23×30     | 7.2    | 30.911  |
| 49  | VD 18 w     | 30×31.5   | 28.0   | 30.722  | 102 | VI F 8 a    | 20.5×26   | 10.9   | 30.901  |
| 50  | VD 18 w     | 27.5×28   | 21.4   | 30.768  | 103 | VI F 8 a    | 22.5×26   | 16.9   | 30.873  |
| 51  | VD 19 v     | 18.5×20.5 | 22.2   | 30.806  | 104 | VI F 5 e    | 29.5×32.5 | 35.2   | 30.850  |
| 52  | VD 19 v     | 19.5×23.5 | 20.0   | 30.826  | 105 | VI E 10 y   | 16×22.5   | 11.4   | 31.078  |
| 53  | VD 19 w     | 19×21.5   | 20.4   | 30.831  |     |             |           |        |         |

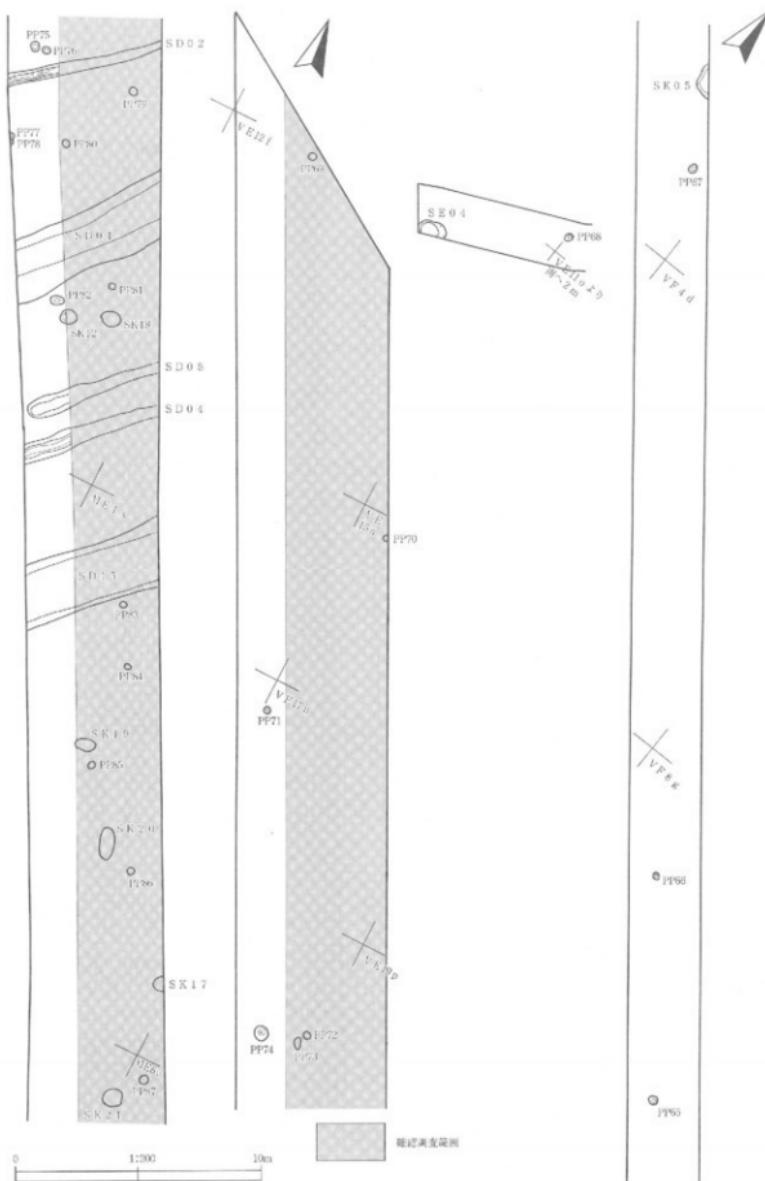
\* 表中のーは、確認調査のため計測不能のもの



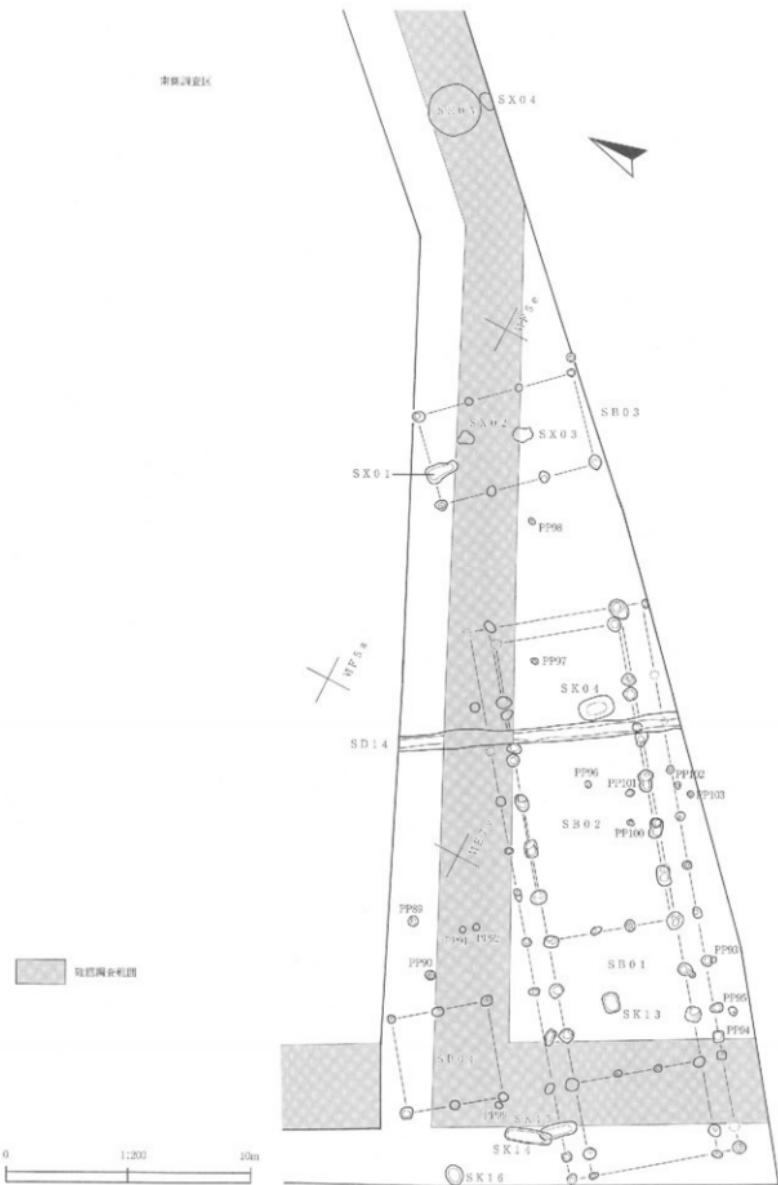
第33図 遺構配置図（東・西侧飛び地）



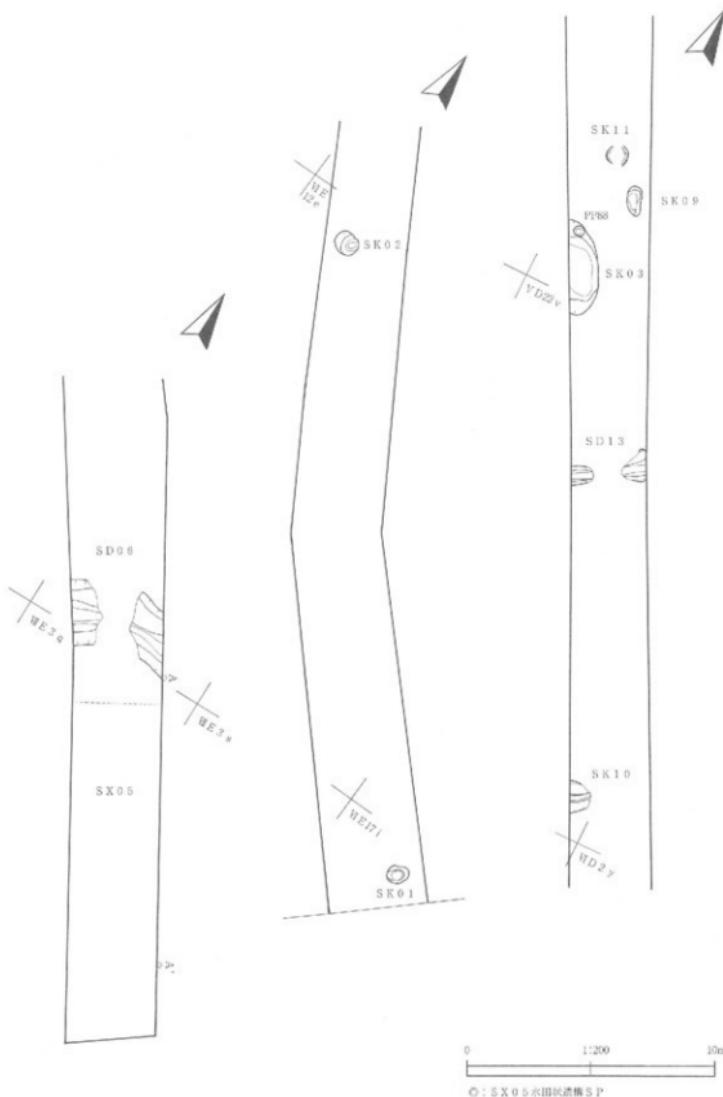
第34図 遺構配置図（中央・南側飛び地）



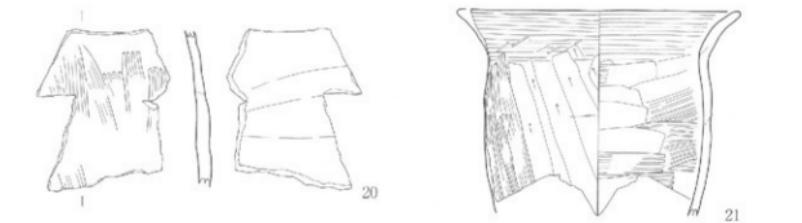
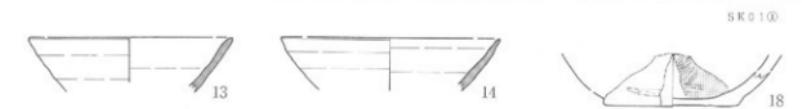
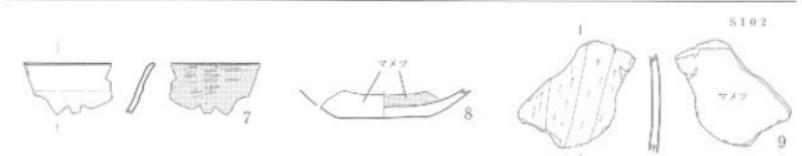
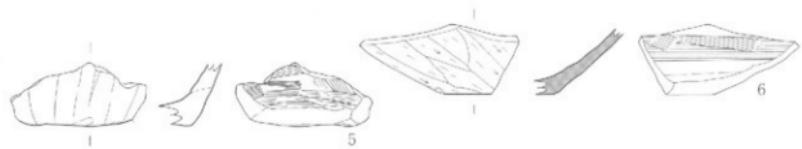
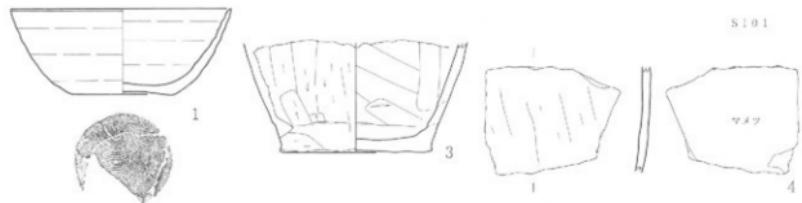
第35図 遺構配置図（東・北・中央調査区）



第36図 遺構配置図（南側調査区）

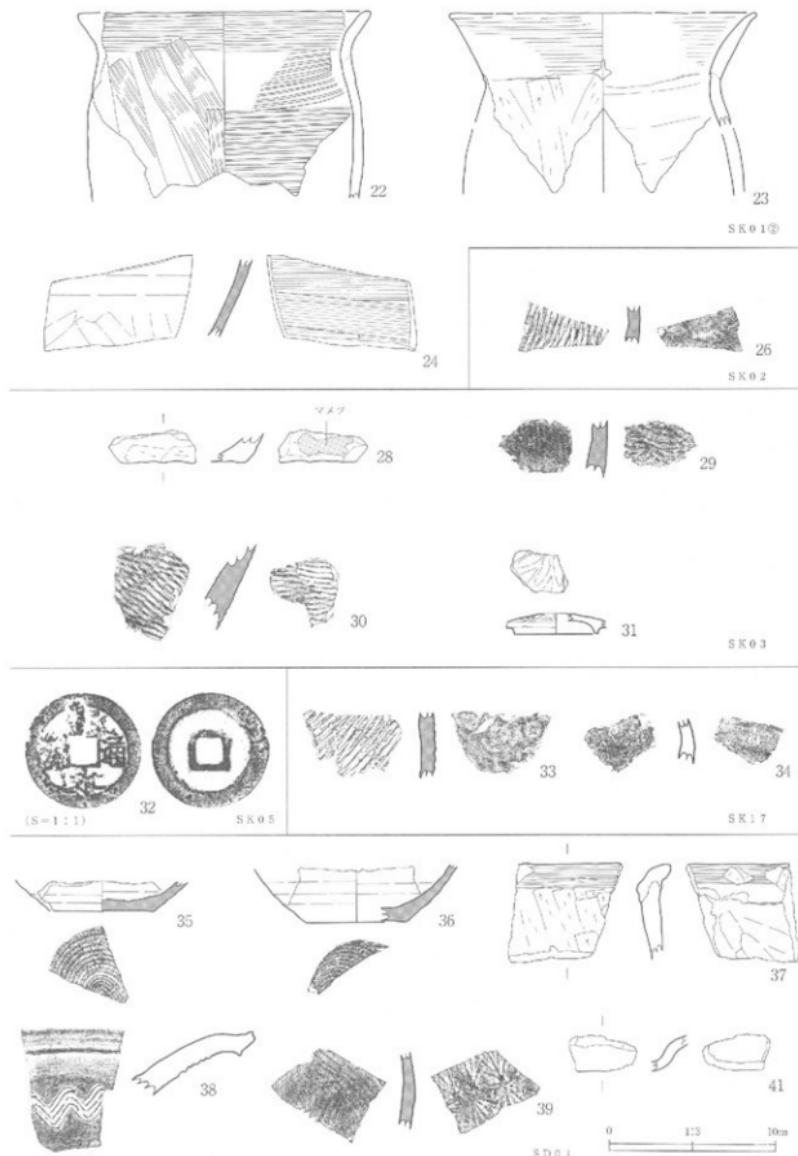


第37図 遺構配置図（西側調査区）

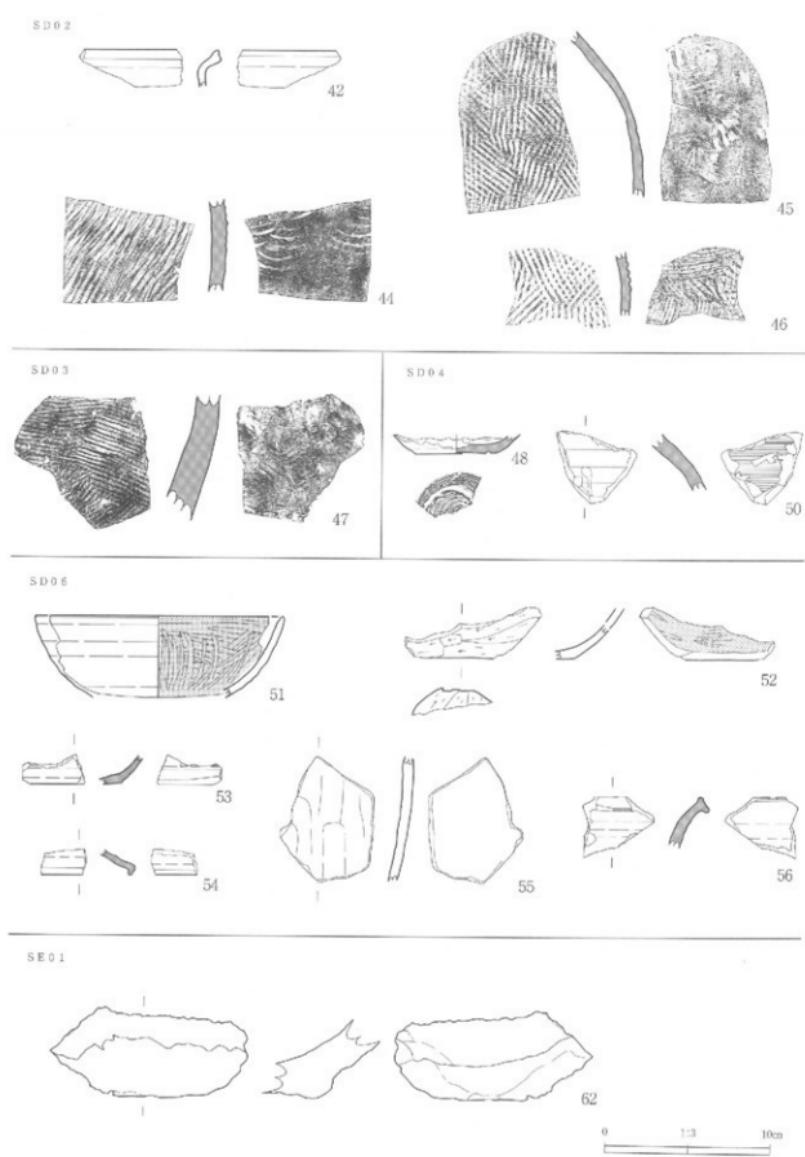


0 1:3 10mm

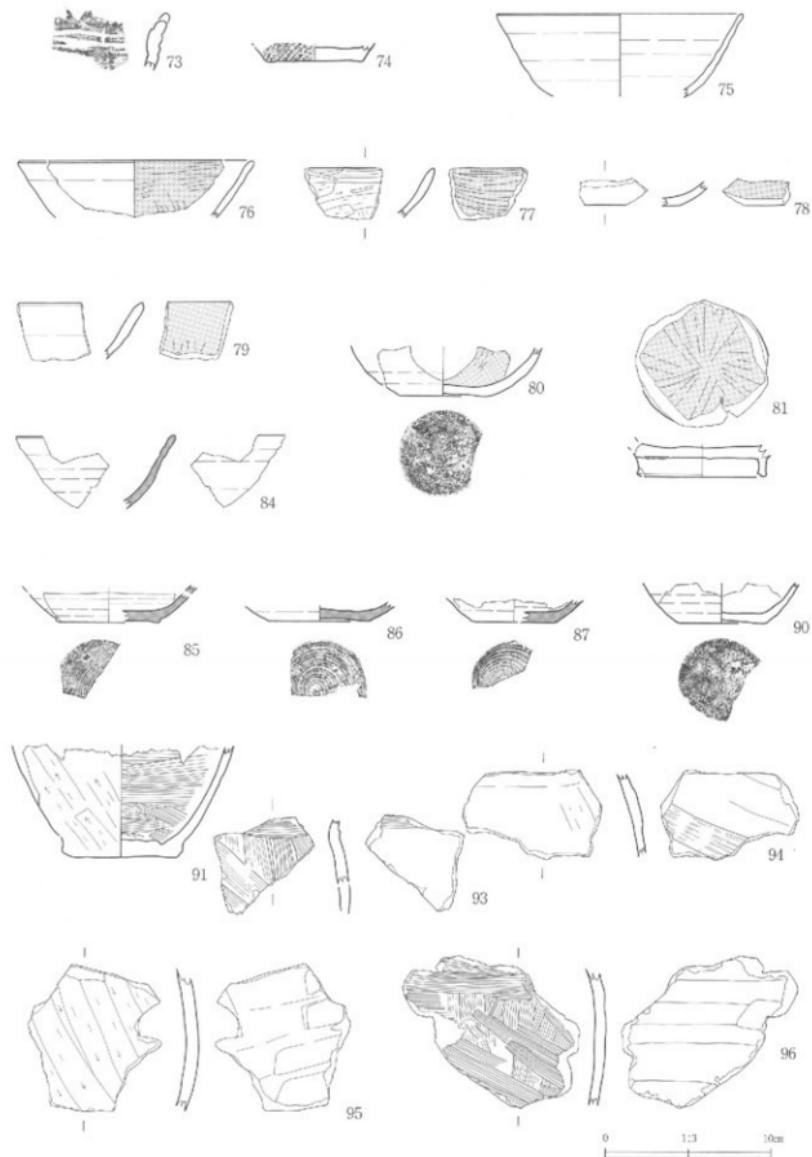
第38図 遺構内出土遺物1



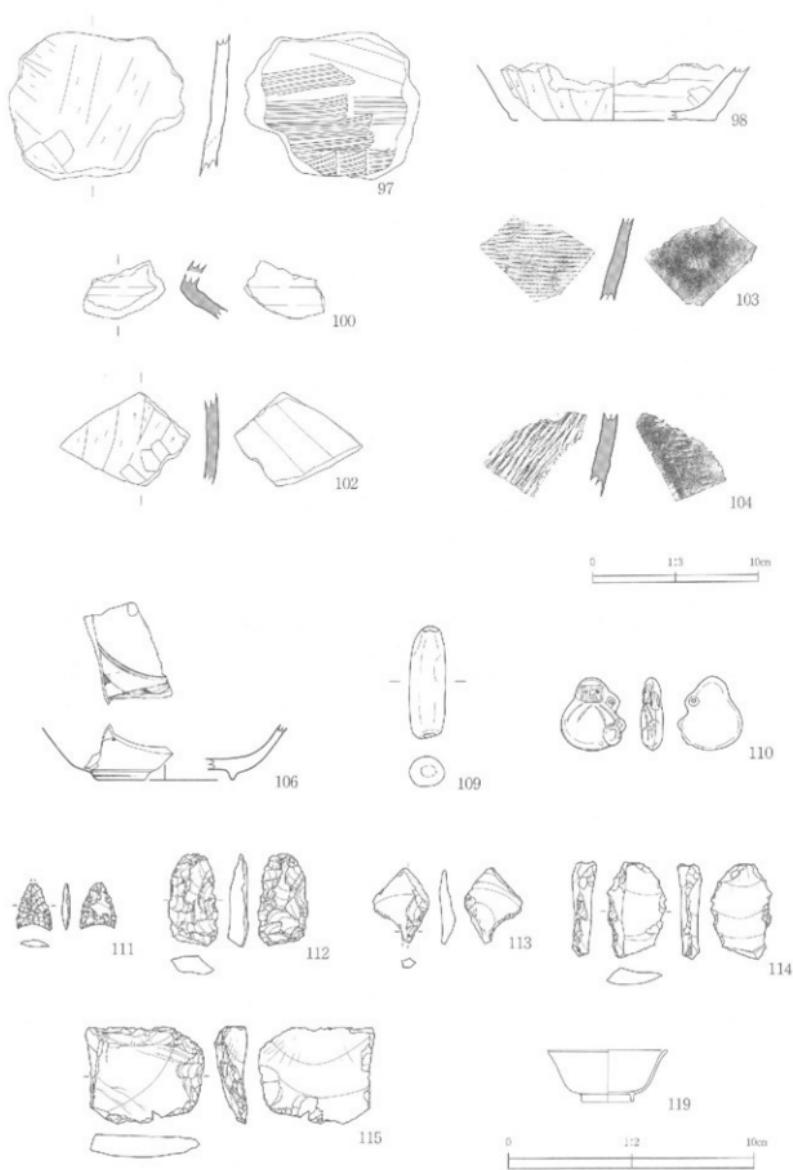
第39図 遺構内出土遺物2



第40図 遺構内出土遺物3



第41図 遺構外出土遺物1



第42図 遺構外出土遺物2

## V 出土遺物

今回の道上遺跡第2次調査で出土した遺物は以下の通りである。

- 1 繩文土器
- 2 土師器、須恵器
- 3 陶磁器（国産陶磁器、輸入陶磁器）
- 4 土製品
- 5 石器、石製品
- 6 金属製品（鉄製品・六器・銭）
- 7 動植物遺存体

いずれも量は少なく、遺構内外を含めた総量は大コンテナ（40×30×30cm）でおよそ2箱分である。以下、種類ごとに概観する。

### 1 繩文土器（第41図、写真図版22～26）

出土した縄文土器は2点のみで、すべて掲載した。いずれも中央飛び地Ⅲ層包含層中からの出土である。73はVF16cグリッドIV層から出土した鉢の口縁部片で、口縁部に平行沈線が巡る。74はVE20tグリッドIV層から出土した鉢の底部片で、地文としてLR縄文が施しられる。これらは小片であるため、器種及び時期の特定が困難であるが、文様の特徴などから判断して概ね縄文時代晚期C2～A式の特徴を持つものである。

### 2 土師器・須恵器（第38～42図、写真図版22～26）

調査区全域から大コンテナおよそ1.5箱分の量が出土しており、106点を掲載した。75は東側飛び地VF17hから出土した土師器環で、内外面共にロクロナデ調整される。底部欠損のため切り離し技法は不明である。76～80は中央調査区中央部から出土した土師器环片である。76は外面部ロクロナデ、内面部ミガキ+黒色処理される。77～78は内外面ともにミガキ+黒色処理される。79は外面部調整が磨耗の為不明、内面部調整はミガキ+黒色処理される。77～79は底部の残存しない小片であつたり、磨耗や器面調整の為、製作に際してロクロが用いられたかは判別困難であった。80は外面部ロクロナデ、内面部ミガキ+黒色処理され、底部切り離し技法は回転糸切りによる。81～83はロクロを使用して製作されたとみられる高台付杯である。81は内面部ミガキ+黒色処理され、径7.7cm、高さ1.2cm程度の高台が付く。底部の切り離し技法は再調整により不明である。82は内外面ともにロクロナデ調整され、底面には径5cm程度の高台が着く。高台の高さは欠損により不明である。83は高台部が剥落しており、内面部ミガキ+黒色処理される。84～87は中央調査区中央部から出土した須恵器环である。底部の残存する個体の底部切り離し技法は回転糸切りによる。88～98は土師器甌で、中央調査区中央部を中心に出土している。90は小形甌の体部下～底部片で、内外面共にロクロナデ調整され、底部は回転糸切りされる。製作に際してロクロを使用するものは同器種においてこれ1点のみである。91は長脣甌の体部下～底部片で、外面部ケズリ、内面部ハケメ調整される。93、96、97は体部片で、内外面ハケメもしくはナデ調整される。98は底部片で、外面部ケズリ・ナデ、内面部ナデ調

整される。100～102は須恵器の甕壺類片である。103～104は須恵器人型片である。103は外面が平行文タタキ目、内面はナデ調整される。104は平行文タタキ目、平行文アテグ痕を持つ。

### 3 陶 磁 器 (第38～42図、写真図版22～26)

#### (1) 国 产 陶 磁 器

##### ①常滑産陶器

SK17検出面から1点が出土している。34は広口壺の体部上半の破片で、外面に自然軸がかかる。小片であるため押印文は確認できない。内面はナデ調整される。

##### ②近世陶磁器

調査区の東西飛び地を中心にして13点を掲載した。105～107は染付皿で、18後～19世紀前半代の特徴を持つものである。106は肥前産の皿で、体部下半は丸みをもって立ち上がる。小片のため詳細は不明であるが、体部内面には草花文と思われる文様が描かれる。108は東側飛び地搅乱より出土した甕片で、体部に鉄軸がかかる。

#### (2) 輸 入 陶 磁 器

##### ①中国産青白磁

SK03埋土上位より1点が出土している。31は青白磁小壺蓋片とみられる。頂部が欠損しているため、つまみの有無については不明である。笠部外面には花弁状の陽刻が施され、その上に釉薬がかけられている。

### 4 土 製 品 (第42図、写真図版22～26)

土製品は2点が出土し、全て掲載した。109は中央調査区から出土した土錘である。110は調査区から出土した達磨形の根付である。両面とも型造り成形で、紐通しの穿孔がある。側面には接合部の痕跡が認められる。表面のみ赤色・黒色の彩色が見られる。

### 5 石 器・石 製 品 (第42図、写真図版22～26)

石器・石製品は12点出土し、全て掲載した。111はVIE7yグリッド搅乱から出土した石錐である。112はVE20uグリッドⅢ層から出土した尖頭状石器である。113はVE20uグリッドⅢ層から出土した石錐である。114・115は東側・中央調査区出土のスクレイパーである。117はVE5sグリッドⅡ層から出土した黒曜石のフレイク、118はVE23qグリッドⅠ層から出土した石核である。

### 6 金 属 製 品 (写真図版22～26)

#### (1) 時期不明の鉄製品および鉄滓

いずれも鋭化が著しく、X線透過写真撮影後も器種を判別できるものが限られる。鉄製品は5点、出土し、全て掲載した。58は清埋土から出土した釘である。120～122は棒状鉄製品である。123は鉄滓である。

## (2) 六 器 (第42図、写真図版22~26)

密教法具の「六器」が1点出土している。六器は密教修法の壇上に配して使用される密教法具で、6個を一具として使用することから「六器」の名称を持つ。六器は高台が付いた鏡と、それを置く高台付の台皿からなる。出土したのは鏡(119)が1点のみである。119は西側飛び地T1南側Ⅱ層中より出土した。この地点は西側飛び地にあたり、調査開始時に掘削した試掘トレンチの第Ⅱ層から出土したものである。この出土地点周辺の遺構の検出状況から後に埋納施設と考えられるような痕跡などは確認できず、六器が意図的に置かれた、或いは埋納されたといったような状況は読み取れなかつた。鏡は素文で、形状は口径4.8cm、底径2.1cm、器高2.2cm、高台高0.3cmを計る。高台部の器厚1mm、鏡本体部分の器厚1mm、重量は15.50gである。現状の色調は全体が緑青色を呈している。高台内には同心円状の削りの痕跡が付いている。器表面には埋没していた土に由来すると見られる灰黄色の付着物が見られる。

この六器について京都国立博物館、久保智康氏に実見していただき、年代等についてご教示を賜つた。製作年代については薄手の造りであること、器形の立ち上がりがやや開き気味であることから、「12世紀後半葉」の年代を示していただいた。形状が口径4.8cmと小ぶりであるが、高知県金剛頂寺所蔵金銅施壇具の六器がこれとほぼ同じ形状であることから、携帯用の法具である可能性があるとのことであった。県内においては毛越寺千手院蔵の銅蓮弁舎六器に最も近い器形を呈するとのことである。職製作手順は鋳型で大まかな形を鋳出し、それを削って成形したものとのご教示を受けた。

六器の材質分析については岩手県立博物館、赤沼英男氏に蛍光X線分析とEPMAによる分析を行っていただいた。分析方法、分析結果は第VI章に記載している。鏡(119)は銅、錫、鉛の三元系合金(青銅)で、少なくとも内面には少量の銀を含む金が鍍金されていた可能性が高いとのことである。

## 7 古 銭 (第39図、写真図版22~26)

1点のみ出土している。32はSK05から出土した寛永通寶である。いわゆる“古寛永”で、銅貨寛永通寶1期に所属する。

## 8 自 然 遺 物 (写真図版22~26)

東側飛び地の井戸跡から獸骨3点が出土している(写真図版37)。また、同じく井戸跡から井戸枠として用いられた可能性のある板材3点と、加工痕を持つと見られる割材2種が出土している。材質は鑑定の結果、いずれもヤマウルシの可能性があるとのご教示をいただいている。

## 第8表 土師器・漆器の相手品

— 66 —

| 品名         | 出光先品    | 相手品  | 記述 | 着色    | 着色部 | 半分外向済物(旧→新)  |             | 底部    | 形状 [cm] | 備考 |
|------------|---------|------|----|-------|-----|--------------|-------------|-------|---------|----|
|            |         |      |    |       |     | 明本体          | (口・体) ロクロナデ | 底部余切り | 口延      | 底盤 |
| 1 S T O 1  | 内側土器    | 土器容器 | 坏  | 70%   | 明本体 | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 2 S T O 1  | 西側内里東   | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 3 S T O 1  | P T 壁上  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 黄灰  | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 4 S T O 1  | 内側壁上    | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 5 S T O 1  | 直縁浅底    | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 6 S T O 1  | 直縁浅底    | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 7 S T O 2  | Q 186出光 | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 8 S T O 2  | Q 186出光 | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 9 S T O 2  | Q 186出光 | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 10 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ  | —           | —     | —       | —  |
| 11 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 12 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 13 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 14 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 15 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 16 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 17 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 坏  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 18 S K O 1 | 土器容器    | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 19 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 20 S K O 1 | 燒土(3種)  | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 21 S K O 1 | 土器容器    | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 22 S K O 1 | 土器容器    | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 23 S K O 1 | 土器容器    | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 24 S K O 1 | 2 壺     | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 25 S K O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 26 S K O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 27 S K O 3 | 2 壺     | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 28 S K O 3 | 2 壺     | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 29 S K O 3 | 2 壺     | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 30 S O 3   | 2 壺     | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 31 S K O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 32 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 33 S K O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 34 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 35 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 36 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 37 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 38 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 39 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 40 S D O 1 | 燒土(中)   | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 41 S D O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 42 S D O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 43 S D O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 44 S D O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 45 S D O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 46 S D O 2 | 燒土      | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |
| 47 S D O 3 | 1 壺     | 土器容器 | 烧  | 10%以下 | 灰灰  | (口・体) ロクロナデ? | —           | —     | —       | —  |

|                      | 種子  | 年  | 10%以上 | 所白   | (体) ロクロナデ     | 目白     | 目白(切り) | — | (5.0) |
|----------------------|-----|----|-------|------|---------------|--------|--------|---|-------|
| 48 S D 0.4 雄中        | —   | —  | 10%以下 | 所白   | —             | —      | —      | — | —     |
| 49 S D 0.4 雄中        | 4脚弱 | 柔  | 10%以下 | 所白   | —             | —      | —      | — | —     |
| 50 S D 0.4 雄中        | 紅黒弱 | 柔  | 10%以下 | 所白   | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 51 S D 0.6 素性1番      | 土脚弱 | 柔  | 25%   | 明黄弱  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 52 S D 0.5 活動性3種     | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い黄強 | (体) ケヌリ       | —      | —      | — | —     |
| 53 S D 0.5 固強1番      | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 黄灰   | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 54 S D 0.6 固強2番      | 細弱  | 柔  | 10%以下 | 灰    | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 55 S D 0.6 実強1番      | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い黄強 | (体) ケヌリ       | —      | —      | — | —     |
| 56 S D 0.6 実強2番      | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 微黄   | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 57 V E 17 h 実強十      | —   | —  | —     | 純い黄  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 58 V E 23 z 四脚       | 土脚弱 | 柔  | 4%    | 40%  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 59 V E 26 q 1脚       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い黄  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 60 V E 26 s 三葉       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い黄  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 61 V E 24 s 直弱       | 土脚弱 | 柔  | 20%   | 20%  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 62 V E 24 q ~ t 1脚   | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 高白付付 | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 63 V E 24 s 三葉       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 高白付付 | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 64 V E 25 r ~ s 1脚   | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 65 V E 23 r ~ s 1脚   | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 66 V E 25 r ~ s 1脚   | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 67 V E 25 q 1脚       | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 68 V E 23 t 1脚       | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 69 V E 23 r 1脚       | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 70 V E 24 s 三葉       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 71 V E 24 s 三葉       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 72 V E 23 q 1脚       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ロクロナデ     | —      | —      | — | —     |
| 73 V E 26 u 細脚紡毛土(実) | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 74 V E 17 h 足弱       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 75 V E 23 s 圓頭紡毛土(実) | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 76 V E 25 q 1脚       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 77 V E 24 q ~ t 1脚   | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 78 V E 25 s 三葉       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 79 V E 24 s 直弱       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 80 V E 25 q ~ t 1脚   | 1脚弱 | 柔  | 25%   | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 81 V E 25 r ~ s 1脚   | 1脚弱 | 柔  | 20%   | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 82 V E 24 q ~ t 1脚   | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 83 V E 24 s 三葉       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 84 V E 25 r ~ s 1脚   | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 85 V E 23 r ~ s 1脚   | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 86 V E 25 r ~ s 1脚   | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 87 V E 25 q 1脚       | 柔弱  | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 88 V E 23 t 1脚       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 89 V E 23 r 1脚       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 90 V E 24 s 三葉       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 91 V E 24 s 三葉       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 92 V E 23 q 1脚       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 93 V E 26 u 細脚紡毛土(実) | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 94 V E 17 h 細脚紡毛土(実) | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 95 V E 24 s 圓頭紡毛土(実) | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 96 V E 25 q 1脚       | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 97 V E 24 q ~ t 1脚   | 1脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 98 V E 20 u 三葉       | 土脚弱 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 99 V E 26 q 1脚       | 土脚弱 | 柔? | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 100 V D 19 v 1脚      | 柔也脚 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 101 V F 16 l 1脚      | 柔也脚 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 102 V F 17 e 1脚      | 柔也脚 | 柔  | 10%以下 | 純い白  | (体) ハケヌリ・ヨコナデ | —      | —      | — | —     |
| 103 東側陝谷 城山新済所       | 野地弱 | 大強 | 10%以下 | 灰    | (体) 平行又タキキ    | (体) ナゲ | —      | — | —     |
| 104 V E 22 g 1脚      | 無毛器 | 大強 | 10%以下 | 灰    | (体) 平行又タキキ    | (体) ナゲ | —      | — | —     |

第9表 植又土器類形態表

Mg 川土種類

Vc2 土質

Vc3 土質

Vc4 土質

質名

や今世

体

体

文様特徴

口端部・2箇上端の突起(B型) +小窓且、平行流線

地文のみ

1.R

第10表 地質調査結果

| No. | 地名           | 位置     | 岩層   | 岩層上  | 鉱物・鉱物 | 製作地 | 製造年代  | 販路     |
|-----|--------------|--------|------|------|-------|-----|-------|--------|
| 31  | S D O 1      | 山口海岸   | 柱状節理 | 有機物質 | 灰白色   | 灰白色 | 12世紀? | 新潟市新潟市 |
| 32  | S K O 3      | 4号施設上  | 黑色   | 有機物質 | 灰褐色   | 灰褐色 | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 33  | S K O 7      | 山上     | 漂白粉  | 有機物質 | 鉄・褐色  | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 41  | S D O 1      | 細土-中粒土 | 有機物質 | 有機物質 | 灰褐色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 57  | S D O 7      | 1層     | 有機物質 | 有機物質 | 灰白色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 60  | S D I 1      | 1層     | 有機物質 | 有機物質 | 灰白色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 61  | S E O 1      | 細土     | 有機物質 | 有機物質 | 鉄・褐色  | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 71  | 小字穴野 P P 1 5 | 1層     | 有機物質 | 有機物質 | 灰白色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 105 | 中央調査区 V E K  | 1層     | 有機物質 | 有機物質 | 灰白色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 106 | V F 16       | 1層     | 有機物質 | 有機物質 | 灰白色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 107 | 中央調査区 V E K  | 1層     | 有機物質 | 有機物質 | 灰白色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |
| 108 | V F 16       | 1層     | 有機物質 | 有機物質 | 灰白色   | 長石  | 16世紀? | 新潟市新潟市 |

第11表 土礦品調査表

| No. | 地名              | 位置 | 種類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 色 | 備考 |
|-----|-----------------|----|----|--------|-------|--------|-------|---|----|
| 109 | 中央調査区 V E K 1 層 | 土壌 | 板岩 | 4.7    | 1.45  | 0.9    | 5.5   | 赤 |    |
| 110 | 地點不明            | 土壌 | 板岩 | 2.95   | 2.55  | 0.9    | 5.5   | 赤 |    |

第12表 石礦品調査表

| No. | 地名            | 位置 | 種類        | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 色    | 備考     |
|-----|---------------|----|-----------|--------|-------|--------|-------|------|--------|
| -27 | SK O 2        | 細土 | 滑石        | △2.65  | 6.4   | 6.1    | 448.8 | 閃綠岩  | 新生代白堊紀 |
| 59  | SD O 8        | 土  | 滑石        | △2.65  | 2.6   | 2.5    | 21.2  | 閃綠岩  | 新生代白堊紀 |
| 62  | S E O 1       | 細土 | 滑石        | △2.65  | 2.6   | 2.5    | 220.4 | ミナリト | 新生代白堊紀 |
| 72  | 小字穴野 P P 3 8  | 土  | 滑石        | △1.9   | 7.2   | 5.1    | 282.7 | ミナリト | 新生代白堊紀 |
| 111 | VE 23 Y 横毛    | 土  | 滑石        | △1.9   | 1.4   | 0.3    | 0.5   | 黄白   | 新生代白堊紀 |
| 112 | VE 20         | 1層 | 滑石        | △2.7   | 2.0   | 0.8    | 6.2   | 黄白   | 新生代白堊紀 |
| 113 | VE 20         | 1層 | 滑石        | △3.15  | 2.3   | 0.6    | 2.7   | 黄灰白  | 新生代白堊紀 |
| 114 | 地盤調査区 日向水害山東十 | 砂質 | 滑石        | △3.9   | 2.4   | 0.6    | 7.4   | 黄白   | 新生代白堊紀 |
| 115 | 中央調査区         | 砂質 | 滑石        | △4.75  | 1.32  | 0.5    | 24.5  | 黄白   | 新生代白堊紀 |
| 116 | VE 15 S 1層    | 砂質 | リチャードフレイク | △2.5   | 2.85  | 0.95   | 8.1   | 黄白   | 新生代白堊紀 |
| 117 | VE 15 S 1層    | 砂質 | リチャードフレイク | △2.1   | 3.9   | 1.5    | 5.0   | 黄白   | 新生代白堊紀 |
| 118 | VE 23 Y 1層    | 砂質 | リチャードフレイク | △1.9   | 3.9   | 0.6    | 1.7   | 黄白   | 新生代白堊紀 |

第13表 砂・金剛製品調査表

| No. | 地名           | 位置 | 種類  | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 色                     | 備考  |
|-----|--------------|----|-----|--------|-------|--------|-------|-----------------------|-----|
| 58  | S D O 7      | 1層 | 六晶石 | △2.4   | 1.7   | 0.5    | 5.3   | —                     |     |
| 119 | 西側飛び地 T 1 南側 | 1層 | 六晶石 | —      | —     | 0.1    | 13.5  | 117.8kg、底至1.0m、壁高2.2m | 青浦製 |
| 120 | 中央調査区        | 1層 | 六晶石 | 9.1    | 1.2   | 0.3    | 30.9  | —                     |     |
| 121 | VE 20        | 1層 | 六晶石 | 11.7   | 2.0   | 1.0    | 113.8 | —                     |     |
| 122 | 地盤不明         | 1層 | 六晶石 | 5.9    | 0.5   | 0.4    | 6.3   | —                     |     |
| 123 | 地盤不明         | 1層 | 六晶石 | 5.9    | 0.5   | 0.4    | 6.3   | —                     |     |

第14表 その他調査表

| No. | 地名      | 位置 | 種類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 色   | 備考       |
|-----|---------|----|----|--------|-------|--------|-------|-----|----------|
| 63  | S E O 1 | 土  | 板岩 | 24.6   | 14.5  | 2.5    | 37.9  | ケヤキ | 重量は板岩のもの |
| 64  | S E O 1 | 細土 | 板岩 | 29.0   | 16.2  | 2.5    | 510.3 | ケヤキ | 重量は板岩のもの |
| 65  | S E O 1 | 細土 | 板岩 | 51.2   | 14.2  | 2.5    | 686.0 | ケヤキ | 重量は板岩のもの |
| 66  | S E O 1 | 細土 | 板岩 | 21.4   | 6.2   | 2.0    | 102.0 | ケヤキ | 重量は板岩のもの |
| 67  | S E O 1 | 細土 | 板岩 | 11.5   | 2.1   | 0.8    | 9.6   | ケヤキ | 重量は板岩のもの |
| 68  | S E O 2 | 土  | 板岩 | 8.7    | 1.3   | 0.6    | 6.2   | ケヤキ | 重量は板岩のもの |
| 69  | S E O 2 | 土  | 板岩 | 15.9   | 10.6  | 3.3    | 9.5   | ケヤキ | 重量は板岩のもの |
| 70  | S E O 2 | 土  | 板岩 | 11.06  | 5.5   | 2.3    | 53.2  | ケヤキ | 重量は板岩のもの |

第15表 古鉄鉱調査表

| No. | 地名     | 位置 | 種類   | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 色                      | 備考 |
|-----|--------|----|------|--------|-------|--------|-------|------------------------|----|
| 32  | SK O 5 | 1層 | 鐵水清流 | 2.4    | 1.2   | —      | 3.0   | 1周 (4.5kg) 1636 - 1669 | —  |

## VI 分析鑑定

### 1 道上遺跡第2次調査におけるテフラ E P M A 分析 (SD 0 6溝・第3層より採取された火山灰について)

弘前大学・理工学部・地球環境学科  
柴 正敏

道上遺跡より採取された、火山灰サンプル（1試料：SD 0 6溝より採取）について、以下の観察・実験を行った。本試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、研磨薄片を作成し、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザ（以下EPMA）がもちいられるようになってきた。本報告では、1試料についてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8800RL、使用条件は加速電圧15 kV、試料電流10 ナノアンペアである。補正計算はZAF法に従った。

ガラスの形態は主に輕石型で、少量のバブルウォール型も認められる。構成鉱物は、斜長石、斜方輝石、單斜輝石、石英及び鉄鉱である。本試料の火山ガラスは、EPMAによる分析により、十和田aテフラ、十和田八戸テフラあるいは十和田大不動テフラの何れかに対比される（表）。層序や出土した遺物を参考にし、対比する必要がある。

#### （参考文献）

- Hayakawa, Y. (1985). Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol.60, 507-592.  
Machida, H. (1999). Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan : Recent progress. 第四紀研究, 第38巻, 191-201.  
町田 洋・新井房夫 (2003). 新発火山灰アトラス－日本列島とその周辺－. 東京大学出版会, pp.336.  
柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 (2000). 青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成 (1). 弘前大学理工学部研究報告、第3巻、第1号、11-19.  
柴 正敏・中道曾智・佐々木 実 (2001). 十和田火山、降下輕石の化学組成変化－宇宙船の「露頭」を例として－. 弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17.  
柴 正敏・佐々木 実 (2006). 十和田火山噴出物のガラス組成変化. 月刊地誌、第28巻、第5号、322-325.

表1 道上遺跡第2次調査火山ガラスのEPMAデータ

|                              | SiO <sub>2</sub> | TiO <sub>2</sub> | Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> | FeO*  | MnO   | MgO   | CaO   | Na <sub>2</sub> O | K <sub>2</sub> O | n     | Total | EPMA       |
|------------------------------|------------------|------------------|--------------------------------|-------|-------|-------|-------|-------------------|------------------|-------|-------|------------|
| SD06溝<br>第3層                 | 越小               | 76.79            | 0.28                           | 1.88  | 0.03  | 0.42  | 1.64  | 3.47              | 1.38             |       |       |            |
|                              | 最大               | 77.47            | 0.46                           | 13.07 | 2.09  | 0.18  | 0.46  | 2.09              | 3.80             | 1.50  |       |            |
|                              | 平均               | 77.10            | 0.35                           | 12.91 | 1.88  | 0.12  | 0.44  | 2.03              | 3.62             | 1.44  | 9     | 100.13 WDS |
|                              | 標準偏差             | 0.261            | 0.064                          | 0.156 | 0.064 | 0.051 | 0.018 | 0.050             | 0.116            | 0.044 |       |            |
| 十和田a<br>青木・新井(2000)          | 77.75            | 0.36             | 12.73                          | 1.62  | 0.09  | 0.38  | 1.81  | 3.99              | 1.37             | 19    | 98.41 | WDS        |
| 十和田八戸(To-HpF)<br>青木・新井(2000) | 76.38            | 0.40             | 13.43                          | 1.90  | 0.11  | 0.44  | 2.22  | 3.88              | 1.24             | 8     | 96.56 | WDS        |
| 十和田大不動<br>青木・新井(2000)        | 77.82            | 0.36             | 12.45                          | 1.88  | 0.08  | 0.33  | 1.87  | 3.97              | 1.25             | 21    | 98.25 | WDS        |

測定値は無水で100%になるように再計算した。FeO\*は全鉄をFeOとして計算したことを表す。nは分析の点数、WDSは波長分散型EPMAを意味する。To-HpFは十和田八戸テフラの火沖流起源のガラスを意味する。

## 2 道上遺跡第2次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

### (1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

道上遺跡第2次調査では、近世以降とされる水田状遺構が検出された。そこで、プラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討した。

### (2) 試 料

分析試料は、西側飛び地の水路部において、上位より3層、8層、9層より採取された3点である。このうち、水耕耕作層と考えられていたのは9層である。なお、試料は調査担当者により採取され、当社に送付されたものである。

### (3) 分 析 法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーブ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を  $105^{\circ}\text{C}$  で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直徑約  $40 \mu\text{m}$  のガラスピーブを約 0.02g 添加
- 3) 電気炉灰化法 ( $550^{\circ}\text{C}$ ・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による  $20 \mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーブ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブ個数の比率を乗じて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）を乗じて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネの換算係数は 2.94、ヒエ属（ヒエ）は 8.40、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.21、チマキザサ節・チシマザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山, 2000）。

### (4) 分 析 結 果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヒエ属型、エノコログサ属、ヨシ属、ススキ属型、タケアシ科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1、図 1 に示した。主要な分類群に

については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。

イネは、3層、8層、9層のすべてより検出されている。このうち、9層では高い密度である。ヒエ属型は3層で、エノコログサ属は8層でそれぞれ検出されているが、いずれも低い密度である。ヨシ属は、8層と9層で検出されている。9層では比較的高い密度である。スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型はすべての層で、ミヤコザサ属型は8層と9層でそれぞれ検出されている。スキ属型は3層と9層で高い密度であるが、他の分類群はいずれも低い密度である。

### (5) 考 察

水田耕作土の可能性が考えられていた9層では、イネのプラント・オパールが3,000個/gの密度で検出されている。この値は、稻作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gに一致する。また、直上の8層は600個/gの低密度であることから、上層から後代のプラント・オパールが混入した可能性は考えにくい。こうしたことから、9層については水田耕作土であった可能性が高いと判断される。なお、3層と8層についてはプラント・オパール密度がともに600個/gと低い値であることから、上層あるいは他所からの混入と思われる。

イネ以外の分類群では、3層でヒエ属型が、8層でエノコログサ属型がそれぞれ検出されている。ヒエ属型には栽培種のヒエが、エノコログサ属型には栽培種のアワが含まれるが、どちらも他の野生種との識別は明確ではない。また、検出密度も低いことから、それぞれの層でヒエやアワが栽培されていた可能性を積極的に否定することはできない。なお、3層と9層ではスキ属型が非常に高い密度であることから、両層の堆積時は調査地あるいは畔畠等にスキ属が生育していたと判断される。

### (6) ま と め

道上遺跡第2次調査においてプラント・オパール分析を行い、稻作の可能性について検討した。その結果、

水田耕作層の可能性が考えられていた9層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、当該層において稻作が営まれていた可能性が高いと判断された。

### 文献

- 杉山真二 (1987) タケ亞科植物の微動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 31, p.70-83.
- 杉山真二・松田隆一・藤原宏志 (1988) 微動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志 (1998) 稲作の起源を探る。岩波新書。

表1 岩手県道上遺跡第2次調査のプラント・オバール分析結果

| 検出密度 (単位: ×100個/g) |   | 1号水田状遺跡 |     |     |
|--------------------|---|---------|-----|-----|
| 分類群 (和名・学名)        | 層位  | 3       | 8   | 9   |
| イネ科                | Gramineae (Grasses)                             |         |     |     |
| イネ                 | <i>Oryza sativa</i>                             | 6       | 6   | 30  |
| ヒエ属型               | <i>Echinochloa</i> type                         | 6       |     |     |
| エノコログサ属型           | <i>Setaria</i> type                             |         | 6   |     |
| ヨシ属                | <i>Phragmites</i>                               |         | 18  | 6   |
| ススキ属型              | <i>Miscanthus</i> type                          | 66      | 24  | 73  |
| タケ科                | Bambusoideae (Bamboo)                           |         |     |     |
| メダケ節型              | <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i> | 12      | 12  | 24  |
| ネザサ節型              | <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>         | 12      | 24  | 42  |
| チマキザサ節型            | <i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.              | 18      | 30  | 48  |
| ミヤコザサ節型            | <i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>             |         | 6   | 6   |
| その他                | Others  | 6       | 6   | 6   |
| 未分類等               | Unknown   | 263     | 210 | 273 |
| プラント・オバール総数        | Total   | 389     | 342 | 508 |

| おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m <sup>2</sup> ·cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出 |   |      |      |      |  |
|--|---|------|------|------|--|
| イネ   | <i>Oryza sativa</i>                             | 0.18 | 0.18 | 0.89 |  |
| ヒエ属型   | <i>Echinochloa</i> type                         | 0.50 |      |      |  |
| ヨシ属  | <i>Phragmites</i>                               |      | 1.14 | 0.38 |  |
| ススキ属型  | <i>Miscanthus</i> type                          | 0.82 | 0.30 | 0.90 |  |
| メダケ節型  | <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i> | 0.14 | 0.14 | 0.28 |  |
| ネザサ節型  | <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>         | 0.06 | 0.12 | 0.20 |  |
| チマキザサ節型  | <i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.              | 0.13 | 0.23 | 0.36 |  |
| ミヤコザサ節型  | <i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>             |      | 0.02 | 0.02 |  |

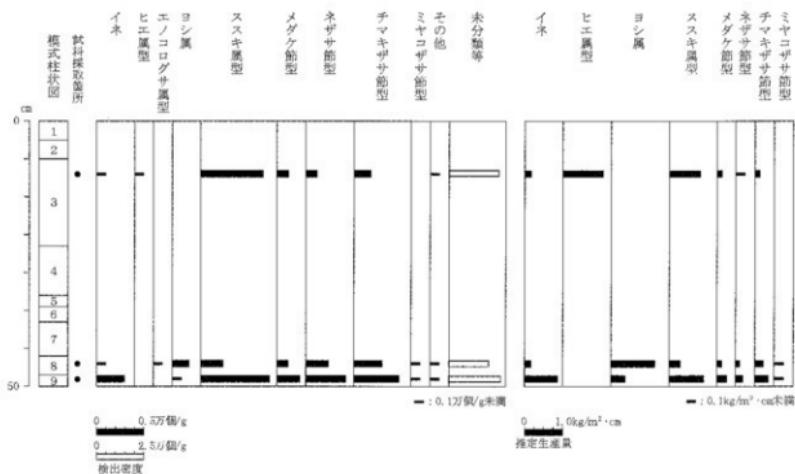
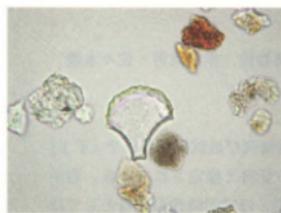
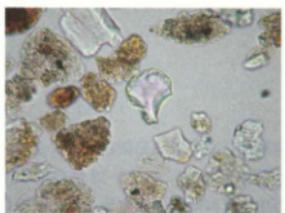


図1 道上遺跡第2次調査のプラント・オバール分析結果

## プラント・オパールの顕微鏡写真



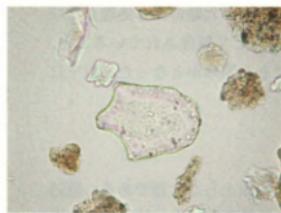
イキ



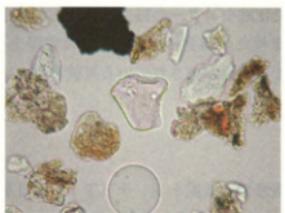
イキ



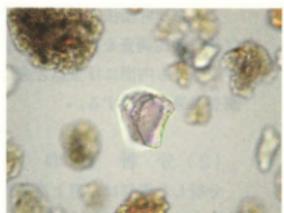
エノコログサ属型



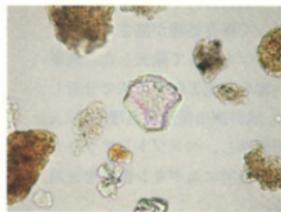
ヨシ属



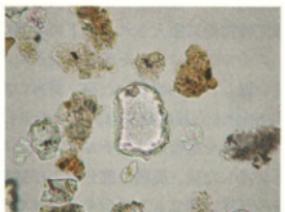
ススキ属型



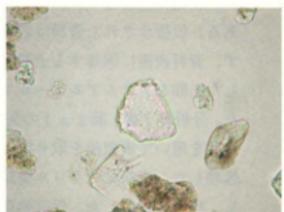
ネザサ節型



メダケ節型



チマキザサ節型



ミヤコザサ節型

— 50 μm

### 3 道上遺跡第2次調査出土六器の自然科学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男・佐々木整

#### (1) はじめに

岩手県奥州市に所在する道上遺跡第2次の緊急発掘調査によって、西側飛び地試掘トレンチ(T1)の第II層から六器が出土した。形態学的特長に基づき12世紀後半代の資料と推定されている。岩手県内からの発掘調査による六器の出土は河崎の構擬定地に続き2例目で、ほぼ同時代の資料としては伝世品である平泉町毛越寺千手院蔵の銅蓮弁飾六器が挙げられるという<sup>1)</sup>。

このたび財団法人岩手県埋蔵文化財センターの協力によって、道上遺跡出土六器の保存処理および自然科学的調査を実施する機会を得た。調査の結果、六器は青銅を素材として製作されていること、少なくとも内面には金銀合金による鍍金が施されている可能性が高いことが明らかとなった。以下に調査結果を報告する。

#### (2) 分析資料

分析した資料は、道上遺跡西側飛び地試掘トレンチ(T1)第II層から出土した六器である。既述のとおり、形態学的特長から、12世紀後半代の資料と推定されている。資料は破片の状態で検出され、埋蔵文化財センター・丸山直美氏によって仮接合された。図2a1は仮接合終了時の外観写真である。仮接合された資料は岩手県立博物館に搬入され、以下の手順に従って保存処理が施された。まず、資料表面に固着する土砂を、エチルアルコールを噴霧しながら毛ブラシを使って除去した。遊離した土砂をエチルアルコールで洗い流し、自然乾燥した後、資料の内外面を蛍光X線分析法で分析した。分析終了後、図2a1の矢印の部分から組織観察用試料を摘出した。試料摘出後脱塩処理を施し、ギ酸を用いて表面鏽を取り除いた。資料を蒸留水、エチルアルコールで洗浄し、ベンゾトリアゾール処理した。資料にアクリル樹脂を含浸した後、脆弱な部分および試料摘出箇所にエポキシ樹脂を充填し、整形・古色した。保存処理後の写真は図2a2に示すとおりである。

#### (3) 分析方法

資料内外面の蛍光X線分析は、大型試料室付蛍光X線分析装置(株式会社リガク・System 3511)を使って行った。分析は真空中で実施し、分光結晶LiF、EDDT、およびGeを選択して、重元素および軽元素を定性分析した。加速電圧および印加電流は50KV-50mAである。

蛍光X線分析終了後、六器から摘出した微小試料を、試料断面が観察面となる方向にエポキシ樹脂に埋め込み固定し、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。得られた研磨面をカーボン蒸着し、EPMA(日本電子株式会社製 JXA-8100)で分析した。

#### (4) 分析結果

図1a1は資料外面の蛍光X線分析法による定性チャートである。銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)を主成分とし、他に微量の銀(Ag)、鉄(Fe)、リン(P)、イオウ(S)、およびケイ素(Si)を含有する。内面からは上記元素に加え微量の金(Au)、砒素(As)、ビスマス(Bi)、およびチタン(Ti)が検出されている。

図2 b 1は摘出した試料のEPMAによる反射電子組成像(BEI)である。所々に金属光沢を呈する領域が観察されるものの、ほぼ全域が錫化している。反射電子像上端部(六器の内面側)には、金属光沢を呈する領域が線状に分布する。図2 c 1-c 3は図2 b 1領域Reg 1内部を拡大観察した反射電子組成像と定性チャートである。線状に分布する金属光沢を呈した領域からはCu、Sn、Pb、Au、およびAgが高濃度に検出され、他に微量のAs、S、P、アルミニウム(Al)、Si、および塩素(Cl)が分析されている。写真1に示す含有元素濃度分布のカラーマップを加味すると、金属光沢を呈し線状に分布する領域は、少量のAgを含むAuで、高濃度に検出されたCu、Sn、およびPbは金属合金の下層およびその周辺にある青銅が分析されたものと思われる。

図2 d 1は図2 b 1領域Reg 2内部の反射電子組成像である。図2 d 2のEPMAによる定性チャートおよび写真2の含有元素濃度分布のカラーマップに基づけば、領域Reg 2は少なくともCu-Sn-Pb系、Cu-Pb系、Cu-Sn-O系、およびCu-Sn-Pb-O系の4領域からなる。

上記の分析結果に基づけば、六器はCu、Sn、Pbの三元系合金(青銅)を素材とし、少なくとも内面は少量の銀を含有する金によって鍍金されていた可能性が高い。なお、蛍光X線およびEPMAによって検出された微量のAs、Fe、Bi、およびSは、主として青銅を製造する際に使用されたCuに混在していたものと思われる。

## 註

1) 当該遺跡を発掘調査された財团法人岩手県文化振興事業団蔵文化財センター・丸山直美氏からのご教授による。

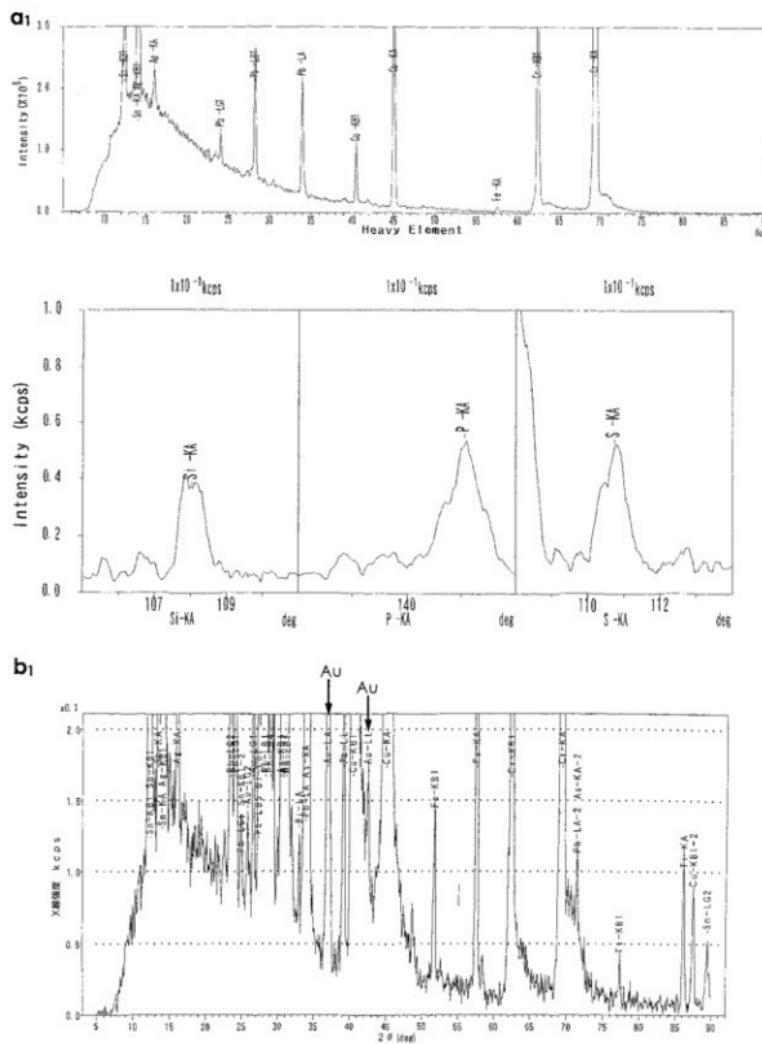


図1 道上遺跡第2次調査出土六器の蛍光X線分析法による定性分析結果

a<sub>1</sub>: 外面の定性チャート。b<sub>1</sub>: 内面の定性チャート。測定は真空中、X線管球(クロム)、管電圧・管電流は50kV-50mAで実施。a<sub>1</sub>上段およびb<sub>1</sub>は分光結晶LiF、a<sub>1</sub>下段のSiは分光結晶EDDT、PおよびSは分光結晶Geにより測定。

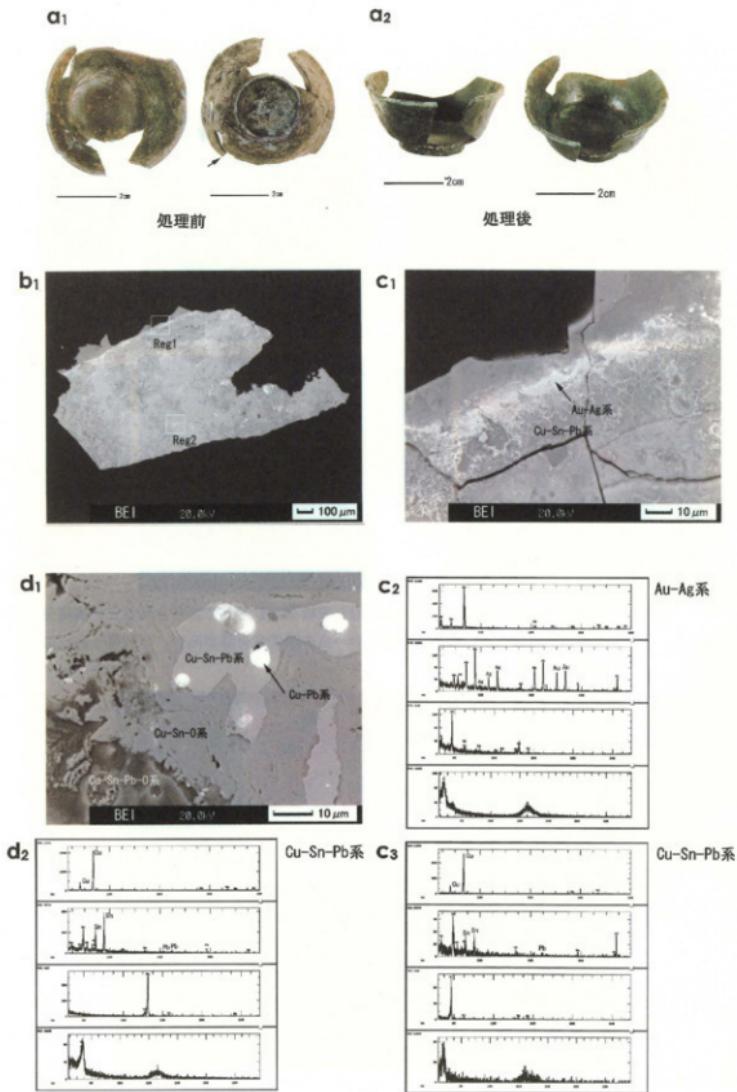


図2 六器の外観と摘出した試料の組織観察結果

a1・a2：それぞれ保存処理前および処理後の外観。矢印は試料摘出位置。b1：摘出した試料のEPMAによる反射電子組成像(BEI)。c1-c3：b1領域Reg1内部のEPMAによる反射電子組成像と定性分析結果。d1・d2：b1領域Reg2内部のEPMAによる反射電子組成像と定性分析結果。

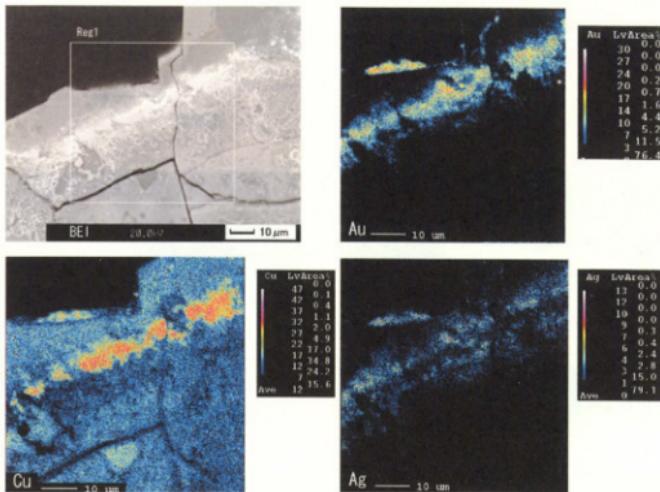


写真1 EPMAによる反射電子組成像(BEI)と領域Reg1内部に含有される元素濃度分布のカラーマップ。色が青→黄→赤→白の順に含有量が高い。反射電子組成像は図2a1領域Reg1に対応。

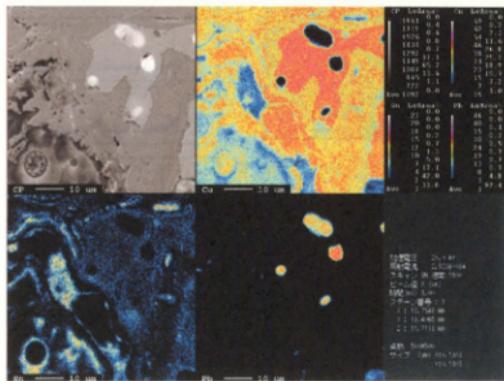


写真2 図2a1領域Reg2内部に含有される元素濃度分布のカラーマップ

## VII 総括

### 1 まとめ

#### (1) 遺跡の立地

道上遺跡第2次調査区は、北上川右岸に形成された沖積平野の微高地上に立地する。標高は31m前後で現況は水田および畑地である。北側には平成17年度の調査区が町道を挟んで隣接する。

#### (2) 調査の概要

今回の対象面積2,561m<sup>2</sup>のうち561m<sup>2</sup>は確認調査で、造構プラン検出段階での記録にとどめている。発掘調査の結果、遺跡は縄文時代から平安時代に至るまでの散布地および集落跡であることが判明した。調査区の基本層序は、第I層から第V層に分けられる。IV層上面およびV層上面が古代以降の造構検出面で、それ以下から造構は確認されていない。なお、造構の所属時期は供伴遺物、軸方向、建物構造、埋土の状況などから総合的に判断している。

検出造構は堅穴住居2(1)棟、掘立柱建物4棟、土坑21(5)基、カマド状造構4(3)基、大溝1条、溝18(4)条、井戸5(1)基、水田状造構1箇所、烟1箇所、柱穴列1列、小柱穴群103(22)である(カッコ内数値は確認調査分)。

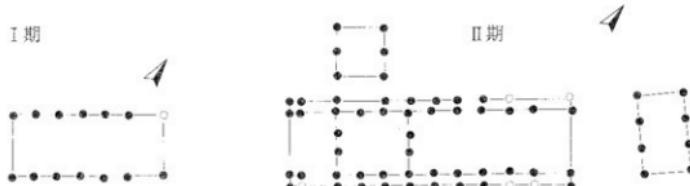
#### <平安時代の造構>

堅穴住居2棟、土坑1基が該当する。堅穴住居は東側飛び地と南側飛び地からそれぞれ1棟を検出した。残存状態が不良であるため、時期、種別の特定が困難であったが、造構プラン内のカマド相当部に現地性の焼土が形成されていること、焼土から床面にかけて少量の土師器・須恵器が出土していること、周囲の削平状況などから判断して堅穴住居の残存部であると判断したものである。出土した土器の年代観から、本造構は9世紀後半に位置づけられる。

土坑としてはSK01土坑の1基のみが該当する。埋土下位～底面にかけて土師器・須恵器片が多量に出土したもので、焼土を含む堆積土と共に一括廃棄されたような状態を示す。出土した土器の年代観から本造構は9世紀後半に位置づけられ、堅穴住居と同時期の造構と考えられる。

#### <中世後半～近世初頭の造構>

掘立柱建物4棟が該当し、すべて南側調査区から検出されている。これらの建物跡は規模・形態から母屋(SB01・02掘立柱建物)と、付属屋(SB03・04掘立柱建物)と考えられる。母屋においては重複関係に2期の変遷が認められ、下屋を作わないSB02掘立柱建物から、下屋を伴うSB01掘立柱建物への建て替えが行われ、この際、面積が74.4m<sup>2</sup>から159.6m<sup>2</sup>へと拡張している。本建物には東側にSB03掘立柱建物、北側にSB04掘立柱建物が付属するが、東側のSB03掘



第43図 掘立柱建物変遷図

立柱建物とSB01掘立柱建物の梁行が一致しており、母屋を改築した際に付属屋を新築したものと推測される。北側のSB04掘立柱建物は以前からSB02掘立柱建物に伴っていたか、SB01掘立柱建物への改築時に新築されたものであるか双方の可能性がある。

建物の構造は上屋柱のみで構成されるもの（SB02掘立柱建物）から上屋柱とそれに対応する下屋柱が前後に付く形の構造（SB01掘立柱建物）へと変化していることから、中世後半から近世初頭にかけて見られる延跡構造に類似する（羽柴1997）。本遺構の所属時期については、建物の構造、柱穴埋土上位から出土した瀬戸美濃系陶器鉢、周辺の大溝より出土した志野稲皿から判断して、中世後半から近世初頭頃と捉えたい。

＜時期不明の遺構＞

土坑については調査区全域から18（4）基を検出した。これらからは遺物が殆ど出土しない、或いは出土しても共伴関係が不確実であるなど、時期の特定を行うのが困難であった。このうち共伴遺物を持つものについて以下にまとめた。

9世紀後半代の土師器・須恵器が出土した土坑…SK01、SK02、SK03、SK17

12世紀代の遺物が出土した土坑…SK03、SK17

近世の古錢が出土した土坑…SK05

但しいずれも検出面～埋土上位にかけての出土であったため、これをもって時期決定を行うには根拠が少なく不明な点が多い。SK05土坑については古寛永（1期：1636～1659）が出土しており、近世の可能性が考えられる。

カマド状遺構は南側調査区より4基検出された。遺物は全く出土しておらず、時期など詳細については不明である。掘立柱建物との位置関係、主軸方向の類似などから、これらと同時期の可能性がある。特にSB03は、そのプラン内にカマド状遺構が位置するもので、母屋に付属する炊場であった可能性がある。

大溝は中央調査区から1条、溝としたものは全域から18（4）条を検出した。SD01大溝の埋土上位から志野稲皿片が、下位から土師器・須恵器が出土している。周辺の遺構との関連性や埋土の状況からSD01が古代の溝である可能性は低いと考えられ、古代遺物の出土自体は付近からの混入とみられる。このほか、SD04・05・15溝がSD01大溝と軸方向を殆ど同一にしており埋土の特徴も似ることから、ほぼ同時期のものと判断している。これら溝群の新旧関係については、堆積状況を確認できる断面が残存しておらず、明らかにできなかった。

井戸は東側飛び地を中心として、南側調査区～北側調査区にかけて5（1）基を検出した。1～4号井戸の周辺から掘立柱建物は見つかっていないが、同区北側では小柱穴群がある程度まとまって認められており、周辺に建物が存在した可能性がある。5号井戸は位置関係からSB01～05掘立柱延跡に付属するものと考えられ、中世後半から近世初頭に位置づけられる可能性がある。SE01井戸、SE02井戸から陶磁器1点、ケヤキ製の板材3点、ヤマウルシと見られる未炭化の木材2点、獸骨3点が出土している。時期決定できるような遺物を欠くため、その詳細は不明である。

水田状遺構は西側飛び地（水路部）から1箇所検出された。検出した範囲での面積はおよそ47m<sup>2</sup>を測る。本遺構は立地、堆積土の状況等から判断して、水田跡群と床土（もしくは作土層）、および水田放棄後の自然堆積層の可能性があると判断された。この遺構の性格を特定する目的で、プラント・オ・パール分析を実施している。その結果、水田耕作土もしくは床土と想定した第9層から、イネのプラント・オ・パールが3,000個/gの密度で検出された。この値は、稻作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを満たしている。また、直上の第8層は600個/gの低密度であ

ことから、上層から後代のブランチ・オバールが混入したとは考えにくく、これにより第9層が水田耕作土であった可能性が高いと判断される結果が得られた（詳細については第VI節参照）。

これと関連して、隣接するSD06溝底面にて確認されたテフラの同定を行うため、火山ガラスのEPMA分析を委託した。結果、To-Cuテフラの可能性が高いとの報告を得ている。本遺構底面に同テフラが堆積した理由は不明であるが、検出状況および遺構の時期から判断して、二次堆積と考えられる。本遺構は水田状遺構と隣接しており、その用水路として存在した可能性が想定される。

畑は中央飛び地において1箇所確認されたものである。表土直下の褐色土を耕作しており、現地形となる以前の畑跡と考えられる。

#### ＜出土遺物＞

以下の遺物が出土した。縄文土器片2点、石鎚1点、土錐1点、七輪器、須恵器、陶磁器、常滑窯陶器（広口壺片）、中国産青白磁（小壺蓋片）、近世陶磁器（瀬戸美濃系、肥前、在地）、金属製品（鉄製品、六器1点、錢1点）、自然遺物（獸骨片3点、ケヤキ板材3点、ヤマウルシ削材？2点）である。縄文時代の遺物は微量で、調査区内に遺構が存在しないことから、他所からの混入と推測される。土師器・須恵器は殆どが平安時代9世紀後半代に収まるもので、時期幅は小さいと推測される。

### （3）時代別の性格

道上遺跡第2次調査では、①縄文時代（散布地）、②9世紀後半代（集落跡）、③12世紀代（散布地）、④中世後半～近世初頭（集落跡）の遺構・遺物が検出された。以下、時代毎にまとめる。

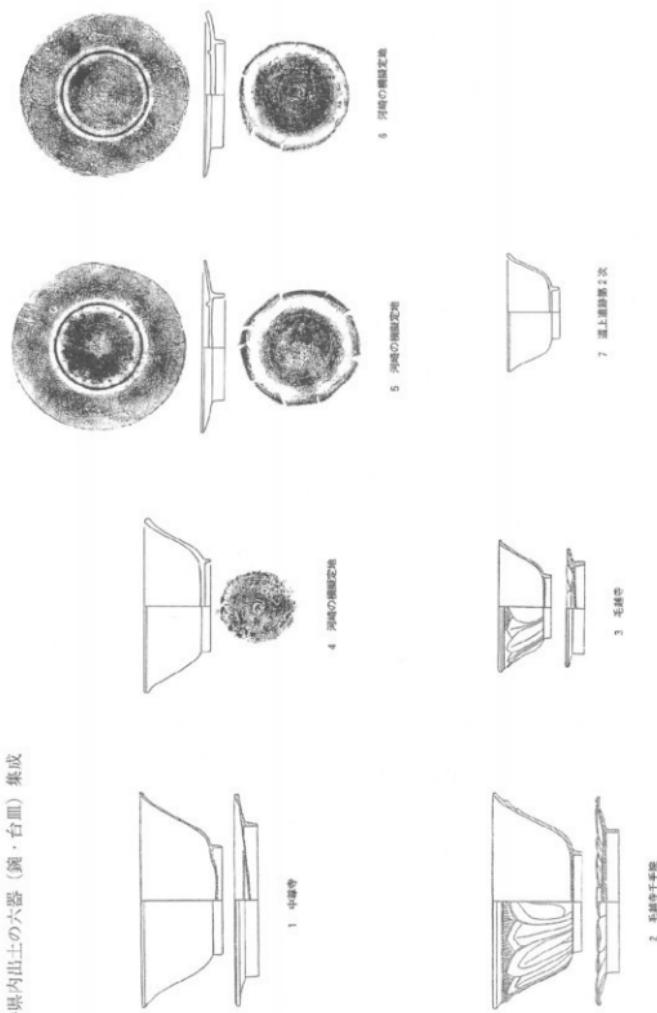
①縄文時代の遺物は調査区中央部IV層から2片のみ出土した。古代の遺物を疎らに含む層からの出土であり、かつ縄文時代の遺構も確認されていないため他所からの混入と考えられる。縄文時代の遺構は調査前の試掘調査時に南西方において埴設土器が確認され、付近から石皿が出土していることから、集落の主体が遺跡の西方にある可能性がある。

②古代集落の痕跡としては堅穴住居2棟と土坑1基が見つかった。残存状況を見る限り、堅穴住居等が仮に存在しても近年の土地改変の影響で消失した可能性が高いと見られる。平成17年の第1次調査においても古代の堅穴住居2棟が確認されているが、いずれもカマド煙道部～燃焼部が検出されたにすぎない。調査区のみならず、周辺の古代旧地形が広範囲にわたって失われていることが確認された。

③明確に12世紀代に比定される遺構は検出されていないが、青銅製六器、青白磁小壺（蓋）片、常滑広口壺片が中央～北西の遺構内外から出土している。これにより、以前から周知されていた白山区域における12世紀の遺物分布域が更に広がることとなった。この発見は、これまでに何度も言われてきた、当該地域が平泉と関連する可能性を強化するものであるとともに、新たに六器が加わったことによって仏教都市としての平泉の影響下にあったことも示唆させるものといえる。

④中世後期～近世初頭には掘立柱建物が存在した。これには時期不明とした大溝・溝が伴うことが想定され、それを区画とする屋敷であった可能性を指摘できそうである。また、掘立柱建物が検出された地点は、安永風土記ほかに記載されている「古屋敷」に相当する可能性がある。これらについては次節にて詳述する。

岩手県内出土の六器（碗・台皿）集成



1～3は奈良國立博物館蔵『世教法具』より転載

第44図 岩手県内出土の六器集成

## 2 考 察

## (1) 六器・陶磁器の年代観と性格

今次調査にて出土した遺物のうち、六器、常滑広口壺片、青白磁小壺蓋片はいずれも希少遺物であり、平泉町外である当地域においてはなおさらである。ただし、六器は表土に近いレベルから、常滑広口壺片と青白磁小壺蓋片は遺構検出面～埋土上位にかけての出土であり、いずれも出土層位面から年代を推定することは出来ない。このうち、六器の材質については岩手県立博物館の赤沼氏により蛍光X線による分析を行っていただいた。その結果、素材は青銅製であること、少なくとも内面には金銀合金による鍍金が施されている可能性が高いことが明らかとなっている。

本項では、この3点の年代観および性格に付いて、遺物自体の特徴から述べていく。これにあたり、六器に関しては京都国立博物館の久保智康氏に、また、平泉町教育委員会の八重樋忠郎氏には3点全て実見していただき、それぞれの年代観に付いてご教示頂いた。以下は両氏から得られた知見をもとにまとめたものである。

発掘調査で六器が出土した事例は、県内では河崎の攝定地以外ではなく、本遺跡が2例目となる。平泉町内でもこれまで出土例はなく、非常に稀であるといえる。本遺跡出土資料は口径4.8cmで六器としては小振りである。久保氏によると、高知県金剛頂寺所蔵金銅旅壺具の六器もこれとほぼ同口径で、携行用の旅壺具とされている。本遺跡例も同様の旅壺具である可能性が指摘出来るという。なお、製作年代は12世紀後半代の可能性が高いとのことである。同時期の遺物としては毛越寺所蔵のものが挙げられる（第44図）。

本遺物がなぜここに遭棄されることとなったのか、その経緯は全く推測の域を出ない。ただし、紛れもなく12世紀代のこの地で密教修法が行われていたことを語る物証であるといえよう。

さらに、常滑広口壺片と青白磁小壺蓋片に関する限りでは、八重樋氏に実見していただいた結果、12世紀第3～4四半期くらいとの年代観を示していただいている。このことは、六器の年代観とともに極めて調和的である。よって、3者は同時期の遺物と考えられる。

なお、常滑広口壺片、青白磁小壺蓋片、密教法具（六器）という遺物の特殊性は、当地が以前から平泉と強い関係性を持ち続けていた事を示唆するものと推測される。

\* 12世紀代の遺構・遺物を検出した周辺の事例

| No. | 遺跡名    | 所在地      | 遺構       | 遺物                  | 時期          |
|-----|--------|----------|----------|---------------------|-------------|
| 1   | 五輪經塚   | 白山字籠林    | 石室       | 常滑三筋文壺・珠洲系波状文瓶      | 12c 第3四半期   |
| 2   | 寺の口經塚  | 古城字寺の上   | 石室？      | 須美甕・波状經墨書きわらけ       | 12c 前半代     |
| 3   | 川前遺跡   | 白山字川前    | 方形窪溝3基   | 中國産白磁瓶・北宋銘          | 12c代        |
| 4   | 川前遺跡2次 | 白山字川前    | —        | 須美甕（12c後半）・常滑甕（I型式） | 12c 第3四半期   |
| 5   | 田高1遺跡  | 白山字田高    | 井戸跡・溝跡   | 常滑・波状・かわらけ          | 12c 後半代     |
| 6   | 道上遺跡1次 | 白山字道上    | —        | 手づねかわらけ             | 12c 後半代     |
| 7   | 道上遺跡2次 | 白山字合野    | —        | 青白磁小壺蓋・常滑広口壺・六器     | —           |
| 8   | 大塚     | 李大桜・經塚・塚 | ピット（墓坑？） | 口縁部一部を欠くかわらけ1点      | 12c代        |
| 9   | 登高羽毛經塚 | 生母字段ノ原   | 經塚       | —                   | 12c 繩墨か     |
| 10  | 生母經塚Ⅱ  | 生母字長根    | 塚2基      | 過去に甕が出土か            | 12c 繩墨か     |
| 11  | 經塚山    | 生母字二子    | —        | —                   | 12c 繩墨か（口伝） |
| 12  | 宗廟     | 古城字達沢    | 溝・柱穴     | かわらけ・白磁甕            | 12c         |
| 13  | 前塚     | 古城字若郷    | 溝        | —                   | 12c ?       |

## 参考文献

- 前沢町教育委員会 1998『町内遺跡詳細分布調査報告書』古城・白山地区】岩手県前沢町文化財調査報告書第6集
- 前沢町教育委員会 1999『町内遺跡詳細分布調査報告書』前沢地区】岩手県前沢町文化財調査報告書第8集
- 前沢町教育委員会 2000『町内遺跡詳細分布調査報告書』生母地区】岩手県前沢町文化財調査報告書第10集
- 岩手県教育委員会 1944『岩手県内遺跡発掘調査報告書』(平成5年度)】岩手県文化財調査報告書第95集

白山字合野総図



第45図 「白山字合野」地籍図

## (2) 掘立柱建物と大溝・溝の関連性

土塁、堀によって包囲される形態を持つ屋敷地は、胆沢地方を中心として伊達領内である県南地域に集中しており、特に胆沢扇状地から北上川緑谷平野に面した地域に多いとされる（遠藤 2007）。今回の調査では中央調査区～南側調査区にかけて掘立柱建物群と溝群が検出されている。本項では、胆沢地方の豪族屋敷の事例と比較しながら、双方の関連性を指摘したい。

今次調査区内で計測されるSB01～04掘立柱建物群とSD01～04・05溝群（以下、溝群）の距離は、約40m離れている。現地表面の標高は溝群を境に北側が54cm低くなり、31.29mを測る。この微高地は溝群の東西延長方向に帯状に認められる（第5図参照）。

SD01大溝を境として南側には3本の溝跡が位置しており、この部分に第Ⅲ層の堆積が認められる。良好な土層断面が得られず、詳細は不明であるが、並走するSD01大溝とSD15溝の間は11mを測る。現況では一様に平坦であったが、SD01大溝を境として南側が明らかに一段高くなっていること、SD15溝との間にⅢ層を構築土とする土塁が形成されていた可能性がある。

これらの溝の主軸方向はほぼ同一で、北を軸として40～46度東に触れる。いっぽう、建物の主軸方向はN=50°～Eで、先述の溝跡との開きは4～10度に留まる。

以上、個々の遺構の立地および主軸方向、出土遺物の時期という観点を踏まえた上で、これらを方形区画で囲まれた屋敷跡と捉えた場合、可能性は否定できない。そう仮定した場合、北側の境界はSD01大溝、東側の境界はSD07溝（現未舗装路）、南側の境界は明治時代における地割の66-1・46-2南端付近、西側の境界は同じく地割界となる現西側調査区付近であると考えられる。現地形はこれらの区画を境にしていずれも外側に低く落ちており、それぞれ東西南北の境界である可能性がある。この結果、100～120m四方の方形区画を形成していたとの想定が可能である。

ただし、現況では良好な断面が確認できなかったこと、調査区域が狭い範囲に限定されることから、これ以上言及することができない。第46図に上述した屋敷の想定区域を示しておく。



第46図 方形区画を伴う屋敷跡（想定図）

## (3) 白山神社旧社地と今次調査区との関連性（予察）

東側飛び地の南隣には白山神社が存在する。この神社は大同年間創建（806～809年）と伝わる旧六日入村鎮守で、別名ほんじん坊といふ。もともとは今の社地の100m程西方にあって、宝暦三年に現在地に遷座されている。この神社の祭神はもともと万物生成の神、伊邪那美命一柱であったが、明治四年の布令により村内の小社を鎮守の宮に合祀することになり、愛宕神社と天満宮を合祀した。その結果それぞれの祭神、可具土命、皆原道真が加わり、現在は三柱になっている。ほんじん坊の名の由来は、安永年間（1772-1781）に寶勝坊という山伏がここに住み、この地の人を教化したことにより、村人がこの人物の徳を慕い安永以降に生まれたものだという。以下は白山神社にかかる文献資料である。以下に挙げ連ねる。

## ○宮城縣・宮城縣史編纂委員会『宮城縣史28』p153 風土記御用書出〔寫本〕六日入村

## 一、村鎮守白山社

一、小名 合野々

一、勧請 誰勧請ト申義並年月共相知不申候尤當村舊社地ヨリ遷座之年月共相知不申候事

一、社地 方四間 一、社 東向七尺作

一、地主 當村本山派寶勝坊 一、別當 右寶勝坊

一、祭日 九月廿九日

## ○宮城縣・宮城縣史編纂委員会『宮城縣史28』p153 風土記御用書出〔寫本〕六日入村

## 一、舊跡

## 古屋敷

一、白山舊社地、右由來相知不申、當時明地相成居候事

## ○前沢町史編集委員会『前沢町史（下巻二）』p879 岩手県胆沢郡前沢町教育委員会

……白山字川岸場大室屋敷鈴木家所藏「六日入村伝記」（先祖養作記、寛政年間と推定）に、

「白山權現は、もと現在地より五十間ばかり西方の古屋敷に在り」とあり、また安永風土記名木の部に

## 一、名木 十本

一、白山旧社地 一本 遷り一丈六尺

杉

と書かれており、この杉の所在を古老に尋ねると、現在地の西方約百メートルの地点で、「六日入村伝記」の記載にほぼ一致する。即ち現在地の合野佐藤正家を結ぶ線上のほぼ中央に近く、菊池千一家の真南に当る場所で現在畠地になっていて、ここに神社があり、この地一帯が「古屋敷」と呼ばれた地域と想定される。

## ○ 調査委員菅野義之助報告「後藤壽庵の事蹟とその住地附近の切支丹史實に關する調査」『岩手縣史蹟名勝天然記念物調査報告』（第八號） p 65-67

(ホ) 膽澤郡白山村字合野々發堀の切支丹に關する遺品

膽澤郡には前記の外なほ所々に夥しく切支丹宗徒の瀆漫したことは疑ふべからざる事實であるがそ

の痕跡が今日殆滅して之を知るに由なきことである但幾何かの材料が發見せらるるにつれ片鱗によりて龍蛇の全形を鬱氣ながら推測せらるのである白山村發堀の遺品も亦斯る性質の資料である。白山村は後藤壽庵の居所福原の東南約二里を距てたる北上河畔の一村である同村合野々の部落に於て明治八年數多のメダイが發堀された發堀者はその箇所に發見に關する記念碑を建ててある（これは先年史蹟調査員小笠原謙吉氏によって報告せられて居る）

明治八年六月二十八日採□

耶蘇瑪利亞 聖像採掘之碑

発見者 鈴木隆治建之

遺品はその後發堀者の宅地内に一小祠を建てここに安置して居つたが火災のために全部失はれたことは甚遺憾に堪えぬことであるその當時の實見者現白山村長鈴木儀一郎氏の言によれば遺品は玻璃器の中に封入せられてあつたが器物は錫のために粉碎せられたその中には種々の形のメダイ及三寸ばかりのマリヤの像と思はるもの並に珠数五（コントチなるべし）が存してあつた元來この地は發堀者鈴木隆治氏の所有地でもと同家の屋敷地であつたが同家は他に移転し畠地となつた以後もその中の数十坪の地は常に清淨になし置き歳の始めには供物を備へて之を拝し之を堀れば大蛇が出現すべしなどと云ひ博へて居つたと話して居る實物は失はれたが幸明治九年佛國宣教師ア、ベリオス（M G A. Berlioz）氏（本年八月迄函館司教の職に居られた）遺物を一見しその一部を携え帰りて寫眞となし置けるものがあつた卷頭に掲げた（寫眞版参照）は即それである。

然らばこの遺品を使用せるものは誰れがあつたかの問題であるがこれにつきては同村の舊家鈴木長雄氏所藏六日入邑日記に次のことが記してある（この記録は同氏の祖先鈴木常雄氏の手記で同氏は勝澤郡の大庄屋をつとめ学識のあつた人で仙台藩の儒者田邊希文や蘆東山等とも往來し和歌には殊に優れて居つた該記録は明和七年三月下旬に記せる旨を書して届り信を置くに足るものである六日入村といふは合野々の所在地の舊名で今は白山村の一部である）

一、古屋敷 合野々に跡存す

常雄云往昔藤戸十左衛門と云ふ人あり切支丹に組して罪に處せらる寛永中なり下中多く住居して俱に切支丹類族たる故に寛永十七年四月依 公命十九人斬罪於仙台十一人在所ニテ同罪次に關所の者九人行方知れずと云々皆これ等の人の住む所が白山権現社前に池あり水底人骨を拾ふことありと疑らくは右罪人を投捨せる處か據ある故爰に載す

と記してある藤戸十左衛門は如何なるものか不明であるが寛永の頃は此の地方は伊達政宗の領地であるから無論その臣下の封をここに受けたるものであらう池底の白骨は如何なるものなるか勿論不明であるが白山権現は切支丹遺品發堀地の東方1町ほどに現存する社である。

なほ白山村中に大塚と称する所がありここに切支丹信徒の所刑せられたものが埋められたとの□説もありそこに供養塔がある。

ここに藤戸十左衛門という名前が登場する。この人物に関しては様々のキリストンに関する文献に記述がある。これらを要約すれば次のようになる。

この藤戸十左衛門という人物は仙台藩の初期にこの地方の有力な武士で、胆沢郡白山を給地としていた。本人ならびにその臣下はキリスト教信者で、寛永年間に合野の屋敷に暮らし、家中のものも多かった。寛永十七年四月、家中のもの共々捕われ仙台・江戸に送られて斬罪に処された。

仮にこれらの記録が大筋で事実であったならば、本遺跡の南側調査区検出の掘立柱建物は安永風上記、旧記などに見える古屋敷の可能性がでてくる。この掘立柱建物の年代は発掘調査により中世後半

から近世初頭頃と推定されていることから、文献に書かれる年代とも合致する。翻って、そうであるならばこの建物の存続年代は葛西氏による支配から伊達領となって以降、(婚姻により) この地に所領を与えられていたという仙台藩の武士、藤戸十左衛門がこの地へ居住したのが16世紀末葉頃と推測されることから、寛永17年(1640)にキリスト成敗に遭うまで約50年にわたって存続した建物ということになり、この間に2期の変遷を辿ったことが判明する。安永風土記が書かれる安永6年(1777)には、すでに137年の年月が経過していたこととなり、そのころ既に空き地であったという点にも不自然なところはない。白山神社が屋敷の敷地内にもともと存在したものか、屋敷が廃絶した後に他所から遷座されたものは、文献から読み取ることはできないが、この地点が白山神社旧社地の古屋敷という地点にあたる可能性があるということを指摘しておきたい。また、明治8年、六日入村の鈴木隆治氏が同村古屋敷と称する畠地より発掘したものというメダイの写真が「史蹟名勝天然記念物調査報告」第八号に掲載されているので参照されたい。(明治9年撮影)。

以下に関連する文献を挙げる。

#### ○只野 淳「切支丹資料石母田文書」「宮城縣史12」p661、705-707

藤戸十左衛門

やはり前項『六日入邑旧記』の中に記載されている切支丹武士である。すなわち、

藤戸十左衛門という御下中衆、寛永年中より当村住居申儀いかがに候や、此儀不決候、然るに同人家中に縁これある者、当村に在之是を以て考ふれば、当村住居にも有之べきか。里老云。合野々地の内、古屋敷とて地あり、この地、元は藤戸十左衛門と云者住居したる処なり。下中の者多く切支丹に付て寛永十七年四月人數十九人軒罪は仙台にて行はれ、同十一人在郷にて行はれ、又九人は御欠所に被相行、行術知らざるの由なり。右十七人の内、十左衛門女房の父六日入古館惣左衛門と云者なり。依而近年御尋有之候 云々 (筆者註・右人數に疑しきところあるも原文のまま掲ぐ)

前者と同じく武家であると思われる。合野々という地は、六日入村鈴木家の西方に位し、今は畠地となつてゐるが、明治九年土地の開墾に際して、多数のメダイが発掘されたという。文中寛永十七年(一六四〇)四月仙台での十九人の「殉教記録」は初見である。

23. 貞享五年辰五月廿六日切支丹藤戸十左衛門内之者についての書状(石母田文書)

藤戸

一、□□十左衛門□□死罪被仰付候。藤戸十左衛門内之者与五郎儀先年古大陸殿江右与五郎妻子五人ニ而被相預候付而寛文七年ニも被相改候處此度は御改無之候付而如何様御首尾可被成候哉と被仰聞候付而先年之御留相考見申候處寛文七年御改ニハ先年御穿壁ニ会申候者共ハ縱 公義江御書上不被成者も一式書出ヲ取其内を以吟味仕御書上之首尾仕候と相見江申候。右与五郎儀は御書上被遊者ニ無之付此度之御改ニも被相除候弥自今以後茂御改無之者ニ御座候間此段可被仰付候(下略)

貞享五年辰五月廿六日

青田藤左衛門 印

久光善左衛門 印

#### ○只野 淳「みちのく切支丹」p128 英知出版 昭和57年

藤戸十左衛門

仙台領の東磐井郡、胆沢郡地方の有力なキリストンで仙台家中だったが、史実として全く現れなかった。胆沢郡白山村六日入に藩政時代、この地方の大肝入の職にあった、鈴木東氏宅に秘蔵されて

いる大肝入御用留や他の文書の中に『六日入村旧記』と題する一冊の自筆本がある。これは宝暦・天明時代の大肝入であった鈴木常雄翁の祖父の話や口碑、伝説、又は自家蔵の古記録等より書き留めた貴重な日記風のもので、常雄翁と菅江真澄翁との交遊の規模など興味の深い記録がある。

この「旧記」から抜萃すると、「藤戸十左衛門という御下中衆、寛永年中より当村住居申儀はいかが候や、此儀不決候、然に同人家中に縁これある者、当村に在え、是をもって考ふるれば、当村住居にも有えべきか。里老云ふ合野々地の内古屋敷とて地あり、この地元は藤戸十左衛門と云者住居したる処なり。下中のもの多く、切支丹に付て寛永十七年四月人數十九人軒罪は仙台にて行われ、同十一人在郷にて行われ、又九人は御欠所に被相行行知らざる由なり、右十九人の内、十左衛門女房の父六日入古館惣左衛門と云者なり、依而近年御尋有之候。」この東磐井・胆沢郡地方キリストンの史実を証明する貴重な資料である。十九人が仙台で、一人が所成敗となつたことがわかる。合野々と地名は鈴木家より西方に位置する畠地で、明治九年頃、畠地改良のとき多くのメダイが発掘されたところだが、藤戸十左衛門は仙台藩の初期にこの地方の有力な武士であつたらしく、文中にも「家中の者多く」とあり相当身分ある武士であつたろう。寛永十七年四月、十九人の仙台における殉教は初めてである。

#### ○菅野義之助『奥羽切支丹史』p300・394 株式会社正出版社 1974

.... さらに町の東北に隣接せる白山村には、明治九年数多のメダイが発掘せられて、徳川時代の初期この地の領主藤戸十左衛門ならびにその臣下が、切支丹信徒であったという記録が裏書きせられたが、これらの信徒の信仰は、フランシスコ=デ=イエズスの感化によるものかまたは程遠からぬ水沢市福原の後藤寿庵の邸内を根拠とせる耶蘇会の僧侶の宣教に基づくものか、これを明らかにすることはできない。しかし、フランシスコ=デ=イエズス神父の通弁であり、伝道の助手であるベドロ九兵衛の生地が、前沢であったことを思う時、フランシスコ神父もこの地方を巡教し、福音宣布に努力したるべきことは、けだし想像を許さるべきである。

.... 藩臣青木定綱は、陸前宮城郡高城郷幡谷に所領をもつ切支丹であったが、婚姻で胆沢郡白山を給地とする藤戸十左衛門と互いに訴人となり、転切支丹として処刑を免れたけれど、実際は転宗しないで、ひそかに信仰をつづけていることが明らかになり、寛永十七年四月、十左衛門が斬罪となり、定綱も慶安元年官禄を没収せられた（伊達世臣家譜卷十三）。

#### ○下中 弘 日本書紀地名大系第三巻『岩手県の地名』p209 平凡社 1990

##### 六日入村 現前沢町白山

.... 当地には江戸時代初期キリスト教が伝えられ、渋谷太郎左衛門は元和七年（一六二一）ローマ教皇に宛てた奉答文（バチカン博物館蔵）の署名者として知られる。しかし当地の藤戸十左衛門やその同志とともに寛永一六年（一六三九）に捕えられ処刑された（『六日入旧記』鈴木文書）。明治初年村内合野の畠からマリヤ像を発掘したので、明治八年（一八七五）同地に聖像探掘之碑が建てられた。

#### ○司東真雄著 「岩手のキリストン」p44 岩手出版 1984

##### 下胆沢郡へ手入れ

同年四月胆沢郡六日入村合野々で藤戸十郎左衛門と家中十九人中十一人が処成敗され、八人は土地を追われ、この内平右工門女房の父古館の惣左衛門は行方不明となり御尋ね者となった。

○司東真雄著『江戸時代における岩手県南の切支丹』昭和37年 私刊

ハ 矢ノ森・下脇沢郡を中心として

.... また、長部では、寛永十二年に廻成敗があったことを伝えており、六日入の藤戸十郎左エ門は同十五年四月に捕えられ、同十七年には六日入から十九人仙台へ引立てられ、惣右エ門、与助等十一人が転宗したにも関わらず廻成敗され、九人が欠所にされている。

#### 参考・引用文献

前沢町史編集委員会『前沢町史(下巻)』岩手県前沢市前沢町教育委員会 水沢印刷株式会社 1988

調査委員会野義之助報告「後藤壽徳の事蹟とその住地附近の切支丹史實に關する調査」[『岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告』(第八號) 1927]

宮城縣・宮城縣史編纂委員会『宮城縣史12』

財團法人宮城縣史刊行会 凸版印刷株式会社 1961

宮城縣・宮城縣史編纂委員会『宮城縣史28』風土記測用書出(寫本) 六日入村

財團法人宮城縣史刊行会 凸版印刷株式会社 1961

下中 弘 日本歴史地名大系第三巻『岩手県の地名』平凡社 1990

菅野義之助『夷羽切支丹史』株式会社正出版社 1974

只野 淳『みらのく切支丹』英知出版 1982

司東真雄『岩手のキリシタン』岩手出版 1984

司東真雄『江戸時代における岩手県南の切支丹』私刊 1962

黄江真澄著 内田武志・宮本常一編訳『昔江真澄遊覧記2』平凡社 2000

池田雅美『豪族集落の研究』大明堂 1986

前沢歴史の会『十周年記念誌 時代を旅して』私刊 2005

相原康二『前沢町白山地区出土の珠渦鹿座について』『紀要 XX』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001)

30岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第317集 2000

羽柴直人『岩手県平泉町における近世獨立柱民家について』『紀要 XVI』30岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997

# 写 真 図 版

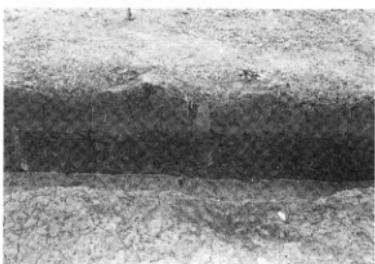




調査区全景（北から）



基本土層（南側調査区）



基本土層（中央飛び地）



基本土層（西侧飛び地）



調査区周辺現況（北西から）

写真図版1 調査区全景・基本土層



東側飛び地全景（東から）



東側調査区全景（北西から）



北側調査区全景（南西から）

写真図版2 東側飛び地／東側・北側調査区全景



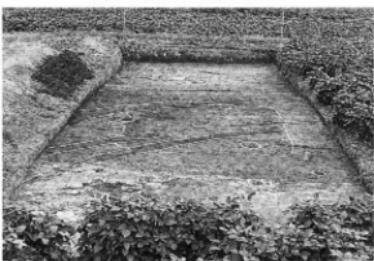
中央調査区北側全景（北西から）



中央調査区南側全景（南東から）



南側調査区全景（南西から）



南側飛び地全景（南東から）

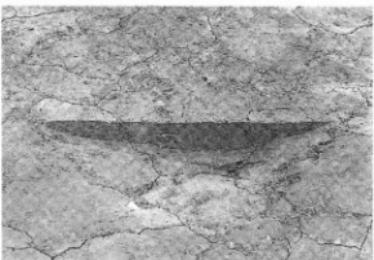


西側調査区全景（北西から）

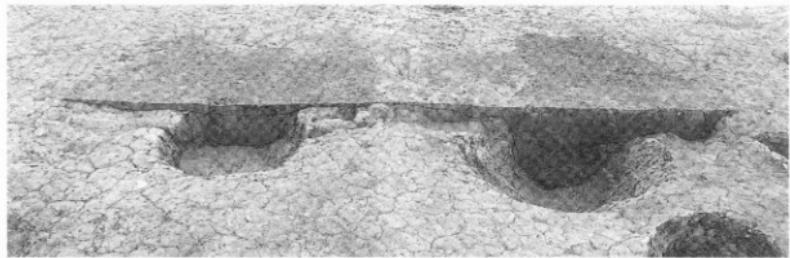
写真図版3 中央・南・西側調査区／南側飛び地全景



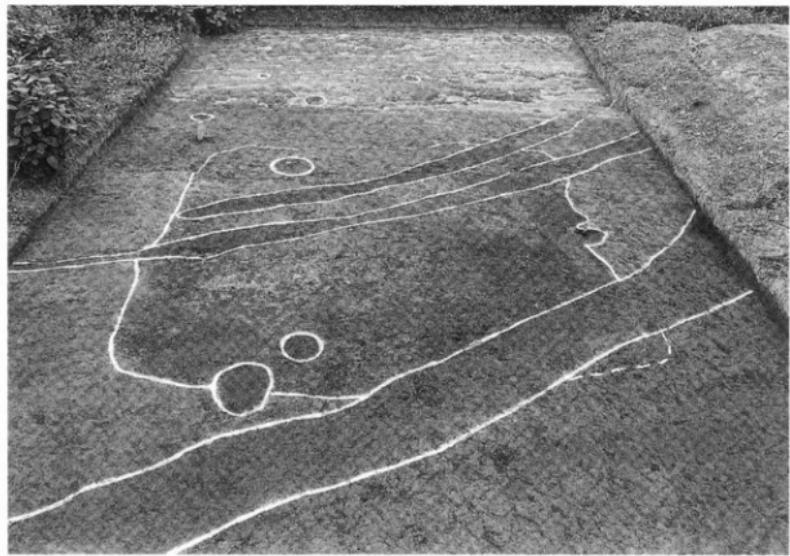
S101堅穴住居 平面（北西から）



S101堅穴住居 カマド焼土断面（北東から）

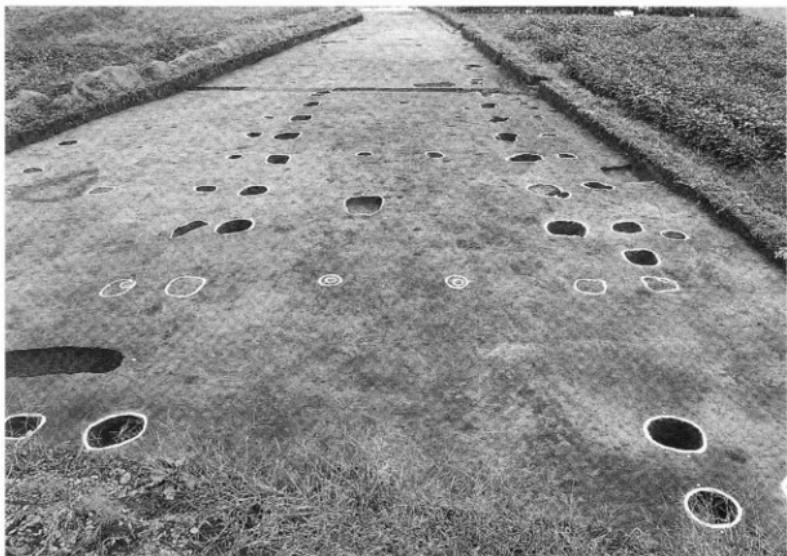


S101堅穴住居 断面（北西から）



S102堅穴住居 検出状況（南東から）

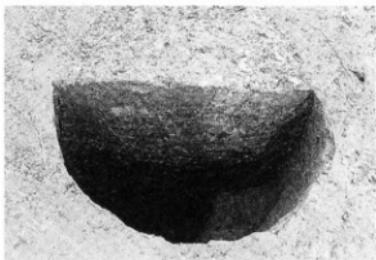
写真図版4 S101・02堅穴住居



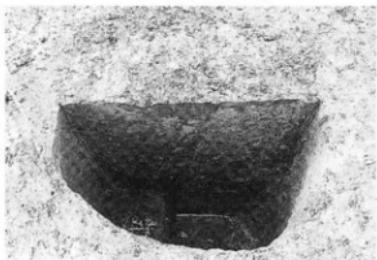
S B 0 1 挖立柱建物 完掘（南西から）



P P 5 断面（南東から）



P P 13 断面（南東から）



P P 16 断面（南東から）



P P 34 断面（南東から）

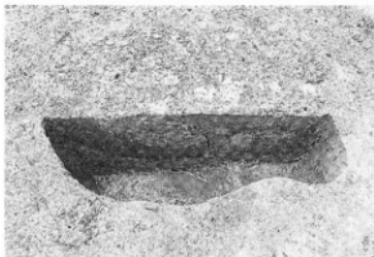
写真図版5 S B 0 1 挖立柱建物



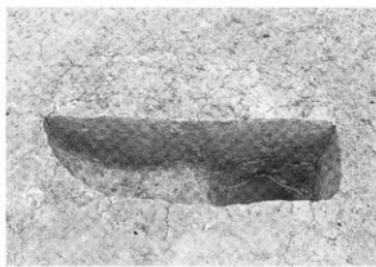
S B 0 2 掘立柱建物 完掘（北東から）



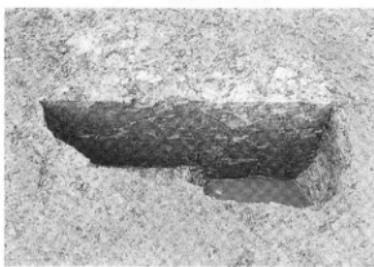
P P 1 断面（南東から）



P P 2 断面（南東から）



P P 3 断面（南東から）

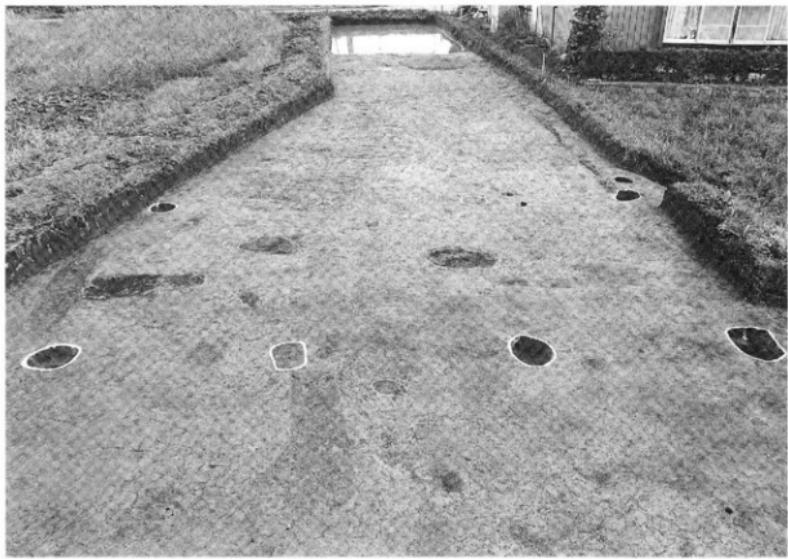


P P 7 断面（南東から）

写真図版 6 S B 0 2 掘立柱建物



S B 0 3 挖立柱建物 宅掘（北西から）



S B 0 4 挖立柱建物 宅掘（南西から）

写真図版7 S B 0 3・0 4 挖立柱建物



SK 01 土坑 完掘 (西から)



SK 01 土坑 平面 (東から)



SK 01 土坑 遺物出土状況 (東から)



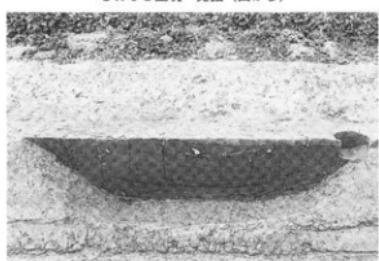
SK 01 土坑 断面 (西から)



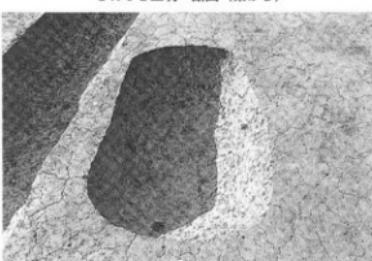
SK 02 土坑 完掘 (西から)



SK 02 土坑 断面 (東から)



SK 03 土坑 平・断面 (東から)

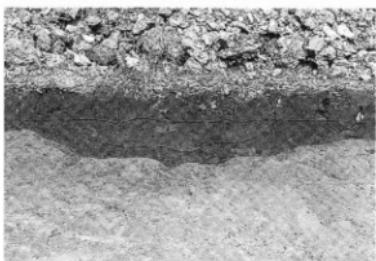


SK 04 土坑 完掘 (南から)

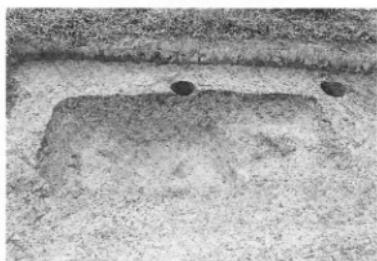
写真図版8 SK 01～04土坑



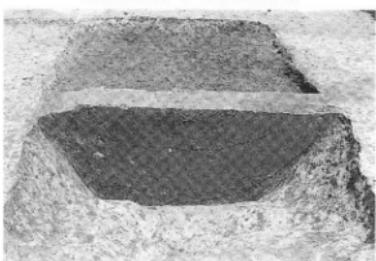
SK 04 土坑 段面（西から）



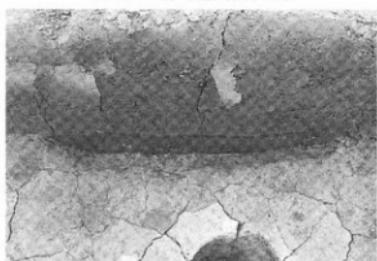
SK 05 土坑 平・断面（北から）



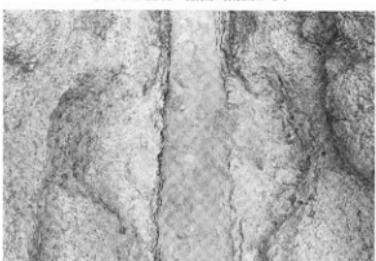
SK 06 土坑 完掘（北西から）



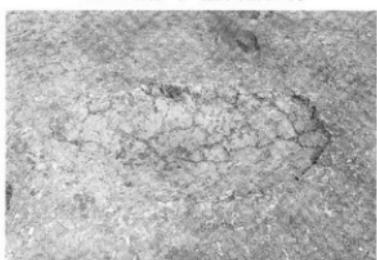
SK 06 土坑 断面（南西から）



SK 07 土坑 平・断面（北西から）



SK 11 土坑 完掘（北から）



SK 08 土坑 完掘（西から）

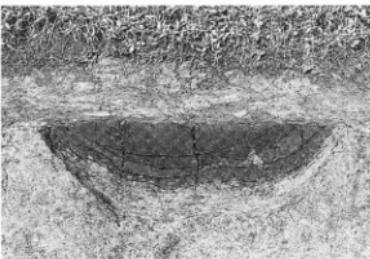


SK 08 土坑 断面（西から）

写真図版9 SK 04~08・11土坑



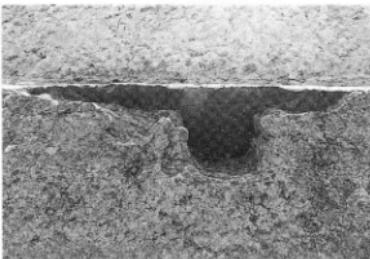
SK 09 土坑 完掘 (東から)



SK 09 土坑 断面 (西から)



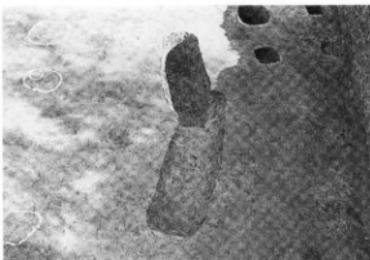
SK 10 土坑 完掘 (南西から)



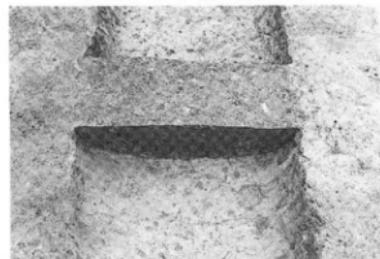
SK 10 土坑 断面 (北東から)



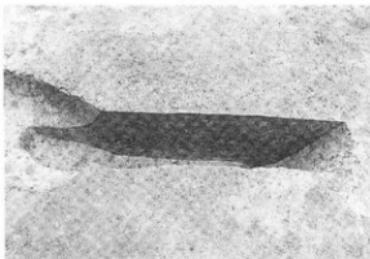
SK 12 土坑 平・断面 (南西から)



SK 14・15 土坑 完掘 (北西から)

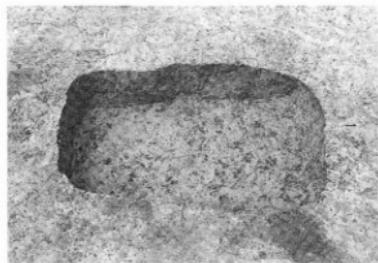


SK 14 土坑 断面 (北西から)

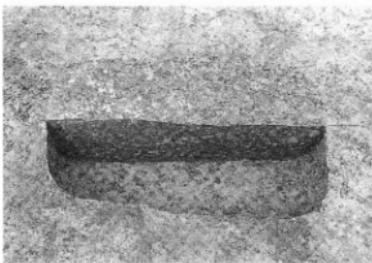


SK 15 土坑 断面 (南西から)

#### 写真図版10 SK 09・10・12・14・15 土坑



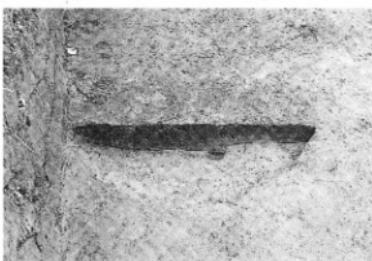
SK 13 土坑 完掘 (南東から)



SK 13 土坑 断面 (南東から)



SK 16 土坑 完掘 (東から)



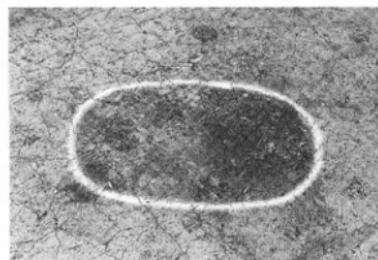
SK 16 土坑 断面 (南から)



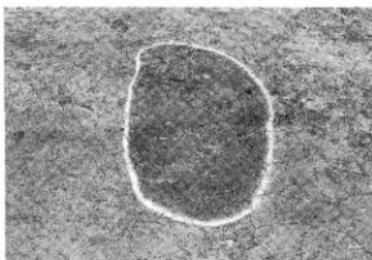
SK 17 土坑 検出 (西から)



SK 12・18 土坑 検出 (北西から)

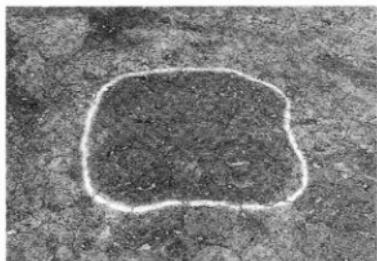


SK 19 土坑 検出 (南から)



SK 20 土坑 検出 (西から)

写真図版 11 SK 12・13・16~20 土坑



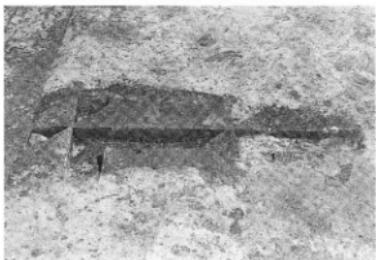
S K 2 1 土坑 検出（西から）



S X 0 1 カマド状遺構 検出（南東から）



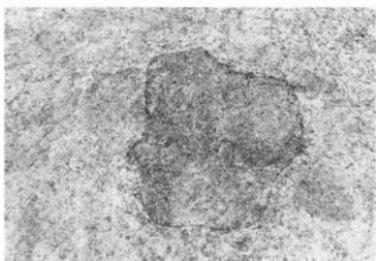
S X 0 1 カマド状遺構 平面（南東から）



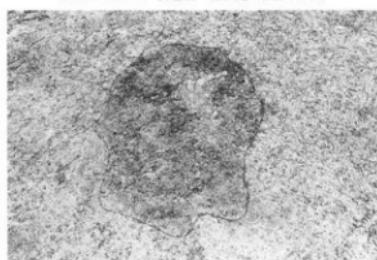
S X 0 1 カマド状遺構 断面①（南西から）



S X 0 1 カマド状遺構 断面②（南西から）



S X 0 2 カマド状遺構 検出（北東から）



S X 0 3 カマド状遺構 検出（北から）

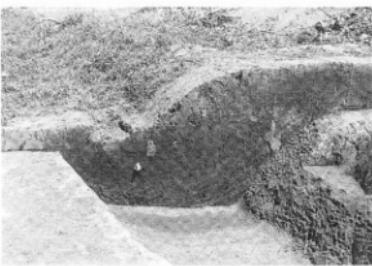


S X 0 4 カマド状遺構 検出（西から）

写真図版12 S K 2 1土坑、S X 0 1～0 4カマド状遺構



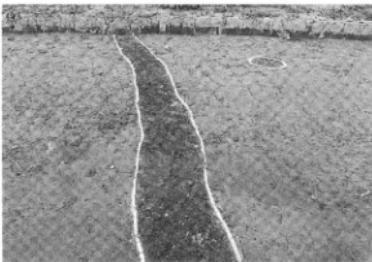
SD 01 大溝 完掘 (東から)



SD 01 大溝 断面① (西から)



SD 01 大溝 断面② (東から)



SD 02 溝 検出 (西から)



SD 02 溝 断面① (西から)



SD 02 溝 断面② (東から)



SD 02 溝 完掘 (東から)



作業風景

写真図版 13 SD 01 大溝・02溝



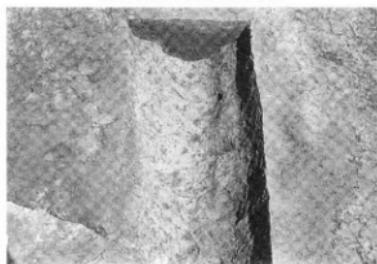
SD 03溝 完掘（西から）



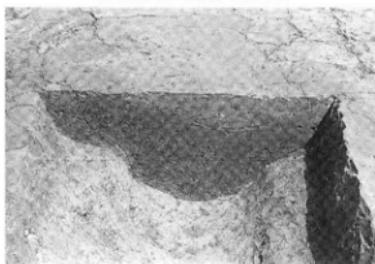
SD 03溝 断面①（西から）



SD 03溝 断面②（東から）

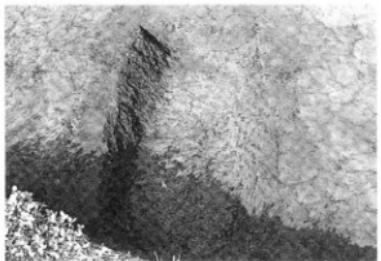


SD 04溝 完掘（西から）

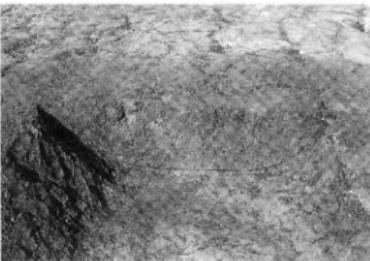


SD 04溝 断面（西から）

写真図版14 SD 03・04溝



SD 05溝 完掘 (南西から)



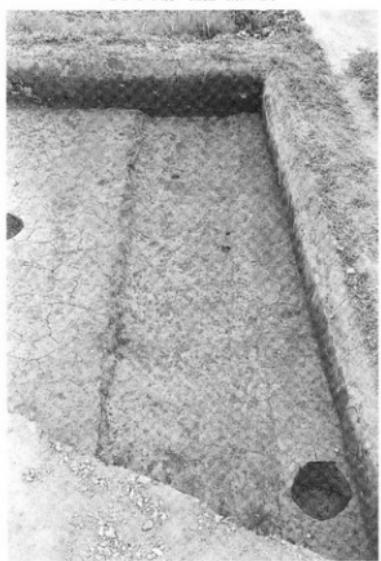
SD 05溝 断面 (南西から)



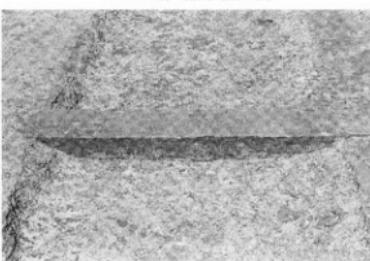
SD 06溝 完掘 (東から)



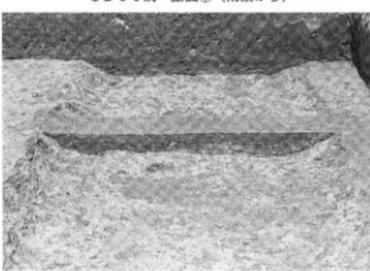
SD 06溝 断面 (東から)



SD 07溝 完掘 (南東から)



SD 06溝 断面① (南東から)

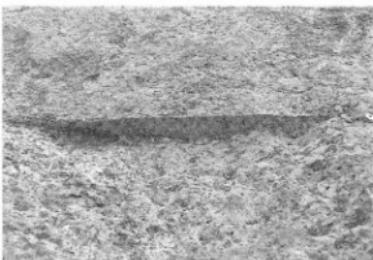


SD 07溝 断面② (南東から)

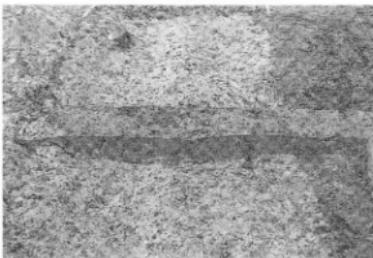
写真図版15 SD 05~07溝



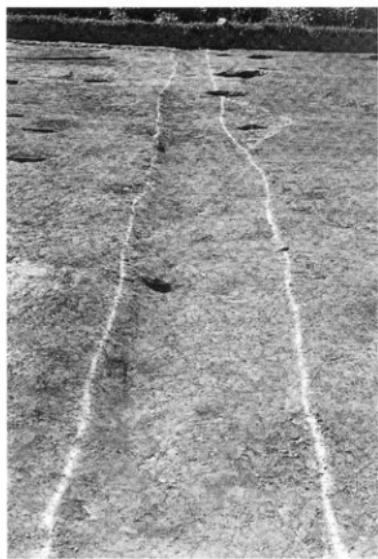
SD 08溝 完掘（北東から）



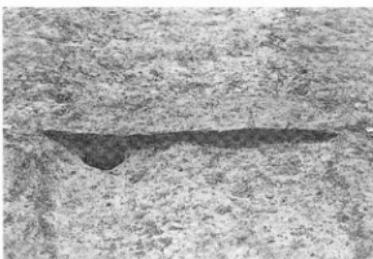
SD 08溝 断面①（北東から）



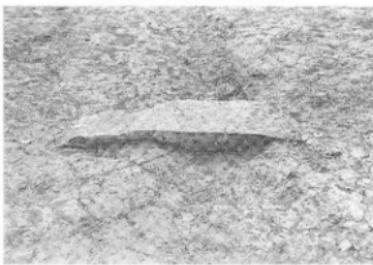
SD 08溝 断面②（南西から）



SD 09溝 完掘（南東から）

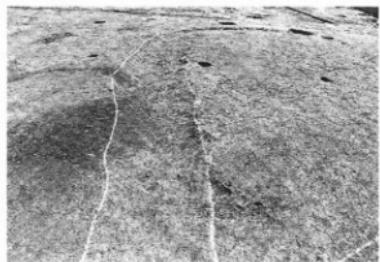


SD 09溝 断面①（南東から）

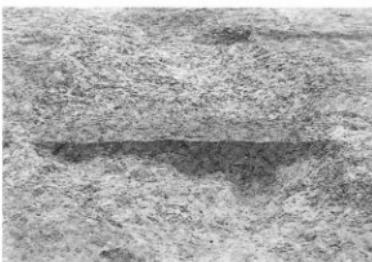


SD 09溝 断面②（北西から）

写真図版 16 SD 08・09溝



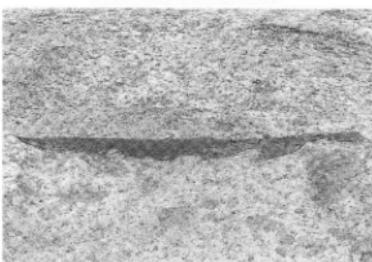
SD 10溝 完掘 (北東から)



SD 10溝 断面 (南西から)



SD 11溝 完掘 (東から)



SD 11溝 断面 (東から)



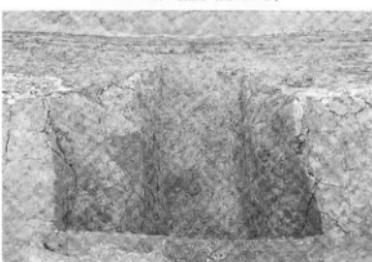
SD 12溝 完掘 (北東から)



SD 13溝 断面 (南西から)

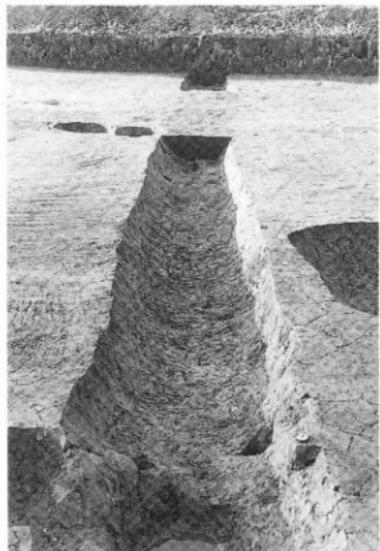


SD 13溝 完掘① (北東から)



SD 13溝 完掘② (南西から)

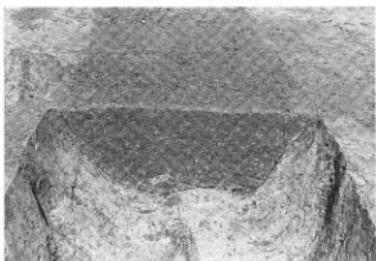
#### 写真図版17 SD 10～13溝



SD 14溝 完掘 (南東から)



SD 14溝 断面① (南東から)



SD 14溝 断面② (南東から)



SD 14溝 断面③ (南東から)



SD 16・17溝 検出 (北東から)



SD 18溝 検出 (北東から)

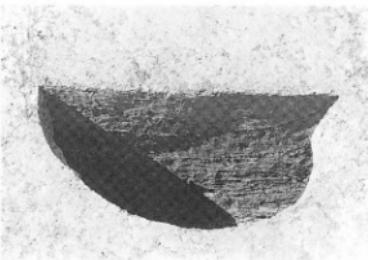


SD 19溝 検出 (北東から)

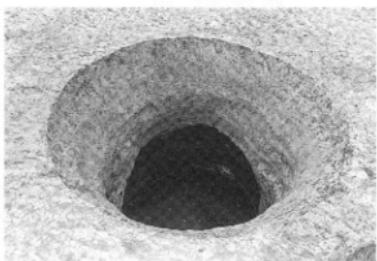
写真図版 18 SD 14・16～19溝



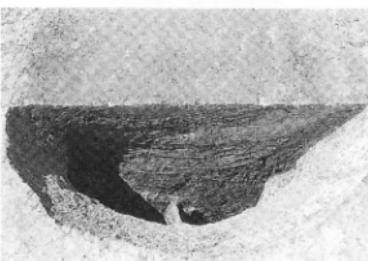
SE 01 井戸 完掘（北から）



SE 01 井戸 断面（南から）



SE 02 井戸 完掘（東から）



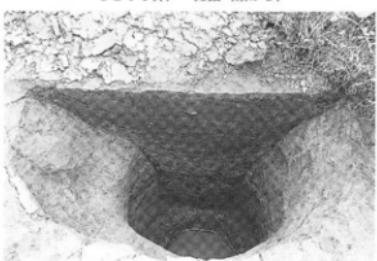
SE 02 井戸 断面（南から）



SE 03 井戸 完掘（東から）



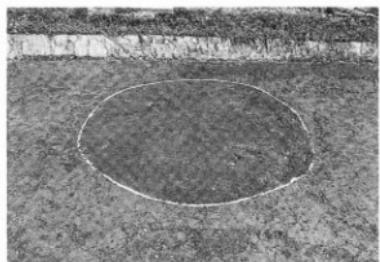
SE 03 井戸 断面（南西から）



SE 04 井戸 完掘・断面（北から）



SE 04 井戸 種出土状況（北から）



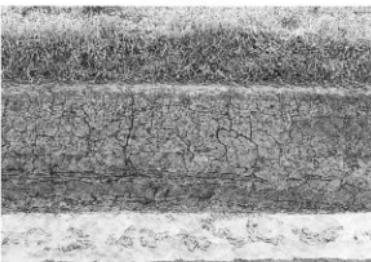
SE 05 井戸 検出（北から）



作業風景



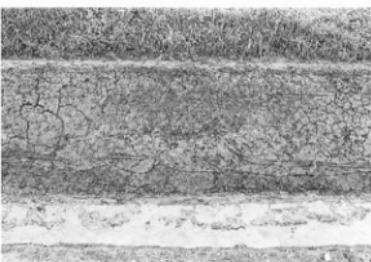
SX 05 水田状造構（西から）断面①



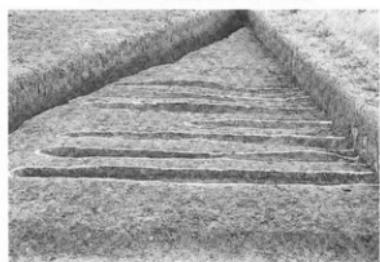
SX 05 水田状造構（西から）断面②



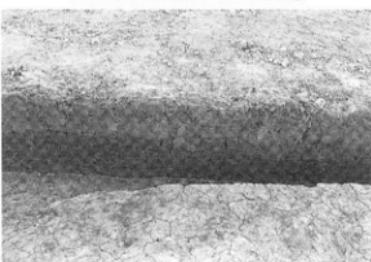
SX 05 水田状造構（西から）断面③



SX 05 水田状造構（西から）断面④

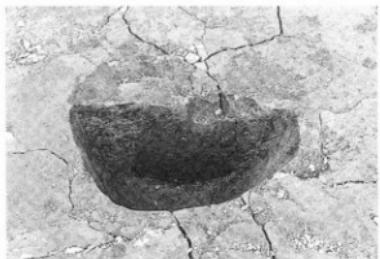


SX 06 烟 完掘（北東から）



SX 06 烟 断面（北西から）

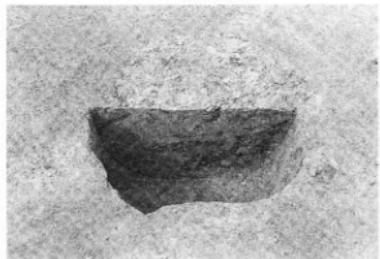
写真図版 20 SE 05 井戸、SX 05 水田状造構、SX 06 烟



PP 68 断面（西から）



PP 71 断面（南から）



PP 75 断面（南から）



PP 76 断面（南から）



南側飛び地小柱穴群 検出（西から）



作業風景

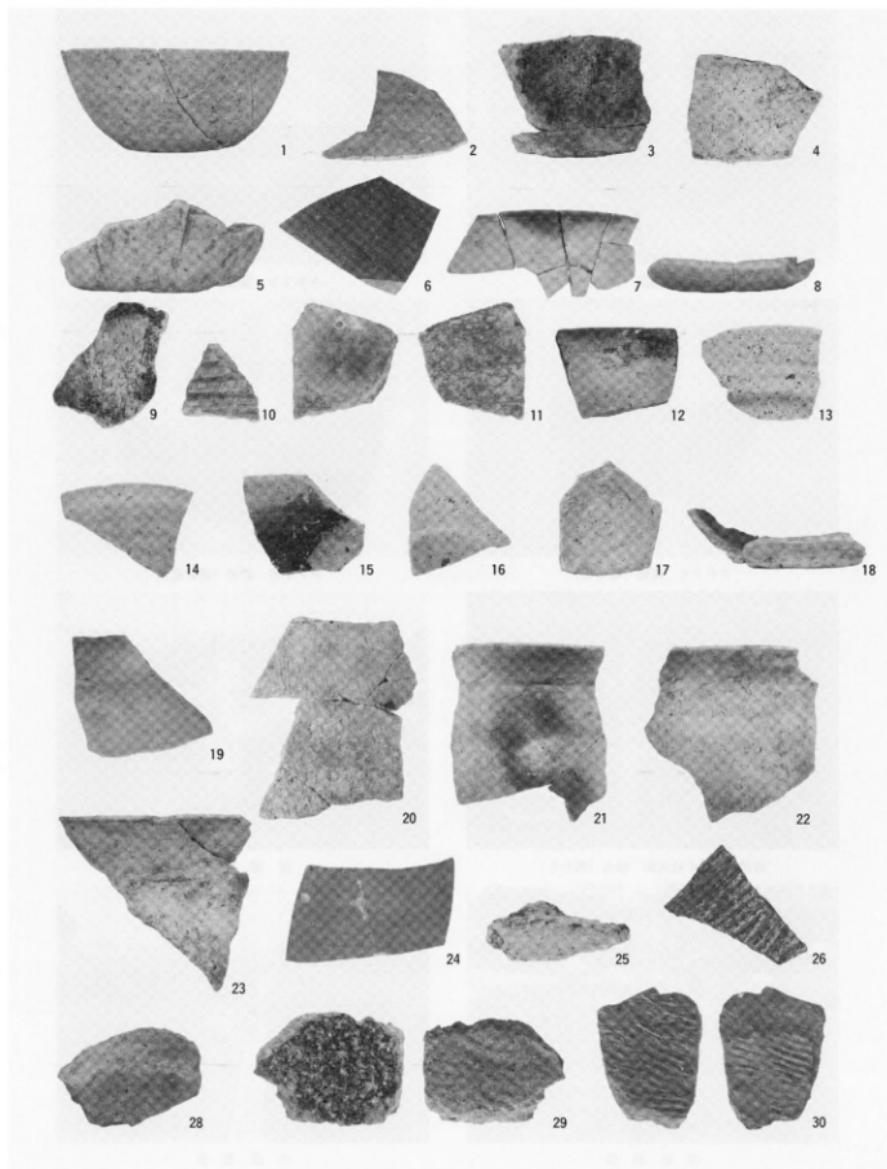


作業風景

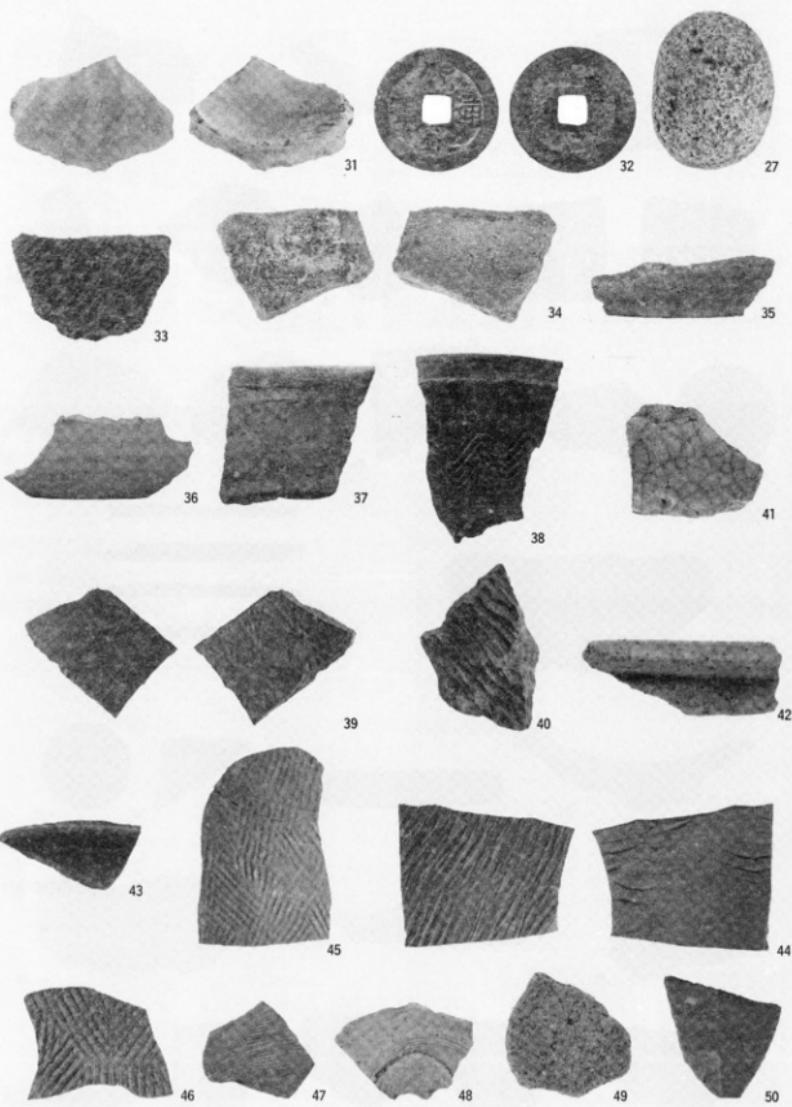


作業風景

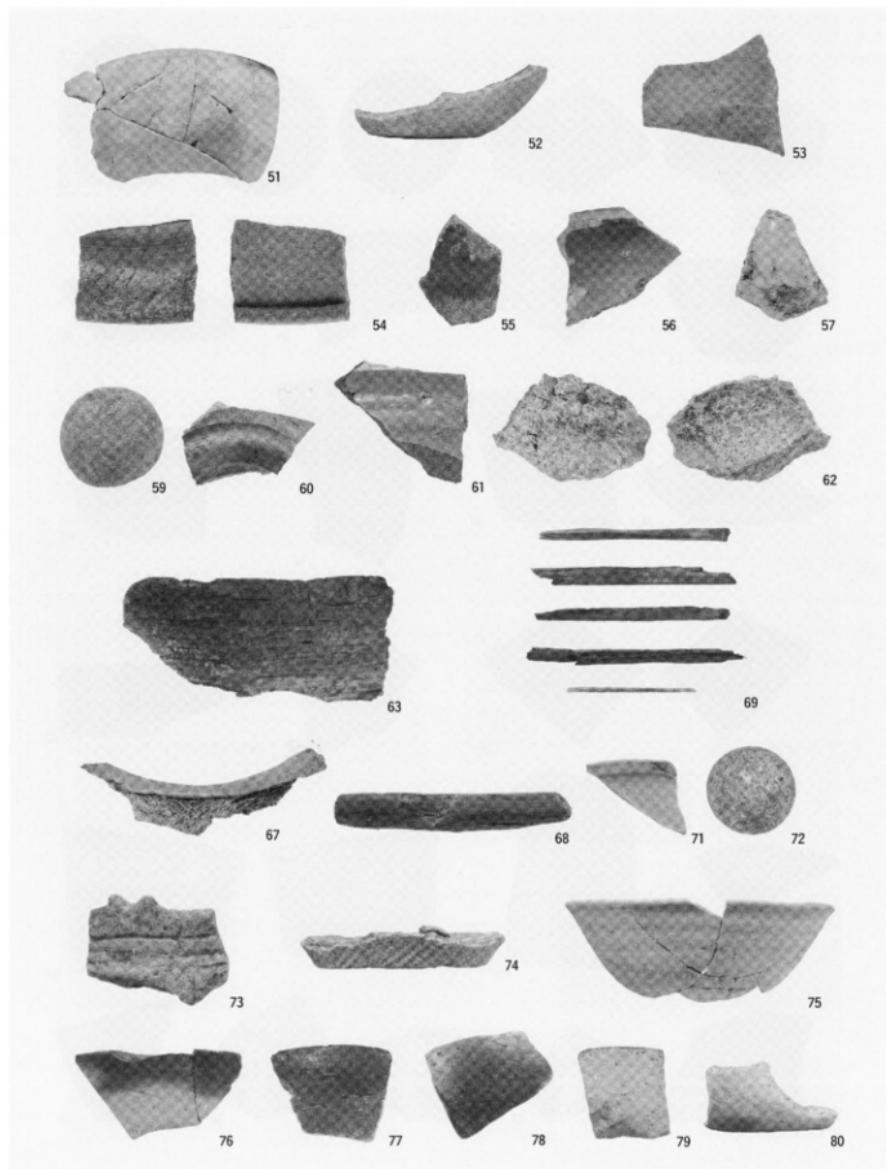
写真図版 21 小柱穴群、作業風景



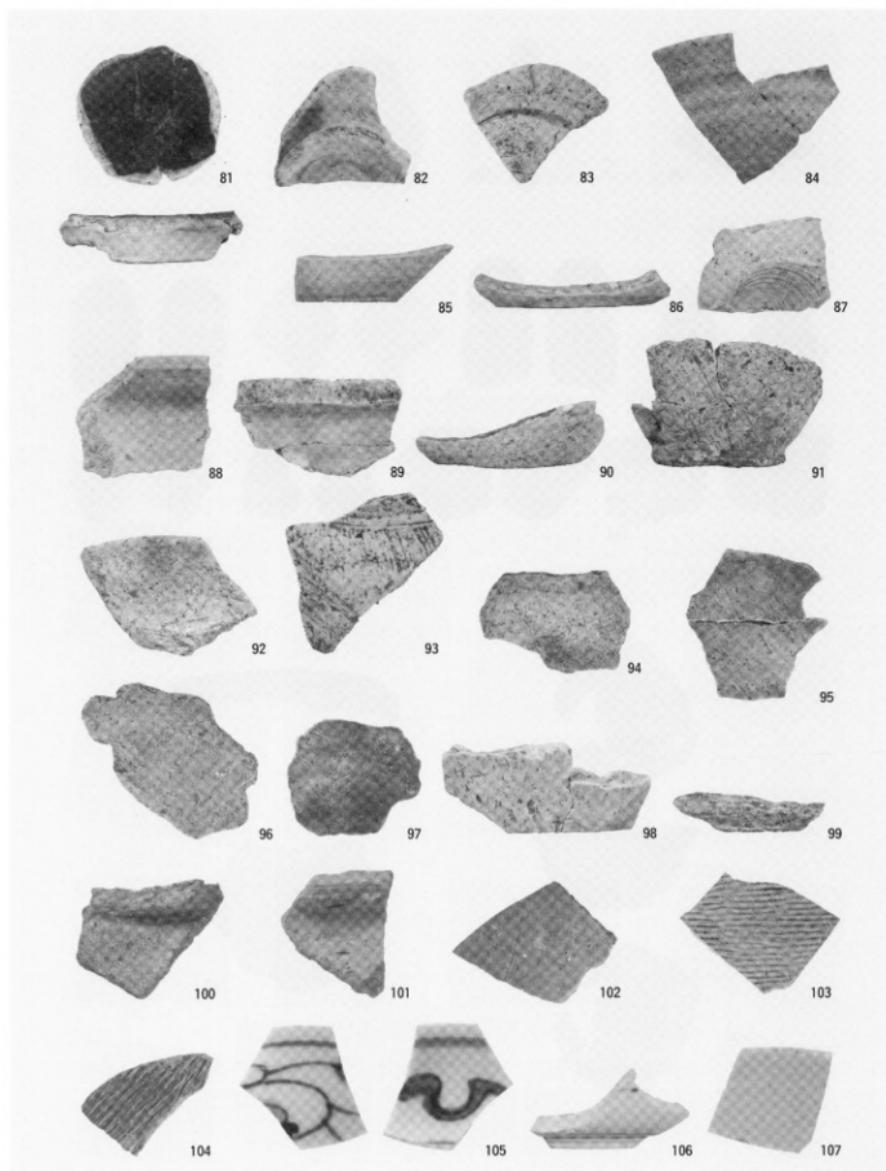
写真図版 22 遺構内出土遺物 1



写真図版 23 遺構内出土遺物 2



写真図版 24 遺構内出土遺物 3



写真図版 25 遺構外出土遺物 1



108



109



110



111



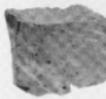
112



113



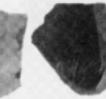
114



115



116



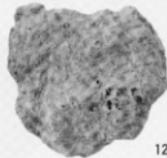
118



119



120



123

写真図版 26 遺構外出土遺物 2

## 報告書抄録

| ふりがな          | どうのうえいせきだい2じはくつちょうさほうこくしょ   |                                   |  |   |   |  |   |  |
|---------------|---|-----------------------------------|--|---|---|--|---|--|
| 書名            | 道上遺跡第2次発掘調査報告書  |                                   |  |   |   |  |   |  |
| 前書き名          | 経営体育成基整備事業白山地区間連施設発掘調査報告書   |                                   |  |   |   |  |   |  |
| 巻次            |   |                                   |  |   |   |  |   |  |
| シリーズ名         | 岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書   |                                   |  |   |   |  |   |  |
| シリーズ番号        | 第518集   |                                   |  |   |   |  |   |  |
| 編著者名          | 丸山直美・高橋聰子   |                                   |  |   |   |  |   |  |
| 編集機関          | (財)岩手県文化振興事業団蔵文化財センター   |                                   |  |   |   |  |   |  |
| 所在地           | 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田第11地割185番地 TEL (019) 638-9001  |                                   |  |   |   |  |   |  |
| 発行年月日         | 2008年12月8日  |                                   |  |   |   |  |   |  |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地   | コード<br>市町村                        | 北緯<br>遺跡番号   | 東經<br>° ° °   | 調査期間  | 調査面積   | 調査原因  |  |
| 道上遺跡第2次       | 岩手県奥州市<br>前沢区白山字<br>合野46-1番地  | 03382                             | NE47-0045  | 39度<br>04分<br>30秒   | 141度<br>09分<br>61秒  | 2006.08.01<br>~<br>2006.09.19                                    | 2,561 m <sup>2</sup><br>(本調査 :<br>整備事業白山<br>地区に係る<br>緊急発掘調査<br>m <sup>2</sup> ) |  |
| 所収遺跡名         | 種別  | 主な時代                              | 主な遺構   | 主な遺物  | 特記事項  |  |   |  |
| 道上遺跡第2次       | 散布地<br>集落跡  | 縄文時代<br>平安時代<br>中世後半~近世初頭<br>時期不明 | 堅穴住居<br>土坑<br>掘立柱建物<br>カマド状造備<br>大溝<br>溝<br>井戸<br>水田状遺構<br>畑<br>柱穴列<br>柱穴群 | 2(1)棟<br>1基<br>4棟<br>20(5)基<br>4(3)基<br>1条<br>18(4)条<br>5(1)基<br>1箇所<br>1箇所<br>1列<br>103(22)個 | 縄文土器片<br>土師器・須恵器片<br>陶磁器片<br>青白磁小皿蓋片<br>常滑産広口盤片<br>陶磁器片<br>石鉢片、獣骨、ケヤキ板材<br>陶磁器片 | *テフラ EPMA 分析を実施<br>*堆積土壌のプランクトオパール分析を実施<br>*遺構外から青銅製六器1点が出土している。 |   |  |
| 要約            | 道上遺跡第2次調査は、北上川右岸に形成された冲積平野の標高地上に立地する。標高は31m前後で、現況は傾斜である。北側にはH17年度の調査区が道路を挟んで隣接する。今回の対象面積2,561 m <sup>2</sup> のうち、561 m <sup>2</sup> は確認調査で、当該区域廻しでは遺構プランを検出した段階での記録に留めている。発掘調査の結果、遺跡は縄文時代から近世に至るまでの散布地および発掘であることが判明した。中央調査区からは人骨で囲まれた限界跡の可能性のある掘立柱建物が検出されており、中世後半~近世初頭の豪族屋敷の例として新たな資料を追加することとなった。特筆されるのは調査区西~中央にかけて土坑埋立から出土した常滑広口盤片、青白磁小皿蓋片、および遺構外から出土した青銅製六器である。これらはいずれも12世紀代のものと推測され、古代末期における白山地区をものがたる特殊な遺物として注目される。 |                                   |  |   |   |  |   |  |

( )はこの内確認調査分

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第518集

## 道上遺跡第2次発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業白山地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成20年12月3日

発 行 平成20年12月8日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局農林部農村整備室

〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り7-13

電話 (0197) 35-8443

(財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番地1号

電話 (019) 654-2235

印 刷 (株)橋本印刷

〒020-0015 岩手県盛岡市本町通1丁目15番29号

電話 (019) 652-1354

---

